

とは分つてゐても、しかも如何なる事情があらうとも自分に差し迫るその焦眉の危険から退くことも逃げることも出来ぬのぢや。たゞ自分の隊長に事の次第を知らせて遊坑によつて、その危険を救ふやうにするまでぢや。そしていつ何時自分の身が翼なくして雲に昇り再びまた心ならずも奈落の底に落される時が来るやうと、恐はく待ちながら、自分の立ち場に立つて居るのぢや。けれども若しこれ位ではまだ些細な危険と思はれるなら、それでは二艘の軍艦が船首と船首を衝き合せて、大海の眞唯中で互にもつれ合ひ絡み合ふ、その時の武人の身には尖つた船先の板の間二尺より居るべき處も無いのぢやが、さういふ戦に比べられ、又それに優る危険があるかどうか。しかもその武人は、たとへ自分の身と槍一本の長さも隔つて居らぬところから敵の大砲をさしつけられて、夥しい死の使者が眼前に迫つて来ようとも、僅かに一步を誤れば落ちてネプチューン神の底へ見舞ひに行くとは知りつゝも、尙且つ不屈の勇氣を以てわれを勵ます名譽の念に動かされ、あらゆる射撃の的となつて、その狭い路を敵船へ乗り移らうと争ふのぢや。それに尙更ら驚くべきことは、一人の兵が、世界の終りまでは再び起きて来られぬどん底へ落ち込まぬに、外の兵がその

後を受け持つ。そして若しこの兵が敵のやうに待ち構へてゐるその海へまたもや落ちると、後から後からと、その間に一瞬の隙も置かずにつづくのぢや。これはまことに戰場に於てのみ見られる勇壯剛毅の極みなのぢや。この大砲といふ憎むべき器械の暴威を知らなんだ時代はまことに幸福であつたのぢや。思ふにこの大砲を發明した奴は、この悪魔のやうな發明によつて、卑劣卑怯な武器を以て勇士の生命をやす／＼と取るやうにしたのぢやから、その報いとして地獄に居るに違ひない。してその勇士が勇ましい胸を勵まし躍らせつつ、勇氣と熱誠との絶頂に達してをると、その途端に、どうして来たか何處から来たか分らぬやうな流れ弾か、恐らくこのいま／＼しい飛道具の火蓋を自分で切りながら、その火花の閃きに魂消て逃げた奴の打ち出した流れ弾だらうが、一瞬にしてその勇士の様々の目論見に終りを告げさせ、まだ／＼何十年と長らへてよい者の生命を斷つてしまふのぢや。そこで拙者もこれを考へて来ると、我の生きてをるこの厭はしい時代に、この武者修行の職に就いたといふことを、内心後悔して居ると言はうかといふ氣になりますのぢや。拙者はどういふ危険をも恐れぬとは言ふものゝ、それでもやはり煙硝や鉛のために、折角拙者が

この腕の力とこの劍の切先で、全世界に治く名譽を轟かせられ渡らうとする好機會を奪はれはすまいかと、幾らか不安心になりますわい。しかし何事も神の御意のまゝになるのぢや。拙者もしこの企てに成功すれば、拙者は往昔の武者修行者たちが身を曝したよりも以上の危険に向ふわけぢやから、更に一層の名譽を得ることになりませう。』  
他の人々が食事をしてゐる間中、ドン・キホーテはその口に肉を持つて行くことを忘れて、この長い演説をしたのである。尤もサンチョは、食事をすましてからでも言ひたいことを残らず言ふだけの時間はあらうから、先づ食事をなされと一度ならず主人に勧めた。彼の演説を聞いた人々は、この人が一見常識を備へて、その論ずる事々には道理に適つた意見を持つてゐながら、一旦例の厄介千萬な武士道の問題になつて来ると、情ないほど分別を缺いてゐるのを見て、今更氣の毒な感じを起した。牧師補はドン・キホーテテに向つて貴方が武の爲に辯ぜられたことは、すべて悉く正しい、そして私自身は文の人で、大學出身ではあるが、同じ意見をもつて居りますと言つた。  
彼等は食事を終へ卓布は取り除けられた。そして宿屋の上さんと娘とマリトルネスが、今夜婦人客ばかりで泊るや

うに定めてあつたラ・マンチャのドン・キホーテの屋根部屋を片付けてゐる間に、ドン・フェルナンドは、例の捕虜にその身の上話をしてくれと頼んだ。蓋し、その捕虜がゾライダと共にそこに到着した際にふと洩らした言葉の端から判断すれば、それは異様な興味あるものに相違なかつたからである。これに對して捕虜は、喜んでお求めに應じます。唯氣遣ひなのは、私の物語はお望みほどに面白くなくはあるまいといふことです。しかしお言葉を否むのも何ですから、お話し申しませうと答へた。牧師補やその他の人は彼に禮を言つて、どうぞと附け加へた。さういふ風にせがまれたので、彼は、お命じ下されば宜しいのに、何もお頼みには及びませんと言つて附け加へた。貴方様がたがよくお聞き下さいましたら、大方器用な凝つた細工で拵へ上げた作り話も及びぬ眞實の話しぢやと思つて下さいませう。』この言葉に、人々は銘々の席に着き、深き沈黙を守つた。人々が無言の裡に自分の話を待ち構へて居るのを見て、彼は氣持のよい穩かな聲で次のやうに話し出した。

第三十九章 では捕虜が自分の身の上話

や冒險譚を述べる。



「私の一家はレオン山<sup>レオン山</sup>の中のある村から出ま  
して、財産よりもむしろ親切な物<sup>物</sup>を蓄<sup>蓄</sup>みせぬ氣質ですぐれて  
りました。尤もその邊の部落は一體に貧乏でしたから、私  
の父はどちらかと言へば金持ちとして通つてみました。父  
がもし財産を費すと同様に貯へることも剛巧でありまし  
たら、實際金持ちでありましたらう。父のこの鷹揚<sup>鷹揚</sup>な大ざ  
つばな氣質は、若い時分兵隊をやつてゐたのでそこから來  
たのです。つまり兵隊の生活は、吝<sup>吝</sup>ん坊が物蓄<sup>蓄</sup>みせぬ者  
になり、物蓄<sup>蓄</sup>みせぬ者が放蕩者になる學校なのです。そこで若  
し兵隊でありながら守銭奴である者があつたら、それこそ  
滅多にない怪物<sup>怪物</sup>です。私の父は物蓄<sup>蓄</sup>みせぬところを通り越  
して、放蕩に近い方でした。これは自分の名前や地位を繼  
がすべき子供を持つた有妻の男には決して褒めた氣質では  
ありません。父は男の子ばかりを三人持つてゐましたが、  
しかも皆な職業に就かねばならん位の年頃になつてゐまし  
た。さうなつても父は自分の性癖<sup>性癖</sup>を直す力のないことを思  
うて、その放蕩散財の手段になるものをつまらぬその財産  
を我が身から脱ぎ棄てようと決心しました、それなくばい  
くらアレキサンダー大帝でも吝<sup>吝</sup>に見えたでありませうその  
財産を。それで或る日私等三人を離れた一室に呼んで、さ

うして次のやうなことを申しました——  
「息子たちよ、私がお前たちを可愛がるといふ證據として  
は、お前たちは私の息子ぢやと言へばそれで澤山ぢや。ま  
た私がお前たちを可愛がらんのではないかといふ疑ひを深  
めるには、私はお前等に譲る財産を保管するだけの自中心  
のない者ぢやと言へば、それで十分ぢや。そこで私といふ  
者は父らしくお前たちを可愛がつて、<sup>お前</sup>父のやうにお前  
ちを零落させようとは思はぬ者ぢやと、この後までもお前  
たちに信じて貰ひたいので、私は長い間考へて、熟考の上で  
決心したことをお前等に示してやりたいのぢや。お前たち  
は最早銘々の暮し方なり、せめて年取つてから名利を得ら  
れるやうな職業なりを選ばねばならん年輩になつた。そこ  
で私のしようと思つたことは、私の財産を四つに分ける  
ことぢや。その三つはお前たち面々に同じやうに分けてや  
つて、残りの一つは私の方に取つて置いて、餘命はどれほ  
どあるか知らんが、とにかく天命のつゞく間それで以て暮  
しを立てて行くつもりぢや。しかしお前等は皆な自分の分  
け前を受け取つたら私の差割する路に銘々従つて貰ひたい  
のぢや。このスペインの國には實に尤もと思はれる諺があ  
る——諺といふものは長い間の實際の經驗から出た短い格

言で、残りず眞實ぢやが——私の言ふのは「教會か、海か、  
王様の家か」といふ諺ぢや。これは平たい言葉で言へば、  
立身し金持ちにならうと願ふ者は、教會に行くか、貿易商  
になつて海へ出るか、それとも人も言ふやうに「殿様の御  
寵愛よりは王様の端役<sup>端役</sup>」ぢやから宮中へ入つて王様に御奉  
公するか、その三つに一つをするがよいと言ふことぢや。  
私がかう言ふのは、お前たちの内から、一人は文に従ひ、  
一人は商業に、そしていま一人は戰場で王様へ御奉公して  
貰ひたいのが私の願ひであり喜びであるからぢや。戰場と  
言ふたのは、宮中へ入つて王様のお側に仕へるやうなお許  
しを受けるのは大層むづかしい事ぢやから、戦<sup>戦</sup>ならば、た  
とへ金にはならんでも非常に出世も出来、名譽も得られる  
からぢや。八日の後にお前たち銘々の取り前を、その時に  
なればよく分るであらうが、一文も間違ひなく渡しませ  
う。さてお前たちは今言つたこの私の考へや勧めに従ふ氣  
かどうか言つて呉れい。」

「長男だから、お前が先きに答へよと言はれましたので、私  
は、その財産は分け與へてしまはずに貴方のお好きなやう  
に残らず使つて下さい、私は若い者ですから自分の暮し  
を立てることは出来ずと勧めた後で、父の志に従つて私

は武人の職に就いてそれによつて神と王とに仕へる望みで  
すと言ひました。私のすぐの弟もやはり同様に父の言葉に  
従ひ自分に與へられる分を船に積んで印度へ渡ることに決  
めました。一番若くて、そして私の考へでは一番賢かつた  
末の弟はむしろ僧侶になるか、若くばサラマンカ<sup>サラマンカ</sup>の  
<sup>間</sup>の都、マドリッド<sup>マドリッド</sup>に行つてもつと勉強したいと言ひました。  
<sup>西北</sup>百餘里<sup>あり</sup>にあり、職業を選択してしまひます  
と、父は私らを皆な抱擁しました。そしてその約束したた  
けのことは、間もなく實行致しました。父が銘々にその分  
け前を與へますと、それは確か正金で三千デユカット<sup>デユカット</sup>は四  
<sup>百五十</sup>つづつであつたと記憶しますが、<sup>といふのは、私どもの</sup>  
土地を他人の手へ渡すまいとて私どもの一人の叔父が買ひ  
取つてその代價を拂ひましたから、即ち私たちは皆なこの  
懐<sup>懐</sup>しい父に暇乞ひをしました。がそれと同時に私はこの老  
年の父をそんな乏しい金で暮させるのは不人情と思ひまし  
たので、私は自分の三千デユカットの内から二千だけを強ひ  
て父に渡しました。軍人になるに用なものを用意する  
にはその残りだけで十分と思つたからです。二人の弟も私  
の例に動かされて銘々一千デユカットづつを父に贈りました  
ので、父の許には現金で四千デユカット残ることになりまし



たが、その上父の許には父の分け前で賣らずに残して置いた三千デユカットの價格の土地がありました。すでに申したやうに、とう／＼私らは、父や今言ひました叔父に暇乞ひをしました。行く方も残る方も、少からず悲しんで涙を流し、二人の老人は、折もあらば善きにつけ悪しきにつけどう暮してゐるか消息をせよと私らに頼みました。私らはさう致しますと約束しました。そして、父に抱擁され祝福を受けますと、私らはめい／＼一人はサラマンカへ、一人はセヴィルへ、そして私はアリカンテ スペインの東海岸の港 へ出發しました。私は其處へ行つて、ゼノア人の船で今丁度ゼノアの港へ向つて羊毛を積み出すのがあると聞きました。

『私が父の家を去りましてから、もうかれこれ二十二年になります。そしてその間に私は幾度も手紙を出しましたが、れども、私の方には父のことと弟等のことも一向消息がありません。この年月の間に起つた私の冒険を、いま手短にお話しませう。私がアリカンテを船出して、愉快な船路を経てゼノアに到着し、そしてそこからミラン イタリア北の都市 へ参りました。其處で私の武具や少しの兵士の軍装を調べました。私の心組では、其處からビードモン イタリア北西端の地方 へ行つて勤務するつもりでありましたが、しかし私が既

にアレクサンドリア・デラ・バゲリアへの道中で、アルバ大公爵がフランダース 北海に面した地方で現今ベルジウムあたり へ進軍中であるといふことを聞きました。私は自分の計畫を變へて、この方の隊につき、その部下として戦役に従ひまして、エグモント、ホルン兩伯爵の戦死にも際會しました。そしてデイエゴ・デ・ウルピナといふグワダラジャラの名將の麾下の旗手に昇進いたしました。私がフランダースに着いてから暫くすると、あの評判のよい法皇ピウス第五世陛下がヴェニスやスペインと聯合して、共通の敵トルコ軍に當られるといふ報知が來ました。トルコ軍は丁度その頃、海軍を以てヴェニス領の有名なサイブラス島を占領して、ヴェニスに悲しむべき莫大な損害を與へたのでありました。其實として知られたところでは、われ等の國王ドン・フィリップ陛下の肉身の兄弟に當られる、アウストリアの沈着無双なドン・ジョン殿下が、その聯合軍の總司令官になられるといふことでありました。そして戦備は既に十分に出來てをるといふ世間の噂でありましたから、それやこれやで私の心は動かされ、來るべき大戦役に従軍したさで一杯になりました。そこで、機會があり次第隊長に昇級すると信じてよい譯合もありましたし、また殆んど確實な約束もありましたけれども、私

は自ら好んで一切を棄て、單身イタリーへ行くことに決心し、その通り實行しました。それはちやうどドン・ジョンがゼノアに到着して、ヴェニスの艦隊と聯合するためにネーブルスへ進まうとしてゐる時で、私には非常に仕合せでした。後になつて彼はメッシーナで聯合しました。つまり、私はもはやその時は、自分の軍功に依つてと言ふよりは、寧ろ僥倖で歩兵の一隊長といふ名譽の役目に昇進して、この光榮ある遠征軍に従つてゐるのでした。そして其時こそ——それまで世界萬國の人々が信じてゐた迷信、海上ではトルコ軍は決して負かされないといふ迷信が破られたので、キリスト教國に取つては非常に日出度い日ですが——その日こそ即ち、オットマン オスマン朝の別名 の高慢不遜が打ち挫かれたその日こそ、その日討死したキリスト信徒等は、生き残つて凱旋した者よりも却つて一段幸福であつたので、すべての人が悦んで居る中に、私だけは惨めでありました。何故といふに、もしこれがローマ時代でありましたら、私は海軍の王冠でも望んでよかつたでせうが、それとは打つて代つて、その史上に有名な日の夜になると私は、手には手枷、足には足枷をはめられることになつたのです。それはかういふ譯でありました——剛膽な運のよい海賊

の、アルジールスの王エル・ウチャリが、マルタの旗艦を（それには唯三人の騎士が生き残つてゐて、しかし彼等は重傷を蒙つてゐました）襲撃して分捕つたので、私どもの乗つてゐたジョン・アンドレア旗艦はそれを救ひに行きました。そして私はかういふ場合にせねばならぬ通り、その敵艦の甲板に跳び込みました。すると敵艦は今まで攻撃してゐた船を棄て走り出しましたので、私の部下は甲板の後につくことが出來なくなりました。そこで私は唯一人、防ぎ切れないほどの多勢の敵の中に残されました。結局私は澤山の傷を受けて生捕りにされたのです。皆さん御承知の通りエル・ウチャリはその總艦隊を率ゐて逃げました。そこで多勢の人々は歡喜に満ちてをる中に、私は唯一人の悲しめる者として、また多勢の人々は自由になつた中に唯一人の捕虜として、彼の手中の虜となつてしまつたのです。さういふのは、一萬五千からのキリスト信徒が虜となつて残らずトルコ艦隊の梃を漕いでゐましたが、あの日に悉く憶れてゐた自由を回復したからです。『私はコンスタンチノーブルへ連れて行かれました。其處でトルコのセリム大王は、私の主人のエル・ウチャリが戦争でよくその義務を果し、且つその勇武の證としてマルタの



指令旗を分捕つた手柄で海軍提督に任じました。その翌年の七十二年千五百七十私は三個の燈火提督の乗艦のある旗艦の漕手こぎ手になつてナブリーノギリシヤ半島の北端にある海灣に居りました。そこで私は、碇泊してゐたトルコの總艦隊を分捕りする好機會の失はれたのを目撃しました。實はトルコ艦隊についてゐた水兵も親衛兵も残らずこの港の内今に襲撃されるものと信じて、襲撃を受けないうちにすぐさま陸上へ逃げようと、荷物もバサマック即ち靴もちやんと用意してをるといふ位、それ程キリスト教徒の艦隊はトルコ人を恐こまがらせてをりましたのですからな。しかし天の命令はこれとは違つて居りました。それは何も私たちの方を指揮してゐた大將の過失や怠慢からではありません。たゞキリスト教國の罪惡の爲でした。自分を懲らす刑罰の道具を私たち自身が持つて居るといふことは神様の思召しであるからです。實際、エル・ウチャリはモドンといふナブリーノ近くの島へ逃げてその軍勢を上陸させ、その港の口を堅めてドン・ジョンの退却するまで靜かに待つて居りました。この戦ひでは「獲物」といふ軍艦が分捕られました。その船の艦長は名高い海賊バルバロッサの息子でした。それを分捕つたのは「牝狼」といふネーブルスの旗艦でしたが、その船は、戰の雷電、部

下の父、向ふところ敵なき大將と言はれた彼のサンタ・クルズの侯爵、ドン・アルワロー・デ・バザンに指揮されて居りました。私は、この「獲物」の分捕の時に起つた事柄を話さずには居られません。

『そのバルバロッサの息子は餘りに殘酷で、餘り自分の奴隷をひどく取扱つてゐましたので、「牝狼艦」が肉迫して來て、方にこの船を分捕りにしようとするのを見るや否や、櫓を漕いでゐた奴隷等は、直ぐさま櫓を投げ棄て、丁度船尾の臺の上に立つてしつかり漕げと叱咤してゐたその艇長を引つ捕へました。そして彼を船尾から船首の方へ、座席から座席へと順送りしながら毆りつづけたのですから、帆柱のところを少し通り越した時には、もうその魂は地獄に着いてしまつて居りました。今も申した通り、それほどまでに彼はその部下を苛酷に取扱ひ、また部下は彼を憎んで居りました。

『私たちはコンスタンチノブルへ歸りました。そしてその翌年、即ち七十三年にドン・ジョンがテュニス地中海沿岸の國を攻めて、その國土をトルコ人から奪つてムーレー・ハメットの所領としました。それでかの世界無雙の殘忍兇猛なムーア人ムーレー・ハミダが、その國へ歸つて再び治めるとい

ふ希望を水泡に歸せしめたといふことが知れ渡りました。トルコ大王はこの損失を非常に殘念がりました。しかしこの民族の凡てがもつてゐる例の賢さで、彼は、彼よりも一層餘計に乗り氣になつてゐたヴェニスの人々と和を結びました。そして明くれば七十四年、トルコ大王はゴレッタテュニスの岬と、ドン・ジョンがテュニスの近くに半ば築きかけて置いた砦とりでとを攻撃しました。かういふ出來事の起りつゝあつた一方で、私は自由を得る望みも全くなく櫓を漕いで居りました。少くとも身の代金を拂うて自由を得るといふ望みはなかつたのです。何故なれば、私はこの不幸を父に書き送るまいと堅く決心してゐたからです。遂にこのゴレッタも落ち、その砦も落ちました。それ等の場所にはトルコの常備兵が七萬五千と、アフリカの各地から集まつたムーア人やアラビヤ人が四十萬以上も押し寄せて、しかもこの大軍にはそれ相當の軍用品や軍器が備はり、また一人一握りづつの土を以てども、ゴレッタとその砦とを蔽ふことの出來るやうな、多勢の工兵がをりました。第一に落ちたのはゴレッタです。それまでは難攻不落と思はれてゐたのですが、それが落ちました。それは守備兵等の過失からではありません。彼等は出來得る限り成すべき限りを盡したのです。た

だそれは、砂漠の砂地ではいかに斬壕がたやすく作られるかといふ實例を示したからです。普通は一尺も掘れば水が出るのですが、トルコ軍は二ヤードも掘つたが水が無かつた。そこで彼等は澤山の砂囊を積み上げて、その砦の城壁を見おろす程に高い堡壘を築いて、其處から恰も高い封堞の上からするやうに突進したので、砦の方では一人として踏みこたへて防ぐことは出來なかつたのです。

『一般の意見では、この守備兵はゴレッタに立籠らずに、却つて上陸地點に敵を迎へ撃つて野戦をすればよかつたのぢやと申します。しかしそんなことをいふ人は出鱈目にさういふので、かういふ事柄に通じてゐないのです。何故といへば、ゴレッタや砦の中に、わづかに七千の兵が居つたとすれば、いかに死を決したればとて、そんな小勢でもつて、どうしてあれだけ多勢の敵に對して攻めかゝつたり守つたりすることが出來ませう？ そしてまたどうして援けのない城砦が落されずにすみませう？ まして敵の國內で、必勝を期した大軍の敵に取り圍まれたことでも。しかしながら、あの武勇絶倫のチャールス五世に依つて占領されたといふ記念を保存するより外には何の役にも立たず、たゞ無益に費される無限の富の蠶食者であり海綿であり蠶魚で



あるに過ぎなかつたこの害毒の源泉なる伏魔殿を、打ち毀させ給うたことは、これはスペイン國に對して示された神の特別の恩寵であると、多くの人々は思ひました。私もやはりさう思ひました。現在もまた將來も、その記念を不朽にする爲めらしく、その城砦はこれを支へる爲めに必要があつたのですが、その砦も同じく落ちました。しかし守備の兵士が非常に勇敢に頑強に戦うて、敵の二十二回の總攻撃中に二萬五千人以上を殺した程であつたので、トルコ人はジリジリと乗り取つた次第です。城内に生き残つた三百人の中に、一人として傷を受けずに生捕りされた者はなかつたので、それは彼等の勇氣と決心と、如何に彼等が頑強に防戦して銘々の立場を保つたかといふことの明白な證據です。その鹹湖の眞中にあつた小さい堡壘、即ち塔は、ソレンシアの紳士で名高い軍人ドン・ジュアン・ザノゲラの指揮の下にありましたが、これは降伏しました。全力を盡して防戦したゴレッタの指揮官ドン・ペドロ・フェルタカルレローは捕虜になりましたが、この敗戦のことで非常に心を傷め、捕虜としてコンスタンチノブルへ護送される途中で死んでしまひました。またガブリオ・セルベロンといふその砦の指揮官も捕はれました。この人はミランの紳士で優れた

技師でまた非常に勇敢な軍人でした。この二つの城砦で名高い人が多勢死にしましたが、その中には、セント・ジョン勳章の騎士バガノー・ドリアといふのがゐりました。この人は、その有名な兄弟のジョン・アンドレア・ドリアに對して示した非常な寛大を以て知られる通り、なか／＼鷹揚な性質の人でした。そしてその死を一層悲しましめたものは、彼がアラビヤ人等に斬り殺されたことです。彼は自分の砦の陥つたのを見て、自分の信頼してゐたアラビヤ人等の勤めるがまゝにムーア人に身を賣して、タバルカといふ珊瑚取り場に使はれてゐるゼノア人たちが守つてゐる、海岸の小さな堡壘即ち屯所へ向つて落ちました。そのアラビヤ人等が彼の首を打つて、それをトルコ艦隊の司令官に持つて行きました。するとその司令官は、わがカステリアで「裏切りは喜ばれても裏切り者は憎まれる」といふ諺の通りに、そのアラビヤ人等を成敗しました。つまりその贈り物を持つて来た者どもが、それを生捕りにして來なんだといふ廉で縛り首にしたといふ噂です。

『その砦で生捕られたキリスト教徒の中には、ドン・ペドロ・デ・アングキラルといふ人が居りました。この人はアングキラル州の何とかいふ處の生れで、この砦の旗手をして

ゐたなか／＼名高い珍らしい智慮のある軍人でした。この人は殊に所謂詩といふものに堪能でした。私がかう申すのはこの人が不圖したことから、私の船に、しかも私と同じ席に連れて來られて、同じ主人の奴隷になつたからです。そして私らがまだその港を出ぬ前に、この人は碑銘風の短詩を二つ作りました。一つはゴレッタに就いて、いま一つはその砦に就いて。私はそれを暗記して居りますから何なら歌うて見てもよろしいのです。それは人に好かれても嫌はれはすまいと思ひます。』

この捕虜がドン・ペドロ・デ・アングキラルの名を口にするや否や、ドン・フェルナンドは自分の二人の仲間を見た。そして三人とも微笑した。そして捕虜がソネットのことを話してゐる時に彼等のうちの一人が言つた、『貴方が話をお進めならん内に、今仰有つたそのドン・ペドロ・デ・アングキラルはその後どうなりましたかそれを聞かして下さいませ。』

『私の存じてゐます限りでは、』と捕虜は言つた、『あの人はコンスタンチノブルに二年居りましてから、アルノート人に身を賣して、ギリシャ人の間諜と連れ立つて脱走し

ました。しかしあの人が再び自由の身になつたかどうかは分りません。尤も私はなつたらうとは思ひますがな。と言ふのは、その後一年してから、コンスタンチノブルでそのギリシャ人を見かけましたからです。しかしその脱走の結果がどうなつたかは尋ねることが出来ませなんだ。』

『なる程、それでは貴方の仰有る通りです。』とその紳士は答へた。『そのドン・ペドロは私の兄弟ですよ。そして只今あれは私どもの村に丈夫で富裕で妻を迎へ三人の子供をもつて居りますよ。』

『そりやどうも結構なことで、神様のお慈悲は有難いことでございます。失うた自由を回復することに比ぶべき幸福はこの世にないと私は思ひますからな。』とその捕虜は言つた。

『そればかりではありません、私はあれの作つた短詩も知つて居りますよ。』と紳士は言つた。

『それでは、貴方の方が私よりもよくお歌ひなされるでせうから、どうぞそれを歌つて下さい。』と捕虜は言つた。

『承知しました。』と紳士は言つた、『ゴレッタを歌うたのはかうです。』



第四十章 には、捕虜の物語がつづく。

ソンネット

『この死ぬべき穀より釋き放たれし幸ある靈は、  
 武勳の報いとして祝福せられ  
 我等がこの下界より昇り行きて、  
 天上と不滅の世繼にこそなりたれ。  
 力のつゞく限り汝らは戦ひに  
 義憤と輝く熱誠とをもて力を盡しぬ。  
 砂漠の地をも環れる海をも  
 自らと敵との血汐に染めて  
 生命の血流れて萎えたる腕こそは衰へぬれ、  
 剛き心は遂に撓まざりき。  
 敗れたれども、汝らは勝利の冠を得たり。  
 弔はれつゝも、なほその落城は勇ましかりき。  
 汝ら劍と砦との間にありて、  
 天には榮えを地には譽を得たればなり。』  
 『私の覺えて居るのも全くその通りです。』と捕虜は言つた。  
 『さうですか、それでは、砦の方の歌を、』と紳士は言つた。

『それは、私の記憶が間違つて居らねばかうです——』

ソンネット

壘壁も天守塔も壊滅に歸したれば、  
 その荒廢の地より、その粉砕せる死骸より、  
 ますら男の子の三千の靈は天翔りつゝ  
 輝く惠の御殿に住まんと昇り行きぬ。  
 刀折るゝまで、攻め寄する敵を防がんと  
 努めしも、あはれ、あだとなりぬ。  
 今は早や死あるのみ、  
 戦ひ疲れし残んの誰彼も遂に斃れぬ。  
 あゝこの焦げ乾きたる地こそ  
 往にし日も今も亦  
 無限の哀れを留むるところなれ。  
 さはれ、かくまで清き靈の天に昇りしことなく、  
 あらがねの土より  
 またかくまで勇ましき人の死骸の地上に在りし例も聞  
 かず。』  
 これ等のソンネットは面白いと思はれた。また捕虜は自分  
 の同僚の消息を聞いて悦んだ。そして自分の物語を續けて  
 話を進めた——

『ゴレッタもその砦も手に入つたので、トルコ軍は——その  
 砦の方は既に掠奪すべき一物も残つてゐないほどの状態に  
 なつてゐましたので——ゴレッタの防禦設備を取り除ける  
 やうに命じました。そしてその工事をなすだけ早く容易に  
 するのために、三ヶ所から掘り返しました。しかし何處も手  
 弱な箇所と思はれる部分は見當りませんでした。さう申す  
 のは古い壘壁の方のことで、一方あの「小法師」ジャコメ・バ  
 が築いた新壘壁の建ち残つてゐた方はやす／＼と崩れまし  
 た。やがてトルコ艦隊は勝ち誇つて意氣揚々とコンスタン  
 チノーブルへ凱旋しました。それから二三ヶ月すると私の  
 主人のエル・ウチャリは死にました。この人の又の名はウチャ  
 リ・ファルタクスといひましたが、それはトルコ語で「痲病カサバの  
 脱宗者」といふ意味です。あの人はさうでした。トルコ人  
 の慣はしとして、銘々のもつてゐる長所や短所からその人  
 の名前を付けるのです。その譯は、トルコ人の間では、オット  
 マン家の流れを汲んだ家門に屬するたつた四つの苗字しか  
 ありません。そこでそれ以外の人々は、今申しました通り、  
 銘々の身體の瑕や人品からその姓名を附けます。この「痲  
 病」も大王の奴隷になつて、十四年の間船漕ぎをしてゐまし

たが、四十三歳を越した頃に、或る時執つて居ると一  
 人のトルコ人に毆られたので、それを遺恨にその男に復讐  
 したいばかりで、信仰を棄て、脱宗者になりました。そ  
 してその人は非常に剛勇なところから、大王の一番の寵臣  
 等が出世の手段にするやうな、そんな卑しい方便に頼らず  
 に昇進して、アルジールの王になりました。そしてその  
 後海軍司令官といふ、トルコ大王國での第三位の要職につ  
 きました。この人はカラブリアの生れで、心がけの立派な  
 人で、その部下の奴隷には大層情をかけてやりました。こ  
 の人は三千の奴隷をもつて居りましたが、その死後は遺言  
 書に差圖してあつたやうに（大王は誰が死んでもその後繼  
 になつて、その故人の子供等と財産を分けますので）、そ  
 の大王とこの人の一族との間に、奴隷は分配されました。  
 私はヴェニスのある脱宗者のところへ行くことになりました  
 た。この人は或る船の客室のボーイをしてゐたところをウ  
 チャリに捕はれて、それから非常に可愛がられて遂にその一  
 番お気に入りの若者となりました。この人は世にも最も殘  
 酷な脱宗者となりました。その名はハッサン・アガといひ非  
 常に金持になつて、アルジールの王になりました。この  
 人に従つて私はコンスタンチノーブルからアルジールへ



行つたので、スペイン國が非常に近くなりまして私は寧ろ悦びました。といつて別に身の不幸を誰かに書き送らうと思つたのではありません、たゞ今までコンスタンチノールでは、いろ／＼にして脱走を企てたけれども、遂に都合よい時も折もなかつたので、このアルジールスではうまい工合に行きはせんか試めして見ようと思つたからです。しかしアルジールスに来てからは、私は心中大切に懐いて居るこの目的を果すには外の手段を見付けようと決心しました。自由を得たいといふ希望をば私はつひぞ棄てなんだからです。そして私の計畫や企てや試みの結果が私の期待通りにならずとも、私は失望してしまはずに、直ぐさま何か自分を支へる新しい希望を、たとへ如何に弱い微かなものであつても捜すなり拵へるなりすることに掛りました。

『さういふ風にして私は、トルコ人のバニョーと呼ぶ建物、即ち牢舎ちやうの中に閉ぢ込められて暮しました。其處には王に屬したのも個人に屬したのも、またアルマセンと呼ばれたのも(それは詰り市有奴隷で、市の公けの仕事や、その他の働きに使はれるものゝことですが)、凡てキリスト教徒の捕虜が禁錮されて居りました。しかしこのアルマセンといふ捕虜になると、市の共有財産で、これと決つた持主があまりま

せんから、たとへ身請け金の算段が出来る者であつても、その買ひ戻しの相談に乗つて呉れる人がないので、なかなか自由を回復することは困難です。これ等のバニョーには今も申しました通り、普通の市民が銘々の捕虜を、取り分け身請けの見込みのある捕虜を容れて置く習慣になつてゐます。といふのは、その身請け金の着くまで安全に住みよく捕虜を保留して置けるからです。王の捕虜もやはり身請けの話のついたのは、その身請け金が遅れない限りは外の仲間と一緒に外へ出て働きはしません。つまりさういふ場合には、その身請けの催促状を急ぎ立て、書かせる爲めに、無理にも働かせて薪を取らせにやりますか、これはなかなか軽い勞働ではありません。

『しかし私は身請け話のついた中に入つてゐました。何故なれば、私が隊長であつたといふことが分つたので、いかに私が身請けの算段の乏しいことや財産のないことを言ひ張りましても、係りの者等はそれを聞き入れずに、とう／＼私を紳士や身請けの見込のある人々の中に入れてしまつたのです。私は一筋の鎖を掛けられました。これは私を安全に繋いでおくといふよりは、むしろ身請けのついてゐるといふ記號しるしなのです。さういふ風にして、私は身請けの記號の

ついた數人の紳士や身分のある人々と一緒に、このバニョーの中で暮しました。しかしながら時々、いや寧ろ殆んどいつも、私たちは空腹や着物の不足で苦しみました。最も心を痛めたものは、私の主人がキリスト教徒に加へる無理非道な前代未聞の大虐待を到るところで見聞きすることでした。毎日主人は或る者を絞め殺し、或る者を磔はりけにし、また或る者の耳を斬り落しました。そしてそれは皆ほんの少しの立腹からすること、いや寧ろ全く何の譯もなくすることでしたから、トルコ人等もあの人は唯さうしたい爲めに、生れつき全人類に對して殺伐な性質をもつて居るからさうするのだと認めてゐたのです。たつた一人、何につけてもあの人の氣に入つたのは、何とかデ・サーゴドラこれは言なくセルヴンテス自身のことである、彼自身から捕虜になつた經驗がある。といふスペインの軍人でした。この人は長年の間その人の記憶に残るやうなこともすれば、自分の自由を回復する爲めのあらゆる手段も取りましたが、つひぞ一度も主人が自分で殴つたこともなければ、人に命じて殴らせたこともなく、またきつい言葉一つ言ひかけたこともありません。そしてこの人がしたいろ／＼の事の中で、一番軽いことに對しては、磔はりけにされはせぬかと私等は皆恐おそがつて居りました。またこの人自身も一度なら

ずそれを氣遣つたことがありました。この軍人のしたことをお話しすれば、きつと私自身の身の上よりも貴方がたを面白がらせ驚かせることと思ひますが、どうも時間がないので残念です。

『餘談はさて置き、私たちの牢舎ちやうの中庭は或る身分の高い富裕なムーア人の持ち家の窓から見下されて居りました。そしてこの窓は、ムーア人の家の普通のものと同様に、窓といふよりはむしろ銃眼とげまに類して居りました。その上厚い目の込んだ目隠しで蔽はれて居りました。やがて、はからずも或日のこと、外のキリスト教徒は皆な働きに出拂つてゐたので、後に残つてゐる私と三人の仲間とは、共に牢舎の高臺たかに出で、暇潰しに鎖を身にかけたまゝでどの位跳べるか試つて見て居りました。そしてふと眼を上げて見ますと、その小さい鎖された窓の一つから一筋の蘆あしが出て来てその端に布ぬいがくつ附けてあるのです。そしてその蘆は丁度私たちに取りに來いといふ合圖あひまをするやうに前後に振動ふれかされて居りました。私たちはそれを見成つてゐましたが、私と一緒にゐた一人がその蘆の下へ行つて、それを落す積りなのかそれともどうしようといふつもりなのかとその下に佇たりました。しかしその男がそこに行くと同時に蘆は上にあが



つて、丁度かぶりを振つて「いゝえ」といふやうに左右に動きまわりました。そのキリスト信徒が戻つて来ると、蘆は再び垂れて、前のやうにお出で／＼をするのです。私の仲間のいまま一人の者が行くと、やはり最初の男にしたと同じことが繰り返されました。そこで第三の者が出て行つたが、やはり第一第二の者と同じ結果になりました。これを見て私は自分の僥倖を試めさずには居れなくなりました。そして私とその蘆の下へ行きますと忽ちそれが落ちて来て、バニョーの中の私の足許に落ちました。私は慌てゝその布を釋きました。するとそれに結び目があつて、そこには十シアニー入つておりました。これはムーア人の間に通用する不純金貨で、私共の金にすれば一シアニーが十リールに當ります。『この賜物を私が喜んだことは言ふまでもありません。そして嬉しくもあるがまた不思議でもあるので、一體われわれに、いや取り分け私に、かういふ幸運が降りかゝるとはどうしたわけかと頻りに想像を逞しうしました。何故といふに、私以外の者にこの蘆を落すことは明かに嫌やであつたのですから、この恩恵は私の爲めであるといふことが明かであつたからです。私はその有難い金を取つて、その蘆を折つて、そして元の高臺へ戻りました。それから窓を見

上げますと、その開いた窓から、眞つ白い手が出て、そして、非常に手敏しく其處を閉めるのが見えました。これから推して私たちはこの親切をしてくれたのは、その家に住んでゐる婦人に違ひないと想ひました。そして私たちはその親切を感謝するしるしに、頭をさげ體を曲げて兩腕を胸の上に組み合せて、ムーア人の風によつて敬禮をしました。間もなくその同じ窓から蘆で拵へた小さい十字架が差し出され、そして直ぐさま引つ込められました。このしるしによつて私たちは、或るキリスト教徒婦人がその家に捕虜になつてゐて、そしてその婦人が私たちに親切をしてくれたのだと信ずるやうになりました。しかし私どもの眼についた、その手の白さや腕環やはこの考へを棄てさせました。尤もキリスト教徒の脱宗者ではないかとも見ました。この種の婦人を奴隷に有つてゐる主人たちは喜んで往々正妻にすることがあります。それは自國の女よりも、さういふ女を好むからです。私たちの當て推量は、すべて事實とは大いに外れて居りました。その後といふものは、その十字架の差し出された窓を、宛ら北極星でもあるかのやうに見成り眺め暮らすのが私たちの唯一の仕事でありました。しかし少くも十五日の間に、十字架も手もその他何の

しるしも見ずに過ぎました。そして一方にはその家に住んでゐるのは何人であるか、またそこにキリスト教の脱宗者があるかどうかを確かめようと一生懸命苦心をしましたけれども、そこに住んでゐるのは、ムーア人中の顯職であるラ・パタアルゼリアのサラ、港附近にある城砦の城主を以前に務めてゐたハヂ・モラトトといふ名前の身分高い富裕なムーア人だといふことより外には、誰も何も知らしてくることは出来ませなんだ。しかし私たちがあそこからまたもや金貨が降つて来ようなどとは夢にも思つてゐない時に、突然蘆が現はれて、その端にはこの前より大きい結び目のある布が附いて居るのを見ました。そして今度も、前と同じく、バニョーには人が居らずにがら空きになつてゐる時でした。

『私たちは前の通りに、同じ三人の一人々々を私の前に行かせて見ました。しかし蘆は私以外の誰にも渡されませんでした。そして私が近づくと蘆は落ちて来ました。私がその結び目を釋くと、スペインの金貨が四十枚とアラビヤ語で書いた書付とが出て、その書付の終りには大きく十字架が描いてありました。私はその十字架に接吻して、その金貨を取つて高臺へ戻りました。そして皆は揃つてお辭儀をしました。また例の手が現はれたので、私はその書付を讀

むといふ合圖をしました。すると窓は閉ぢられました。私どもは皆この出来事を喜びはしたものの、わけが分らなくなつてしまひました。そして私たちは誰もアラビヤ語は分らないので、その書付に書いてあることを知りたい心は山々でありましたが、それを讀んで貰ふ人を見付けることはなかつた。かゝる困難でありました。遂に私はムルシアスペインの縣の或る脱宗者にこれを打ち明けようと決心しました。その男は私に非常に友情を有つてゐると申しまして、私に頼まればどんな祕密でも必ず守ると誓つてゐたのです。これは、脱宗者が再びキリスト教徒の土地へ歸らうと思ふ時は、身分のある捕虜から證明書を貰つて行く慣はしであつたからです。その證書はどんな形式でも差し支へはないのですが、つまり某々の脱宗者は常にキリスト教徒に親切を盡し、且つ機會あり次第邪宗の地を脱走せんと熱望してゐた立派な人物であるといふやうに身元を保証するのです。或る者は善用する爲めにかういふ證明書を手に入れるし、或るものはこれを悪用します。彼等がキリスト教徒の土地へ劫奪に行つて、もし偶々難船したり捕虜になつたりするのとがある時、その身元證明書を出して見せて、この證書によつて分る通り自分等が来た目的はキリスト教徒の土地に在



住する爲めである、またその爲めにトルコ人の中に交つて侵略しに來たのであると申し立てます。かういふ風にして最初の氣勢を折つて面倒を逃れて置いて、何の害も受けぬうちに教會と和睦します。それからまた折を見て元の異教國へ歸つて、前の通りの者になるのです。しかし今一方にこんな證明書を正直に使ひ、キリスト教徒の土地に留まるものもあるのです。さて私のこの友達も今申したやうな脱宗者の一人でした。彼は私の同僚の残らずから證明書を貰つてゐましたが、それには私たちは出來るだけ言葉を強めて彼の爲めに證明しておきました。それで若しムーア人どもがその證書を見つけてもしたら、彼を生きたがら焚いたであります。

『彼がアラビヤ語を非常によく知つてゐて、話せるばかりでなく書けもすることを私は知つてゐました。しかし私は先づすつかり事情を打ち明けしないで、自分の監房の小穴から偶然この書付を見付けたから読んで呉れいと頼みました。彼は書付を開いて稍暫らくじつと見入つて、それを翻譯しながら口の中でぶつ／＼言つて居りました。それが分るかどうかと私が尋ねますと、彼はすつかり好く分ると答へて、もし私がこの書付の文字通りの意味を知りたいと思ふ

なら、ペンとインキとを貸して貰ひたい、さうすれば一層満足に翻譯が出來るからと言ひました。私たちは彼の求めるものを直ぐさま與へました。彼は少しづつ翻譯して行つて、やがて譯し終ると言ひました、『このムーア人の書面に書いてあるものを残らずスペイン語にすればかうです。そして御注意なさらねばならんことは、これに "Tela Negra" とありますのは、「われ等の聖母麻女マリア」といふ意味です。』と。私たちはその書付を読みました。それはかう書いてありました――

「私が子供の時に、私の父のつれてをりました一人の奴隷が私の國の言葉でキリスト教徒の祈禱を教へてくれました。そしてレラ・マリエンのことをいろ／＼と話してくれました。そのキリスト教徒は死にました。そして私は彼女が地獄へは行かないでアラビヤ語のところで行つたことを知つて居ります。その後私は彼女を二度も見ました。そして彼女は私に、キリスト教徒の國へ行つて、貴女を非常に愛しておるでになるレラ・マリエン様を御覽なさいと申しましたからです。私はどうして行けばよいのか存じません。私はこれまで多勢のキリスト教徒を見ました。けれども貴方の外には一人として紳士らしい方を見かけませなんだ。

私は年若く美しく、持つて行くべき澤山の金があります。お出來になることなら御一緒に參れるやうに工夫をして下さい。そして貴方さへおいやでなくば、向うへ行つてからは貴方は私の夫です。しかしおいやでも、決して私は歎きはいたしません、レラ・マリエンは私の嫁ぐべき方を見付けて下さいませうから。私は自分でこれを認めました。これを讀んでお貰ひなさる人に氣をおつけ下さいまし、決してムーア人はお信じなさいませぬ。彼等は皆信義のないものでございますから。私はこれを誰にも打ち明けて頂きたくありませんから、そのことでは非常に心配して居ります。若しこれを私の父が知りましたら、忽ち井戸の中へ投げ込んで上から石で埋めませうから、私の蘆の端に絲をつけて置きますから、御返事をそれに結むすんで下さい。もし貴方のためにアラビヤ語の手紙を書いて呉れる人がありませんなら、手眞似で返事をして下さい。レラ・マリエン様は私に分らせて下さいませう。レラ・マリエンとアラト、あの捕虜の言つた通りに私が始終接吻してをりますこの十字架とが、貴方を守護して下さいませうやうに。」

『この手紙の文言を見て驚き喜ばずに居られませうか、皆さんの判断に任せます。そして驚きも喜びも、ともに非常

なものでありましたので、遂にその脱宗者はこの手紙が偶然に見付かつたものではなく、私たちの中の何人かへ實際に向つて、若し自分のこの推測が眞實ならば、自分は貴方がたを自由の人にして上げるためには自分の生命も惜しまぬから、どうか自分を信用して残らず打ち明けて下さいと頼みました。さう言ひながら彼は懐中から金屬十字架の聖像を取り出しました。そしてこの神の御像御像にかけて、私たちに忠誠を盡し、私たちがどのやうなことを打ち明けても秘密を守ると言つて頻りに涙を流して誓ひました。彼は罪深く性の悪い者ではありましたが、神は眞實深く信じてゐたのです。また彼はこの手紙を書いた婦人の助けによつて自分も私たちも残らず自由を得て、自分はその罪と無智によつて、現在腐つた手足のやうに、切り離されて居る聖母教會の懷なごみへ復歸するといふ多年の望みの目的を達するであらうと思ひもし、また殆んどそれを豫想してゐたのです。この脱宗者は頻りに涙を流し、悔恨の太息をついてかう言ひますので、私たちは事の次第を残らず打ち明けることに皆々同意したのです。そこで何事も隠さずに残らず十分に話しました。私たちは例の蘆の現はれた窓をも指さして教



へました。それによつて彼はこの家といふことに目標をつけて、そこには何人が住んでゐるか特別に注意を拂つて確かめようと決心しました。私たちはそのムーアの婦人の手紙に返事をやる方がよからうといふことになりましたので、一瞬の躊躇もなく脱宗者は私の口授する言葉を書き下しました。それは私が今お耳に入れるものと一言一句違はない手紙です。この事件の中についた重要なことは一つとして私の記憶から脱けてをりません。また、その後も息のある間はさうありませうからな。そこでムーアの婦人への返事はかうでありました――

「令嬢よ、眞の神御身を護り、神の眞の母なる恵まれしマリエン、御身を護りたまはんことを。聖母は御身を愛し給ふが故に、御身の胸にキリスト教徒の國に行かん心を起させられました。聖母に願ひをかけて、與へ給うた命令を成就することの出来る道を示し給へとお祈りなさい、さうすればお慈悲深いお方故必ずお聴き容れになりませう。私としても、また私と共に居る凡てのキリスト信者としても、力の及ぶ限りは、たとへ死すとも御身の爲めにすることを誓ひます。御身のしようと思はれることは、必ず手紙で私に知らして下さい。私も必ず返事を上げませう。大いなる

神は御身がこの書面によつて御覽の通り、お國の言葉を立派に話せもし書けもする一人のキリスト信者の囚徒をば私どもへ授けて下さいました。それ故御心配なく思ふまゝを残らずお知らせになつても差し支へありません。お申し越しの通り、キリスト教徒の土地へお着きになつた時は、御身は私の妻です。私は善良なキリスト教徒としてそれを誓ひます。キリスト教徒はムーア人よりも好く誓ひを守ることを御承知下さい。令嬢よ、神とその聖母マリエンの、御身を護らせ給はんことを。」

「この手紙を書いて疊んで待つてゐるうちに、二日経つてから、前の通りバニョーはがら空きになりました。そこで直ぐさま高臺へ行つて例の通り散歩しながら、その窓から何か蘆の合圖がありはせぬかと見てゐると、間もなくそれが現はれました。それを見るや否や、私は誰がそれを差し出してゐるか見分けることは出来なかつたけれども、例の手紙を示して、その蘆に糸をつけよといふ合圖をしました。しかし既にその蘆には糸がついてゐました。そこで私は手紙をそれに結び付けました。そして間もなく私たちの星は平和の白旗なる小さな包みを持つて再び現はれました。その包みが落ちたので拾ひ上げてその布を開いて見ると、金貨

銀貨とりませて五十クラウン（二圓五十錢）はから上入つて居りました。これは私たちの喜びを五十倍にもして、自由を得る望みを強めました。ちやうどその夜例の脱宗者は私たちの許へ歸つて来て、私たちか聞いてゐたムーアはその家に住んでゐること、その名前はハヂ・モラトリーと云つて、すばらしい金満家であること、その財産全部の跡取りのたつた一人の娘があること、しかもその娘がこのアルゼリア國に並びない美人であるのはこの市中の評判であること、また五六人の總督たちがその娘を妻に申し受けようとして来たこと、しかし娘はいつも結婚を嫌やがつたことなどを聞いたと言ひました。その上、その娘はキリスト教徒の女奴隷をもつてゐた。それはもう死んだといふことも聞いて來ました。これ等は残らずかの手紙の内容と合ひました。私たちは直ぐさまその脱宗者と、どういふ手段を用ゐてそのムーアの婦人を連れ出し、また我々一同皆がキリスト教徒の領内まで逃げたものと相談しました。そして結局今のところはこのまゝにしてゾライダ（つまり、これが今マリアと呼ぶ）ばれたと思つてゐる彼女の名前です）からの、第二の消息を待つことに決めました。何故と言へば、彼女を措いては、何人も此等の困難を切り脱ける方法を見付け得ぬのは私た

ちに明白であつたからです。私たちがかう決めた時に、その脱宗者は、何も御心配はいりません、貴方がたを自由に差し上げるか私の身を殺すかですと言ひました。四日の間バニョーは人で一杯でした。その爲めに例の蘆の出現もその間だけ遅れました。しかし四日経ちますと、バニョーはいつもの通りがら空きになつたので、蘆が現はれて、それには目出度い結果を豫想させるやうな嵩ばつた包みがついて居りました。蘆と包みとは私のところへ落ちて來ました。そして私は一通の手紙と、外の貨幣の混らない金貨ばかりの百クラウンとを見出しました。脱宗者も居合せましたので、私たちの監房へ入つて、その手紙を讀ませました。すると彼はかういふ風に讀みました――

「貴方様、私はスペインへ渡る工夫を考へ出すことが出来ません。またレラ・マリエン様へお尋ね致しましたけれど、どんな工夫も教へて下さいません。私の出來ますことは唯この窓から澤山の金貨を貴方に差し上げることだけでございます。その金で貴方御自身とお友達との身請をなさつて、その内のお一方をキリスト教徒の領内へお遣はしになり、そしてあちらで船を買つて外の方々を迎ひに來てお貰ひなさいませ。さうすれば私は海岸近くのババゾン門（羊の門）に



「リス市にある私の家の花園に居りますから来て下さい。この夏中は父や召使とも一緒に其處で暮らします。貴方はあそこから、夜分に、無事に私を連れ出して船へ連れて行って下さることが出来になります。そして貴方が私の夫におなり下さることは、よく覚えておいて下さい。さうでないと私はマリエン様へ貴方を罰して下さいさうに祈りません。もし信用してその船を求めにおやりになる人がありませんなら、貴方御自身を身請けなさつて御自分でお出下さい。何故と申せば貴方はキリスト教徒で紳士でおいでなさいますから、他の人よりも確かに戻つて来られませうから、御自身であの花園をよろしくお見覚え置き下さるやうに願ひます。今度そちらで散歩してお出でになるのを見ましたら、その時こそパニョーに人の居らぬものと思つてお錢を澤山差し上げませう。神の貴方を護り給はんことを。」

「第二の手紙の文言と申身はかうでありました。これを聞いておの／＼自ら自分こそその身請をされる者にならうと申し出で、船を買ひに行つても立派に几帳面に約束通り歸つて来ると誓ひました。私もやはり同じ申し出をしました。しかし脱宗者はこれに全然反對して、今までの経験に照らして見ると、自由になつた者はその入牢中に立てた誓ひを

中々守らぬから、皆な揃つて一緒に行かないうちに一人だけやるといふことには、どんなことがあつても賛成しないと言ひました。それは、これ迄もしばしば身分のよい捕虜たちが、この方法を探つて一人の男の身請け金を拂つてやつて、そしてその身請けをしてやつた人々を迎へに来るやうにとてブレンシア海岸の海港やマジョルカ島のバレーリツク群島の一などへ三本帆柱の船を用意するだけの金を持たせてやりました。しかし、さういふ男は決して再び歸つて来ません。つまりそれは、自由を取り返したことや、それを失ひはせぬかといふ心配から、世の中の一切の義理が心の中から消えてしまふのです。そこでその脱宗者は自分の言つたこととの眞實を證據立てる爲めに、ほんの近頃或るキリスト信者の紳士の身の上にふりかゝつた出来事を話して聞かせました。それは驚くべき事件が常住不斷に起りつゝあるこの地でさへ、又となほどの不思議なことでありました。要するに、その脱宗者の話の最後はかうでした——出来る事でもあり、またせねばならぬことといふのは、私たちキリスト信徒のうち一人を身請けするつもりその金を自分に呉れることだと言ふのです、さうすれば自ら商賣人になつて、テテアンモロッコの海港迄海岸に沿うて商賣をするといふ口實の

下に、このアルジール市で一艘の船を求め。そしてその船の持主になれば、私たちを残らずパニョーから連れだして、船へ乗せるやうな方法を案出するのは雑作もないことであらう。殊にあのムーアの婦人が言つた通り皆な身請けするだけの金を呉れれば尙更である。何故といふに、一旦自由になれば白晝船出することも、世にも容易いことである。しかし最も困難なのは、ムーア人等は如何なる脱宗者に對しても、海賊に行く大船であれば格別、一切船を貸しもしせねば賣りもせぬことである。蓋し小さい船を買ふ人は、とりわけそれがスペイン人であると、たゞキリスト教徒の領内へ逃げるために欲しがるものと思はれてゐるからである。しかし一人タガリン文章の初めを見よのムーア人が居りますから、あれを仲立て、船の買ひ入れや商品の利益分けに一口入れれば、この面倒を脱れられる、そしてさういふ具合にごまかして、その船の持主になつてしまへば、後のことはもう成就したのも同じである。併し私にも私の仲間の人々にも、あのムーア婦人が洩らした通り、船を買ひにマジョルカへ私をやるといふ方法が却つて好いやうに思はれはしたもので、私たちはこの男に強ひて逆らひ得なかつたのです。といふのは、もし私たちがこの男の言ふ通りにしなかつたら、

私たちが告發し、もし私たちとゾライダとの關係を發くことにもなれば、私たち一同の生命を失ふ危険に逢ふかも知れぬと心配したからです。そのゾライダの身代りに私たちは皆な生命を捨てる積りでは居りました。そこで私たちは自分の身を、神様とこの脱宗者との手に任せることに決心しました。それと同時にゾライダへ返事を出して、貴女の御忠告はレラ・マリエンの賜はつたやうに結構と思ひますから、凡て仰有つた通りにします。そしてこのことを延ばすか直ぐに實行するかは、たゞ貴女のお心一つで決りますと言つてやりました。私は重ねて彼女の夫になることを誓ひました。かうして、その翌日偶然にもパニョーがら明きになりましたので、いつもとは違つた時刻に、彼女は蘆や布を用ゐて金貨で二千クラウンと一通の手紙とを呉れました。その手紙には今度のジュマに、即ち金曜日に、彼女は父の花園へ行くことになつてゐるが、しかしその前にもつと金を呉れるとありました。そしてまた、もしそれで足りないなら、知らせてさへ呉れれば幾らでも言ふだけ上げます、私の父はその金の無くなつたことには氣が附かない程に澤山もつてゐるし、お負けに鍵は皆自分が預つて居るから、とありました。



『私等は即座に脱宗者へ船を買ふために五百クラウンを渡しました。そして私は八百クラウンで自分を身請けしました。その金をその頃たま／＼このアルジールスの市に來てゐたアレンシアの商人に渡して、その商人から、今度アレンシアの便船が着き次第この人の身請け金を拂ひますからと保證して貰つて出獄したのです。何故かうするかと言へば、もし商人が即座にその金を拂へば、その私の身請け金はずつと前からアルジールスに來てゐたのに、この商人が自分の利益の爲に今迄置して置いたのだと王に疑はれるからなのです。實際私の主人はどんな事があつても即座には金の拂へない位抜ひにくい人であつたのです。美しいゾライダが花園へ行くといふ金曜日の前の木曜日に、彼女はまた千クラウンだけ呉れました。そして自分の出處のことを念を押して、もし私が身請けされたら、直ぐさま父の花園を尋ね出して、どんな事をしてよも自分に逢ひに其處へ來る機會を見つけて呉れるようにと頼みました。私は手短にさうする旨を答へて、嘗て女奴隷に教へられた祈禱によつて、私たちの身をレラ・マリエン様へお頼みする事を必ず忘れないようにと彼女へ言つてやりました。それがすんだので私は三人の仲間の身請けをして、バニョーを去らせる運びにしま

した。私だけ身請けをして、金の當てはあるにしても彼等を身請けせずには置けば、或ひは彼等が面倒の種になつて、惡魔が彼等を唆かして、何かゾライダに害を加へるやうな事でもしはせぬかと心配したからです。彼等の身分としては私にそんな杞憂を抱かせるには足らなかつたのですが、それでもやはりこの事では危いことをしたくありません。そこで私は自分と同じ方法で、即ち例の商人が大丈夫信用して保證をして呉れるやうに、残りの金を渡して、彼等の身請けをして貰ひました。しかし、愈々だと思つたので、私たちの手筈や秘密を打ち明けることはしません。』

第四十一章 には、尙も捕虜の冒險譚が

續く。

『十五日たゞないうちに、脱宗者ははや、三十人以上も乗れる立派な船を手に入れました。そして取引を安全に取りつくるために、彼はアルジールスから二十リグばかりオラン港寄りにあるシエルシェルといふ、乾無花果の商賣の盛んな場所へ一と航海する方がよいと考へました。そして實際さうしました。彼は、先きに申したあのタガリンと俱に

二三度其處へ航海しました。このアルゼリアの國では、アラゴンスペインの北東部の州名のムーア人等や、またグラナダ・ムデジールスペインの西部アラゴン州の州名のムーア人等のことをタガリンと申しま

す。しかしフエス國モロッコではムデジアル・エルチエと呼ばれて、王様からは主に戰のために使はれます。話をもとに歸りまして、脱宗者は船で通りかゝる度に、ゾライダの待つてゐる側の花園から二三町と離れてゐない、とある入江に碇を下しました。そして船漕の二人の若いムーア人と一緒に、わざ／＼そこへ止まつて、祈禱に耽つたり、或は自分が眞劍にやるつもり祈禱を冗談らしくしたりしました。の祈禱を冗談らしくしたりしました。かうして彼は、よくゾライダの花園へ果物を貰ひに行きま

すと、父親は誰とも知らずに果物を呉れました。しかし、彼が後で話しました通り、彼女に口を利く折を得て、自分の何者であるかを、また私に頼まれてキリスト教徒の領内へ彼女をつれて行かうとしてゐることを打ち明けて、彼女を満足させ安心させようとしたのですが、どうしてもそれは出来なかつたさうです。何故といへば、ムーアの女は、自分の良人か父親かに命ぜられない限りは、決してムーア人やトルコ人に逢ひません。けれどキリスト教徒の捕虜に對しては、度を過しはせぬかと思はれる位にまでも、自由

につき合つたり話したりするのです。しかし私としては、もし彼女が彼女に物でも言つたら困つたでせう。それは、彼女の一件を脱宗者に話したことが分れば、ゾライダは恐らくびつくりしたでせうから。しかし神意はそれを好まずして、この脱宗者の殊勝な目的には、良い折を與へられませんでした。彼はシエルシェルへ容易に往復ができることや、自分の思ふまゝに何時でもどんなにでも何處でも碇泊の出来ることや、その組合のタガリンは自分の思ふ通りに従ふといふことや、私は既に身請かすので、この上はたゞ數名のキリスト教徒の漕ぎ手を見付ければよいのであるといふことなどを見まして、私に向つてあの身請を済ました人たちの上に、漕ぎ手として貴方のお望みだけの人を捜し出して、出發日と決めてをる今度の金曜日に雇ひ入れるやうにして下さいと申しました。そこで私はスペイン人で嚴丈な漕ぎ手で、いつでも故障なくこの市を去ることのできる者十二人に話をしました。しかし丁度その時それだけの人を見付けるのは容易なことではありません。何故といふに、巡航に出る船が二十艘もあつて、漕ぎ手は皆なそれに取りられてゐたからです、それでもし或る船主が船の修繕をすませるためこの夏は海に出ないで居るといふことがなか



つたら、とてもそれだけの漕ぎ手は見付からなかつたのですが、幸ひさういふのがありました。その人々は、たゞ今度の金曜日の晩にひとり／＼そつと脱け出して来て、ハヂ・モラト一の花園の邊でぶら／＼しながら私の行くのを待つて居るやうにと、それだけしか言ひませなんだ。私はこの命令を一人々々に別々に與へて、その上若しそこへ行つてから外のキリスト教徒の居るのを見ても、唯私がその場所待つて居れと言つたとより他には、何にも言つてはいけないぞと命じました。

「この端緒がすでに立つたので、今度はも一つ更に大事な處置を取らねばなりません。それはゾライダが前以て準備して待ち受けて居るやうに事の成り行きを知らせて置いて、彼女がまだ／＼キリスト教徒の船は回漕されまいと思つてゐる時に、突然私たちが彼女を連れに行つても、吃驚せぬやうにして置くことであります。そこで私は彼女に話すことが出来るかどうかその花園へ行つて試して見よ」と決心しました。そして出渡の前日、菜を摘むといふ口實を拵へて私はそこへ行きました。私が第一に逢うたのは彼女の父でした。父は、廣くこのアルゼリア國やコンスタンチノールでさへも、捕虜とムーア人との間の媒介になつ

て居る言葉を以て私に話しかけました。その言葉はムーア語でもなくカステイル語でもなく、また如何なる國の言葉でもなく、たゞ様々の國語を混じたもので、それによつて私たちは互ひに了解が出来たのです。即ちさういふ言葉で、彼は私に、この花園に何の用があるか、またお前は誰の奴隷かと訊ねました。私はアルノート・マミセルゲンテスが自分の兄時乗したソル艦の奴隷で、弟と共にスペインへ歸ると答へた。彼はこの人と大の仲好しだとちやんと知つてゐましたから、そして生業料理を拵へるので菜が欲しいのですと言ひました。すると彼は、お前は身請をする方なのかしない方なのか、また主人はお前に幾ら請求するのか、と訊ねました。こんな問答が進んでゐる間に、美しいゾライダはもう先き程から私だと感づいてゐましたので、家を出て花園へやつて来ました。そして、私が前にも申したやうに、ムーアの婦人はキリスト教徒に見られても少しも氣にかけず、また少しも羞かしがりもしませんので、何の躊躇もなくその父と私との立つてゐるところへやつて来ました。それのみか、彼女がそろ／＼近寄つて来るのを見て、父は彼女に此處へ來いと呼びました。私の眼前に姿を現はした時のなつかしいゾライダの優れた美しさや、上品な様子や、立派な輝かし

い衣裳などのことを、こゝで皆さんに申すことはとても私の力には及びません。彼女の美しい頸や耳や髪には、その髪の毛の數よりも多い眞珠が掛かつてゐたと、それだけ申して置きませう。習慣に従つて裸にしてゐました彼女の足頸には、純金のカルカジ腕環も、蹠足の裏の飾もムーアの言葉ではさう申しますので、それをはめてゐましたが、それに飾り着けてあつた澤山の金剛石は、あとで聞きますと、彼女の父親が一萬ドゥブルドゥブルは約十六圓と値ふみしたもので、またその手頸にはめてゐたのはそれよりもつと高價であつたさうです。眞珠は數限りなく、なか／＼美しくございしました。ムーアの婦人たちには大きい眞珠や小粒の眞珠で身を飾るのが一番の誇りでもあり飾りでもあります。それにこの眞珠は、ムーア人の國には他國よりも澤山あります。ゾライダの父は非常に澤山、しかもアルジュールス中での一番純粹なものをもつてゐるといふ評判でした。それにまたスペインの金で二十萬クワン以上ももつてゐるとの評判でした。そこで只今はもう私といふものだけの持主に過ぎませんゾライダも、その時はその残らずの品の持主でありました。そんなに飾つてゐた時のゾライダがどんなに美しかつたらうか、その盛りの時にはどんなであつ

たらうか、それはいろ／＼の苦勞を経ながらも残つてゐる美しさでお分りになりませう。と申すのは、何方も御存じの通り、女によつてはその美貌にも時と季節がありまして、ふとしたことからよくなつたり悪くなつたりします。そして心の思ひは自然に容貌をよくしたり悪くしたりします。尤も大抵の場合には容貌を全く壞してしまひますが、つまり、あの日は、この上なく輝かしく装うてこの上なく美しくなつて私の前に現はれました。とにかく私には自分の見たうちで一番美しいものと思はれました。その上私が彼女に負ふところを考へますと、宛ら救ひと幸福をもたらして地上に天降つた天女に向つて居るやうに感じました。

「彼女が近づいたので、父は自分の國語で、これは私の仲好しのアルノート・マミの捕虜で、菜を買ひに來たのぢやと話しました。

「彼女は會話を自分に引き取つて、例のませこぜの言葉で、私が紳士であるかとか、何故身請けをしませんかとか訊ねました。

「私は、自分はもう身請けされてゐる、そして私の爲めに千五百ゾルタゾルタは約三圓、四八十圓の金貨拂うたのであるから、その値段によつて、私の主人がどんなに私を値ふみしてゐるかはお分



りになりませうと答へました。すると彼女は答へました、「もしお前が私のお父さまの捕虜だつたら、ほんとに、私はその二倍の高さでもお父さまに手放させはせんんだらうよ。何故といふに、お前たちキリスト教徒はいつも嘘ばかりついて、ムーア人を騙さうとて貧乏なふりをするのだもの。」

「お嬢様、それはさうかも知れませんが、しかし本當に私は世の中の誰とでもする通り、またしようと思ふ通り、正直に私の主人と取引をしましたよ。」と私は言ひました。「そして何時お前さんは立ちますか？」とゾライダは言ひました。

「明日と思ひます。」と私は言ひました、「フランスの船がちやうど来てゐて、それが明日出ますから、それに乗つて行かうと思ひます。」

「スペインの船の着くのを待つて、それで行つた方がよくはないの。」とゾライダは言ひました、「お前のお友達でもないフランス人と一緒に行かずに。」

「いゝえ、」と私は言ひました、「尤もスペインから今に船が来るといふ知らせでもあれば、大抵それを待つて居るかも知れませんが、しかしどうも明日立つことになりさうで

ございますよ。何故と申しますと、私は自分の國へ歸つて懐しい人たちに逢ひたくて逢ひたくて堪りませんから、たとへどれほど便利が多からうと、遅くなるのなら、とても次の便まで待つては居れません。」

「きつとお前は自分の國にお嬢さんがあるのですね、それで早く歸つてお嬢さんに逢ひたくて堪らないのですよ。」とゾライダは言ひました。

「私はまだ結婚はしてゐません。しかしあちらへ着き次第結婚するといふ約束はしてをります。」と私は言ひました。

「お前の約束してゐなされるその御婦人は美しいのですか？」とゾライダは言ひました。

「その女の容貌を立派に間違ひなく申しますと、全く貴女にそっくりだと申したい位美しうございます。」と私は言つた。

「これを聞いた彼女の父は、心から笑つて言ひました、「なるほどな、お前さん。私の娘はこの國第一の美人ぢやで、この娘のやうであれば、なかく美しい女に違ひあるまい。お前さんこの娘をよく見なされ、さうすれば私の言ふのが本當ぢやと分らうわい。」

「ゾライダの父は外國語に堪能であつたので、これ等の言

葉や文句は大方通辯してくれました。といふのは、ゾライダはそこで使はれてをる例の雜種語を話したのです。が、自分の意味を言ひ現はすには言葉よりも手眞似を多く用ゐたからです。

「私たちが尙もかうして話して居りますと、一人のムーア人が走つて来て、四人のトルコ人が庭園の垣根の扉を乗り越えて来て、まだ熟してもゐない果物をもいでゐると大聲で叫び立てました。老人もゾライダもびつくりしました。ムーア人等は一般に、また言はず本能的に、トルコ人どもを、しかも殊にその兵隊を恐がつてゐます。兵隊等は自分等の權力の下にあるムーア人に對しては非常に無作法に威張りちらして、奴隷でもかうは扱はぬと思はれる位苛酷に取り扱ひます。そこで父はゾライダに申しました、「娘よ、私がその犬どもに物を言ふ間、お前は家へ入つて引つこんでゐるがよい。それからキリスト教徒さん、お前さんも、その菜を摘んで、無事に行きなされるがよい。そして神のお守りで國へ無事にお着きなされ。」

「私はお辭儀をしました。父は私とゾライダと二人きりにして、そのトルコ人を捜しに行つてしまひました。彼女は父に命ぜられた通り今にも家へ入らうとして居るやうにし

てゐました。しかし父が庭園の木蔭に隠れるや否や、彼女は兩眼に涙を溜めて私の方へ振り向いて申しました。「タメジ、クリスチャノ、タメジ、」それは即ち、「貴方は行くのですか、キリスト信徒、貴方は行くのですか？」と言ふのです。

「私は答へました、「ハイ、お嬢さん、けれどどんなことがあらうとも、貴女を措いては行きません。今度の金曜日には私を待つてゐて下さい、そして私らを見てもびつくりなさいますな。きつとキリスト教徒の土地へ行きますから。」

「これを私は、二人の間の心持ちが彼女にすつかり分るやうに申しました。彼女は私の頸の周りに片腕をなげかけて、弱々しい足どりで家の方へ歩き出しました。しかし時も時とて(またもし神様が違つた方へお導きなさらなかつたら、飛んでもなく不仕合せになりましたらう)、丁度私たちが今申したやうな風にして、彼女の腕を私の頸にかけながら家の方へ歩いてゐるところへ、彼女の父がトルコ人を追ひやつて歸つて来て、私たちの歩いてゐる様子を見ました。また私たちも見られたことに感づきました。しかし素敏い氣轉の利いたゾライダは、その手を私の頸から取り去らずに、却つてますます私にくつついて、私の胸へその頭をもた



せ、その膝を少し曲げて、悶絶の身振り様子を悉く見せるやうに氣を利かせました。同時に一方で私は、いや／＼ながら彼女の身を支へてゐるかのやうに見せかけたのです。父は私たちの居る處へ走つて来て、自分の娘のこの様子を見て、どうしたのぢやと尋ねました。けれど彼女は返事をしませんでした。父は「この娘はあの犬どもが入つて来たので魂消（たまげ）て氣絶したのに違ひない」と言ひました。そして彼女を私から受け取つて自分の胸へ引き寄せました。すると彼女はまた眼を涙で濡らしたまゝ、吐息をつきつゝ重ねて言ひました、「アメジ、クリスチヤノ、アメジ、」——「行け、キリスト教徒、行け」。それに對して父親は答へました、「娘よ、このキリスト教徒は行くには及ばんのぢや。この人はお前に何も悪いことはせなんだのぢや。またあのトルコ人どもはもう行つてしまつたぞよ。吃驚するな。今も言ふ通りトルコ人どもは私の言ふことを聞いて元来た方へ行つてしまつたから、もう何もお前を害するものはないのぢや。」

「貴方様の仰有る通り、お嬢さまを脅かしましたのはあれでござりましたよ、」と私は彼女の父に言ひました。「けれどお嬢さまが私に行けと仰有いますから、御機嫌に逆はぬやうにいたしませう。どうぞ御機嫌よろしう。それから

お許しを得ましたから、もし要ります節はこのお庭へまた菜を頂きに参ります。私の主人の申しますには、生菜料理に使ふ菜としては何處のよりもこちらのが一番よいさうでございますので。」

「要るときは何時でも來なさるがよい。」とハチ・モラトーは答へました。「この娘がかういふことを言ふのは、何もお前さんやその他のキリスト教徒を嫌ふからぢやありませんからの。この娘はたゞトルコ人どもを行かさうとて言うたことで、お前さんではないのぢや。或ひはお前さんにもう菜を摘む時ぢやと言つたのかも知れん。」

「そこで直ぐさま私はこの二人に別れを告げました。彼女は、宛ら胸も裂くるやうな様子をして、父と共に家へ入りました。菜を捜すふりをして私は悠々と花園を廻つて、細かく總ての出入口や家の戸締りや、その他私たちの仕事を容易くする爲めに役立つやうな一切のことを調べました。それを済ましてから私は脱宗者や仲間のところへ行きまして、ありし次第を残らず物語りました。そして私は、あらゆる心配がなくなつて、幸運が私のために差し出してくれた、美しい愛らしいゾライダといふ獲物をば、我がものにすべきその時を、待ち兼ねて居りました。遂に時は経ち、私たちが待

ち兼ねてゐたその日は参りました。そして細心な熟慮と長い評議との末に、私たちが決定した畫策計略を悉く行なつて、望み通り十分に成功しました。私がゾライダと花園で話しましたそのあくる日の金曜日に、例の脱宗者は暮れ方にゾライダの居る場所の殆んど眞向ひに船をつけました。漕手（こぎ手）になる筈のキリスト教徒等は既に用意が出来て、彼方此方その邊に身を隠して皆私を待ちながら、今か／＼と氣も昂つて、その眼前に横たはつてゐる船へ今にも押し出さうと逸つてゐました。彼等は脱宗者の仕組みを知らないので、船の甲板に居るムーア人を殺せば、武力によつて自分の自由が得られるものと思つてゐたのです。やがて私の仲間の者等が姿を現はすや否や、隠れてゐた者どもは私たちの來たのを見て直ぐさま集つて來ました。最早市の門も閉まつた時刻なので、市外には人影も見られません。私たちは一緒に集まると、第一に、ゾライダを連れて行つたがよいか、それとも先づ船に居るムーア人の漕手等を捕虜にした方がよいかと評議しました。私たちがまだあやふやで居るところへ、あの脱宗者がやつて來て、もうすでに時刻が來て、ムーア人どもは残らず守備を撤して大方眠つてゐる時なのに、何をぐ／＼してゐるかと思ねました。私たちは

その躊躇の譯を話しました。すると彼は、第一に船を手に入れる方が肝心である、それは誠にやす／＼と手もなく出來るから、それを済ませてからゾライダをつれに行けると申しました。私たちは皆それに賛成して、もはや何の躊躇もなく、彼を先頭にして船へ行きました。彼は眞つ先きに甲板へ跳び乗りさま、短劍を引き抜いて、「生命が惜しくば何奴も此奴も此處から動くまいぞッ」とムーア語で言ひました。もうその時は、殆んど残らずのキリスト教徒が甲板に上つて居りました。すると臆病なムーア人等は、自分等の船長がかう言ふのを聞いて度膽を抜かれ、一人として武器を取る者もなく（そして實際彼等は少しの武器しか、否殆んど一つももつてゐませんでした）、一と言も言はずにおとなしくキリスト教徒の縛に就きました。そこで私たちは、もし少しでも聲を立てたら、片つ端から斬り殺してしまふぞと脅かしながら、手早く繩をかけました。それを済まして、私たちの中の半分は後に残して、この者等の見張りをさせ、その餘の者は再び脱宗者を案内にして、ハチ・モラトーの庭園へと急ぎました。そして門に當つて見ますと、運よくも錠さへが下してなかつたものゝやうに、やす／＼と開きました。そこで私たちは全く音も立てず靜かに、何人にも見咎



められることなくその家へ参りました。愛らしいゾライダは窓によつて私たちを見てゐました。そしてそこに人影を認めると、忽ち低聲で、私たちに「ニザラニ」かと訊きました。それはつまりキリスト教徒かと聞いたわけです。私はさうだと答へて、彼女に下りて来るやうに言ひました。彼女は私を見るや否や一瞬の躊躇もなく、たゞ一言も答へずに直ぐと下りて来て戸を開けて、私たち一同の前に、言葉にも盡しがたいほど美しく立派に着飾つたその姿を現はしました。私は彼女を見ると忽ちその手を取つて接吻しました。そして脱宗者もまた私の二人の間も同じことをしました。そして残りの人々も、事情は何にも知らぬながら、私たちのそののを見てその通りにしました。それは、私たちは彼女にお禮を言つてゐるので、私たちに自由を與へてくれた人として認めてゐるのであるとしか見えなかつたのです。脱宗者はムーア語で父親は在宅かと彼女に尋ねました。父は在宅で今眠つてゐると彼女は答へました。「それでは起して一緒に連れて行かねばなるまい。」と脱宗者は言ひました。「それからこの立派な邸にある金目の品も残らず。」

も私の父にさはつてはいけません。それにこの家には私の持ち出す物の外には何にもありません。またそれだけあれば貴方がたを皆満足させて十分に金持ちにして上げられます。一寸待つておいでなさい、今に分りますから。」とさう言ひながら、彼女はすぐ来るから皆音を立てずに静かにして居るやうにと私たちに命じて、再び家へ入つて行きました。

『私は脱宗者に向つてゾライダに何を言つたのかと訊きました。彼の答へを聞いて私はゾライダの心に背くやうなことは一切してはならぬと言ひました。彼女は自分でやつと持てる位に金貨の一杯入つた小形の鞆を持つて戻つて來ました。かうしてゐる間に、運悪く彼女の父親は目を醒ました。そして庭の物音を聞きつけて窓のところへやつて來ました。そして忽ち其處に居る者は皆キリスト教徒であるを見て、恐ろしい大きな聲を張り上げて、アラビア語で「キリスト教徒、キリスト教徒！ 泥棒、泥棒！」と怒鳴り出しました。この叫び聲を聞いて私たちは皆非常に慌て惑うてしまひました。しかし脱宗者は我々の危険を見て、人に聞きつけられぬうちに、是非とも此方の方の目論見を果してしまはねばならぬと思つたので、一生懸命に素早くハチ。

モラト一の居るところへ登りました。すると仲間の誰彼もその後には續きました。然し私は殆んど氣絶して私の腕に倒れかゝつたゾライダをよう手離しませなんだ。ところで二階へ上つて行つた連中は非常に敏活に働いて、見て居る間にハチ・モラト一の両手を縛り上げ、その口は手拭で結へて言葉を出せないやうにし、もし一言でも聲を出さうとすれば、即座に殺してしまふぞと言つて引き立て、降りて來ました。娘は父の姿をちらと見ると、見まいとして眼を蔽ひました。父は娘がどうして自から進んで私たちに身を任せてゐるのか分らぬので、魂消してしまひました。しかし私たちに取つて一番大事なことは前進するにありますので、私たちは用心しながら手早く船に戻りました。船では残つてゐた連中が、私たちの上に何か災難が起りはしなかつたかと、心配しながら甲板で待つて居りました。私たちが残らず船に乗り込んだのは、日が暮れて僅か二時間の後でした。そこでゾライダの父の手の細索を釋き、口の手拭を外してやりました。しかし脱宗者は父親に向つて、一言も聲を出してはならぬ、出しでもしたら殺してしまふぞと重ねて言ひました。父親は自分の娘が其處に居るのを見ると、辛さうに吐息を吐き出しました。そして彼女が私にしかと抱かれて

ゐながら、それを拒みもせねば不平も言はず、少しも嫌さうにもせず、静かに凭りかゝつて居るのを見ては尙更でありました。けれども彼は、脱宗者か言つたその重ねの威嚇を實行されはせぬかと恐れて、そのまゝ黙つて居りました。

『ゾライダは今や自分も船に乗せられ、その船は漕ぎ出さうとして居るのに、自分の父親も此處に居るし外のムーア人等も縛られてゐるのを見て、どうかそのムーア人等を釋いて、父を自由の身にしてやるやうに私に頼んで呉れいと、脱宗者に申しました。ゾライダは自分をあれほど可愛がつてくれた父親を、自分の面前で、しかも自分のことの爲めに捕虜として引き立て、行かれるのを見るよりは、わが身を海に沈めたいと思つたのです。脱宗者はこれを私に通辯しましたので、私は喜んでさうしようと答へました。しかし脱宗者はそれは不得策だと答へました。何故といへば、もし放してやつたら、彼等は忽ち全國を煽り立て全市を起たしめて、船足の速い巡洋船を出して私たちを追かけさせるであらう、さうなれば私たちは海にも陸にも遁れ路はないから捕まつて了ふ、それ故キリスト教徒の土地へ着き次第、そこで放してやることしか出来ないと言ふのです。私たち



は皆それに賛成しました。そしてゾライダにも、私たちが即座にその願ひを聞き兼ねる理由を説明してやつたので、彼女も満足しました。やかてわが屈強な漕手等は、無言の喜びと晴やかな元氣とで、めい／＼櫓を取り、みな／＼心から神に祈りをこめて、一番近いキリスト教徒の土地である、マジョルカ島へと舵を向けて漕ぎ出しました。しかしトラモンタナ北風のこまが少し出て、海が幾らか荒れましたので、マジョルカへ眞直の航路を取ることは出来ませんでした。それで止むを得ず、私たちはオランの方へと、海岸に沿うて進みましたが、私たちの方では、シエルシエルの町から見咎められはせぬかと、随分心配せんでもなかつたのです。その町はアルジールから六十哩しかない海岸にあるのです。その上、この航路では、テチュアンから荷物を積んで来る定期の荷船に出逢ふ恐れがありました。尤も私たちは、誰も彼も皆揃うて、たとへ商賣船に出逢うても、それが巡洋船でさへなければ、こちらが負けぬばかりか、もつと安全に航海をし遂げられるやうな船を、分捕ることさへ出来るわけだと信じて居りました。私たちが航海を始めますと、ゾライダは自分の父に顔を合はせまいとて、私の両手の間にその顔を押しつけて居りました。そして私たちが助け給へ

とレラ・マリエンに祈つて居るやうでありました。私たちが三十哩も進んだかと思ふ頃に、夜が明けて、見ると私たちは陸地から三着弾距離ばかりのところ居りましたが、其處は無人境と見えて人影も見えませんでした。しかしそれに拘らず、私たちは、最早海も幾らか穏かになつて居りましたので、力を入れて漕いで、少し沖へ出ました。そして二リーグばかり進んだので、食事をする間、代り番に漕げといふ命令が下りました。船には十分食物の用意がありましたからです。しかし漕手等は、今は決して休む場合でない、漕いでゐない人等には食事をさせてよいか、私たちはどんなことがあらうとも櫓を離さぬと言ひました。それでその通りにしました。しかしやがて強い風が吹き出して、どうしても漕ぎ方を止めて、直ぐ帆を上げてオランの方へ舵を向けねばならぬやうになりました。その他の航路はどうしても取れななだのです。それは悉く非常に敏活にされました。私たちは、沖をうろついてゐる巡洋船に出遇ふといふ他には、何の心配もなく、帆を上げて一時間八哩以上も走りました。ムーア人の漕手等へは食物を與へました。脱宗者は彼等を慰めて、機會が來次第お前たちは自由にしてやる筈だから、決して捕虜にはしないと云ひました。

『それと同じことをゾライダの父親に言ひますと、彼は答へました、「あゝ、キリスト信徒よ、外のことなら何でも、お前等が寛大に優しくしてくれると望まれもし考へることも出来ようけれど、お前等が私を自由にしておられると思ふ程に、私を世間知らずとは思つて貰ひますまい。お前等としても、それ程寛大に私の自由を返してくれる位なら、何もこんな危い思ひをしてまでも、私の自由を奪ふことはなかつたらう。殊にお前等は、私の身分も、また私の身請からどれほどの金額が取れるかといふことも、ちゃんと承知してをるのぢやからな。そこでお前等が、たゞ幾ら／＼とさへ言へば、その望みだけのものは、この私とそこに居る不仕合せな娘との身の代として上げませう。それでなけりや娘ひとりの代としてなりと。何故と言ふに、この子は私の大事な大事な一番の寶ぢやからな。』

『かう言つて、彼は非常に痛々しく泣きましたので、私たちは皆深く氣の毒に思ふし、ゾライダは我知らず父の方を見ました。そして泣いてゐる父親を見ますと、もう堪へ兼ねて私の足許から起つて、走つて行つて、父親を兩腕に懷き、顔と顔を擦りつけて、二人ともはら／＼と涙をこぼしましたので、私たちのうちにも何人かは、その附き合ひ

をせずには居られませなんだ。

『しかし父親は、盛裝してありだけの寶玉を身につけてゐる自分の娘を見ますと、自國の言葉で言ひました、「娘よ、これはどうした事ぢや？ 昨夜、この恐ろしい災難の身にふりかゝらぬ前には、お前は平生の通り部屋着でつたのを見たのに。それぢやのに、今は着飾る暇もなければ、装り立て飾り立てる理由になるやうな、嬉しい音づれを私が持つて來たといふのでもないのに、見ればお前は私らが一番仕合せであつた時に、私が及ぶ限り拵へてやつた最上の衣裳を着けて居るではないか。返事をしなされ。これこそ今の災難よりも餘計に私を心配させびつくりさせるわい。」

『脱宗者はこのムーア人が娘に言つたことを私たちに通辯してくれました。彼女はしかしそれには答へませなんだ。しかし父親は、娘がいつも寶玉を入れてゐた小形の鞆を、それはアルジールに遺して置いて、庭園へは持つて來てゐなかつたとよく覚えてゐたのですが、それをこの船の片隅で見つた時は、尙更に驚いて、一體この鞆がどうして私たちに手に入つたか、また中には何が入つてゐるか、彼女に問ひました。これに對して脱宗者はゾライダの返事を待たずに答へました、「もし、私の一言の返事だけで萬事は分り



ませうから、さういろ／＼のことをゾライダさんにお訊ねなさるには及びません。即ちこのお嬢さんはキリスト信者です、そして私たちの鎖を切つた鐘となり囚はれの救ひ人となつたのはお嬢さんですよ。お嬢さんは御自分から望んで此處へ來られたので、多分こんな身分になられたのを、ちやうど闇から光りへ、死から生へ、悩みから榮えへ、遁れた人のやうに喜んでおいでせう。」

「娘、この人の言ふことは本當か？」とそのムーア人は叫びました。

「え、」とゾライダは答へました。

「お前が本當にキリスト信者ぢやと？ またお前が自分の父親を敵の手へ渡したのぢやと？」と老人は言ひました。

「これに對してゾライダは答へました、「私はキリスト信者でございます、けれどお父さんをこんな處へお伴れ申したのは私ではございません。私はつひぞ貴方を見棄てたり貴方に害を加へたりしようと思つたことはありません。ただ自分に善いことをしようと思つたばかりです。」

「ぢや娘よ、お前は一體自分にどんな善いことをしたのぢや？」と父は言ひました。

「それはレラ・マリエン様にお訊き下さいませ、」と娘は言

ひました、「私よりもあのお方の方がよく貴方に話して下さることが出來ますから。」

「そのムーア人はこの言葉を聞くか聞かぬに、はつと言ふ間もなく眞つ逆さまに海中へ身を投げました。若し彼の着てゐた長い重ねた着物か、暫らくの間水の面へその身體を浮ばせてゐなかつたら、疑ひもなく溺れてしまひましたらう。ゾライダは父を助けてと私たちへ聲高く叫びました。私たちは皆大急ぎで助けにかゝり、その長上衣を掴んで、半ば溺れかゝつて氣絶した彼を引き上げました。ゾライダはこれを見て非常に心を痛め、父の身にすがりついて、すでに事切れたかのやうに、哀れげに痛々しく泣きました。彼を僣伏にしますと、澤山の潮を吐き出して、二時間経つて正氣に歸りました。折から風向きが變つて來たので、餘儀なく陸地の方へ向つて、岸に吹きつけられないやうにせつせと漕ぎました。しかし運よく一つの入江に着きました。それはムーア人等が「カワ・ルミア」と呼び、私たちの國語では「悪い女のキリスト教徒」といふ意味の、一つの小さい出鼻即ち岬の片側にあるのです。一體ムーア人等の間には、スペインを負かしたラ・カワはこの場所に葬られて居るといふ一つの傳説があります。「カワ」はムーア語で「悪い女」に當り、

「ルミア」は「キリスト教徒」に當ります。その上、彼等は已むに已まれぬ場合にでも、此處へ碇を下すことは縁起が悪いとしてゐるので、さうでない場合には決して碇を下しません。しかし今や海が非常に荒れ出したので、私たちに取つては此處は悪い女の休み場であるところか、私たちの救ひの安らかな港でありました。私たちは常に一人の見張りを立て、銘々棧は決して手離さずに、脱宗者か用意して置いた食物を食べました。そして好運の首途を好運に終らせ給ふやうにと、神様やマリア様に皆々一心に祈りました。ゾライダの願ひによつて、父親その他縛られてゐたムーア人等を上陸させるやうに命令しました。彼女は、自分の眼の前にその父を捕へ、同國人を囚徒として置くことは堪へられなかつたし、またその優しい心に忍びなかつたのです。彼等を此處で釋き放したところで、無人境であるから何の危険もないのです。だから出發間にさうしようとして私たちは彼女に約束しました。

驚いてしまひました。しかしゾライダの父を上陸させる段になりますと、今や全く正氣を回復してゐた彼は申しました、「キリスト教徒たち、お前らが私を自由の身にするのを、何故この悪性の女が悦こんで居ると思ひますぞ？ それは彼女が私をいとしと思ふからぢやと思ひなされるか？ なか／＼以て、それは唯私が居れば此奴の卑しい目論見を果たす邪魔になるからぢや。また此奴が自分の宗旨を變へるやうになつたのは、私らの宗旨よりはお前らのが優れとると信じたからぢやと思ひなされるな。それはたゞ私らの國よりもお前等の國に居る方が、餘計に不身持が出来るからぢや。」それからゾライダに向き直つて言ひました（その間私と今一人のキリスト信者とは、彼女に何か無法な行ひでもしかけはせぬかと恐れて、彼の兩腕をしっかりと抑へて居りました）「恥さらしの女子よ、無分別な娘よ。お前は私らの生れながらの敵の手に、この犬どもの手に曳かれて、盲ら滅法に何處へ行く氣ぢや？ お前を生んだ時が忌々しい！ お前を榮耀榮華に育てたのが忌々しい！」しかしなか／＼急には止めさうもないので、私は急いで彼を岸へ上げました。するとそこから大聲で悪口や歎きを續けました。彼はマホメットに呼びかけて、私たちを破滅させ困らせ殺して下



さいと神に祈りました。やがて私たちは帆を上げてしまつたので、もう彼の言ふことも聞えず彼のすることも見えなくなりました。彼はどんなにその鬚髯を引き抜き、その髪の毛を引き抜いて、地べたにのた打ち廻つたこととせう。しかし唯一度その言つてゐることが私たちに聞えた程にその聲を張り上げました。「歸つてくれ、可愛い、娘や、岸へ歸つてくれ。私はお前をすっかり赦してやる。その人らには金をやる。もう金はその人らのものぢやから。そして歸つて来て悲しんで居るお前の親父を慰めてくれ、お前がこのまゝ私を棄て、行けば、私はこの荒磯で死んでしまはうぞ。」

「ゾライダはこれを残らず聞ききました、悲しみと涙を以て聞きました。しかし彼女は其の答へに、たゞこれだけしか言へませなんだ、「あゝお父さま、どうぞ神様が、私をキリスト信者になされましたレラ・マリエン様に、貴方の悲しみを慰めさせて下さいますやうに。私がこれより外にどうすることも出来ませなんだのも、このキリスト教徒たちが、何も私の本心に強ひたのでないことは神様が御存じでございます。たとへ私がこの人たちと一緒に居らずに家に留つて居らうと望みましても、とても私には出来なんだでございませう。それほどもまで私の心はこの一念を果たすやうに私

をそゝり立てました。お父さま、その一念は貴方に悪いものと見えますやうに、私には正しいものと思はれます。」

「しかしこれをその父は聞き取ることも出来なかつたし、彼女がかう言つてゐる時には、彼らはも見えなかつたのです。そこで私はゾライダを慰めつゝ、私たちの船の進行に氣を配りました。船は順風を受けたので、そのお蔭で、大丈夫明日の明け方には、スペイン沖に差しかゝると思はれました。しかし吉い事といふものは、滅多に、いや決して純粹に混りものなしには来ないもので、必ず何かそれに打撃を與へて、攪き亂す凶事を供に伴れて来るものです。が、私たちの運命は、いや恐らくあのムーア人が自分の娘に擲げかけた呪詛は（どんな父親の呪詛にしても、常に恐るべきものでありますから）、私たちをそんな目に逢はせました——即ち、私たちが海の中に出て、日が暮れてから三時間ばかり経つた後、順風のお蔭で漕ぐ骨折りが助かりましたので、残らず帆をあげて、橋は結へ付けて走つて居りますと、私たちのすぐ近くに眞帆を孕ませた一艘の横帆仕立ての船が、向う風に船首を向けて私たちの行手を遮つて居るのを、皎皎と照り輝く月の光りで認めました。そしてもう非常に接近してゐますので、私たちはその船と衝突を避けるために、

餘儀なく帆を下しました。すると向うの方でも、やはり私たちを通らせようとて、うんと舵を抑へて居りました。その乗組の者等は舷側に出て、私たちに何處から何處へ行くのか、何處から来たのかと尋ねました。しかし彼等がこれをフランス語で訊きましたので、例の脱宗者は言ひました、「誰も答へてはならんぞ、きつとこいつらは通航船を片端から掠奪するフランスの海賊ぢやから。」この警戒を守つて、誰も一と言も答へませんでした。然るに私たちが少し前進して、その船が風下になると思ふと、突然二門の砲を發射しました。そして二門とも明かに連續弾を籠めてゐたのです。何故といふに、その一發は此方の橋を眞中から折つて、柱も帆も海に落し、同時に打ち出された他の一發は、船の腹に命中して、そこをすつかり破壊してしまひました。がそれ以上の損害はありません。しかし私たちは沈みかかつたので、助けを呼び、向うの船の者等に、水が充ちて来たから上げて呉れと叫びました。さうすると、彼等は船を停めて、小船を卸して、十二人からのフランス人がおのおの火繩銃を携へて、しかも火繩には火を點けて、その小船にも小人數で、船も沈みかけてゐるのを見て、かうなつたの

は、私たちが彼等に返事をしなかつた無禮のためだと言ひながら、私たちを收容してくれました。脱宗者はゾライダの寶の入つてゐる靴をとつて、何を思つたか誰にも感づかれないうちに海へ落しました。やがて私たちは、そのフランス人等と共に向うの船へ行きますと、彼等は知りたいただけ私たちのことを確かめてから、宛ら不倶戴天の仇敵でもあるやうに、一物も残さず私たちから掠奪しました。そしてゾライダからはその足に絞めてゐた蹠飾までも取りました。しかし彼等がゾライダの身に引き起こしたこの悲しみは、私が氣遣つてゐたこと程には、私を悲しませなかつたのです。その私の氣遣ひといふのは、彼等は彼女から立派な貴い澤山の寶石を奪つた上に、尙も進んで、彼女が何よりも貴いとしてゐる最も貴重な寶をば、彼女の身から奪ひはせぬかといふことであります。しかし彼等の慾は、金錢以外には出ません。しかし彼等のその慾の深さと來たら飽くことを知らぬほどで、その時もまたそれが甚だしく、私たち捕虜の着てゐる着物さへも、それが幾らかになりでもしたら、剥ぎかねないばかりでした。そのうちの或る者は、私たちと一緒に帆布に巻いて海へ擲り込まうと言ひ出しました。一體彼等の眼さすところは、ブレトン人と偽つてスペイン



のどこかの港で商賣をすることなのですから、もし私たちが生かして連れて行けば、強盗犯の露はれ次第罰せられるわけであるからです。しかし私の可愛い、ゾライダの物を剥ぎ奪つた人ですが、その船長は既に手に入つた獲物だけで満足だから、スペインの港には何處へも寄りたくないから、ジブラルタルの海峡を、夜の間にか何時か出来る時通り抜けて、自分等の船出して来たロシニェル海峡の港へ行かうと言ひました。そこで彼等一同は、その船についてゐる小船と、それから後の私たちの短い航海に必要な物とを、私たちに呉れるといふことに一致しました。そしてその翌日スペインの海岸の見えるところに来てから、その通りにして呉れました。それやこれやの嬉しさで、私たちは恰かも何の苦しみも受けなかつたかのやうに、あらゆる艱難も辛苦も忘れてしまひました。失つた自由を回復するうれしさはそれ程です。

『彼等が二樽の水と幾らかのビスケットとを與へて、私たちが小船に乗せたのは、眞晝頃でもありましたらう。そして船長は、どうした憐愍の情に動かされたのか知りませんが、可愛い、ゾライダがまさに乗船しようとする時に、金貨を四十クラウンばかり呉れまして、そして彼女が今着て居りま

すあれだけの着物には、その部下の者等に手を觸れさせませなんだ。私たちは彼等の親切に對して禮を言ひて、小舟に乗り移りました。そして感謝の情をこそ現はせ、怒りはしませなんだ。彼等は海峡の方へ船を進めながら、海面を眺めて立つてゐました。私たちは前方に見える陸地の外には何の目標にも目を呉れず、非常な勢ひで漕ぎ出しましたので、日没頃には早や、夜の更けぬ内に容易く上陸されさうな見込が付きました。しかしその夜は月が現れず、空は曇つてゐましたので、それに私たちはどの邊に居るのか方角も分りませなんだので、仲間の數人の者が主張したやうに、岸に船を進めることは私たちにとつて上分別とは思はれませなんだ。その連中は、たとへ岩石の上でも、人里遠いところでも構はぬから、早く岸へ着けねばならぬ、さうすれば私たちが自然に感じてゐたあのテチュアンの海賊船の心配から救はれるからと言ふのです。その海賊は、暮れにアルゼリアを立つて夜明けにスペインの海岸へ来て、こゝらで大抵獲物を得て、それから家へ歸つて寝るのです。しかし意見を戦はした結果、採用されたのは、徐々岸に近づいて、もし上陸される位海の静かなところがあれば、そこで上陸しようといふことでした。その意見が實行されました。そして眞夜

中すこし前に、私たちは海岸に餘り接近せず、而も上陸するに便利な狭い餘地を残して立つてゐる、或る大きな高い山の裾に近づきました。私たちは小舟を砂濱へ乗り上げました。そこで皆々飛び降りて地面に接吻し、そして喜ばしい満足の涙を流して、主なる神様に、我々の航海中に賜はつた類なきお恵みを感謝しました。私たちは小舟に積んで来た糧食を下ろし、小舟は濱へ引き揚げて置いて、その山を随分上の方へ登りました。何故と言ふに、其處でさへ私たちは安心が出来ず、また現在自分の足の下にあるのは、キリスト教徒の土地であると、心から信じきれなかつたからです。『夜明けは、私たちの思ふよりもゆつくりして来たやうに思ひます。私たちは、この山の頂から人里か羊飼ひ小屋か見付かりはすまいかと、それを見る爲めに登りつめました。しかし出来るだけ眼を見張つても、人の住家も、人影も、小徑も往還も見ること出来ませなんだ。しかし私たちの居る此處は、一體何處であるか、知らせて呉れる人に、今に逢ふに違ひないと思ひましたので、更に進んで行くことに決しました。けれど最も私の心を痛めたのは、この険しい土地をゾライダが歩いて行くのを見ることでありました。暫らく私は彼女を背負つて居りましたが、彼女は私の疲れてゐ

るのを見ると、自分で歩くよりも却つて疲れたのです。それで再び私に骨折りをさせずに、私に手を引かれて、非常に辛抱して快活さうに歩きました。私たちがかれこれ半里も行かないうちに、小さい鈴の音が私たちの耳に入つて来ました。それは直ぐそこらに家畜の群の居るといふ明かな證據です。そこで私たちは、誰か見えはしないかと注意ぶかくあたりを見廻しますと、とある程の樹の根方に、一人の若い羊飼ひが、靜かに何の懸念もなささうに、小刀で杖をこしらへてゐるのを見出しました。私たちはその男に呼びかけました。すると彼は顔をあげさま、素早く駆け出しました。それは後で聞きますと、眞先きに彼の眼に映つたのは脱宗者とゾライダでありましたから、この二人のムーア人風の装を見て、てつきりこれは異教徒國のムーア人等が、自分を捕へに來たのだと思つたのださうです。そこで彼はすばらしい速さで、その前方にあつた藪の中へ飛び込みながら、恐ろしい叫び聲を立てました、「ムーア人ぞう——ムーア人が上つて來たッ！用心しろ用心しろ！」私たちは皆この叫び聲を聞いて、どうしてよいか分らず困つてしまひました。しかしこの羊飼ひの叫びがこゝらを騒かせて、例の騎馬の海岸巡邏どもが、何事かと即座に見に來るであらうと考



へつきましたので、私たちは脱宗者にそのトルコ風の着物を脱がせて、誰かのジャケットか上着を着せることに相談をきめました。私たちの仲間の一人は、自分はシャツ一枚になつてすぐさまそれを與へました。そこで私たちは神様へ一心に祈りつゝ、今にも海岸巡邏がやつて来るかと待ちながら、今の羊飼ひの取つた同じ道路を辿りました。その期待は私たちを欺きませなんだ、といふのは、二時間と経たぬうちに、ちやうど私たちが林を通りぬけて空地へ出た時、五十騎ばかりの人々が、跑をうたせて速歩に私たち近づいて来るのを見ました。これを認めるや否や、私たちはじつと立ち止つて彼等を待ちました。しかし彼等はじつと近寄つて見ますと、自分等の捜してゐるムーア人はゐないで、哀れなキリスト教徒の一團を見ましたので、呆氣に取られてしまひました。そしてその中の一人は、あの羊飼ひに「用心しろ」といふ叫び聲を立てさせる元になつたのは、一體お前さんがたでありましたかと、私たちに訊ねました。私はさうですと答へて、そのことの仔細や、私たちが何處から來て何者であるといふことなどを話さうとしてゐますと、私の仲間の中の一人のキリスト教徒は、私たちに問ひかけた騎馬の人をそれと覺つて、私がその上何も言はないうちに叫

び出しました。「皆さん、これは有難い、こんな願つたり叶つたりの地方へ上陸されたといふのは。私の感ちがひでさへなければ、私たちの立つてをるこの土地が、つまりヴェレズ・マラガが港近くの海岸地方の土地です。本當に、長い／＼囚はれの年月の爲めに私が覚えちがひをして居るのでさへなけりや、私等を何者ぢやとお尋ねなされる貴方こそ、ペドロ・デ・ブスタメンテの叔父様でございますうがな。」

「このキリスト教徒捕虜がかう言ひ終るか終らぬうちに、その騎馬の人は馬から跳び降り、走り寄つてその若者を抱きつゝ叫んだ、「あゝ可愛い、いとしい私の甥か！ やつと見わけがついた。私はもう長いことお前は死んだものと歎いて居つたのぢや。私も、私の姉のお前の母御も、その外生きて居るお前の親類のものは皆さう思うとつたのぢや。これは目出度くお前に逢はせて喜ばさうために、神様が生き残らせて置いて下さつたのぢやな。私らはさうと以前からお前がアルジュールに居るとは聞いてゐたのぢやが、その着物の風やこの連れの衆の風から見れば、お前等は不思議な脱れ方をして來たのぢやな。」

「その通りでございます、まアゆる／＼後で残らずお話し致しませう。」とその若者は答へました。

「騎馬の人々は私たちのキリスト教徒捕虜であることが分ると、直ちに馬から降りて、銘々自分の馬を勧め、私たちを、そこから一リーグ半のところにある、ヴェレズ・マラガの市へ乗せて行かうと言ひました。その内の數人は、私たちの乗り棄てゝ來た小舟のある所を聞いて、それをその市へ回漕するために行きました。その餘りの人々は、銘々の背後へ私たちを乗せました。そしてゾライダは例の若者の叔父の背後へ乗せられました。私たちの到着を先觸れにして、一人だけ先きへ行つてゐたので、市中の人々は私たちの來たのを聞いて出迎へに來ました。この海岸の人々は、放免された捕虜もムーア人の捕虜も、よく見なれて居りましたので、どちらを見ても驚きはしませんでした。しかしゾライダの美しさには皆々驚きました。その美しさは、キリスト教徒の土地に着いて、旅の苦勞や、一切の心配の無くなつた悦びで、今やその絶頂に達して居りました。この悦びが彼女の顔に非常な輝きを生じたので、彼女に對する愛着の爲めに、私の目が眩まされて居らぬなら、私は敢て世界中に、少くとも私の見たうちには、これより美しい人間はないと言ひたい位でした。

「私たちは、自分等の受けた恩惠を神に感謝しようとして、眞

つ直に教會堂へ行きました。教會堂に入るとゾライダは、レラ・マリエンの顔に似た顔が幾つもあると言ひました。私たちは、それこそ皆あのお方の御像であると彼女に教へました。そして脱宗者は、一生懸命にそれらの意味を彼女に説明して聞かせました。その何れも／＼を、嘗て彼女に話しかけたそのレラ・マリエンその人として彼女が崇め敬ふやうにと思ひまして。彼女はすぐれた智慧と敏い明かな本能を有つてゐたので、これに就いて彼の話した事は、残らず直ぐさま會得しました。人々はそこから私たちを連れて行つて、この市の彼方此方の家々に宿制をしてくれました。しかし脱宗者とゾライダと私とは、私たちと共に來ました例のキリスト教徒につれられて、その親の家へ行きました。親たちは大層豊かな財産を持つてゐて、私たちを自分の息子同様に大層親切に持てなしてくれました。

「ヴェレズには六日逗留しました。その最後の日に、脱宗者は、すでに自分のしなければならぬことは悉く果しましたので、神聖宗教裁判所の仲立によつて、教會の神聖な胸へ復歸しようとして、ゲラナダの市へと發足しました。自由になつた他の捕虜たちも、おの／＼一番善いと思ふ道を選んで出立しました。そしてゾライダと私とは、二人つきり取り残さ



れ、しかもあのフランス人の情でゾライダに呉れた金より外には、何も持つて居りませなんだ。その金の中で彼女の乗る馬を求めました。そして私は差し當り彼女の良人としてではなく、その父として家來として付き添ひながら、私の父がまだ生きて居りますか、私の弟等が誰か私よりも好い運に出會ひましたか、それを確かめようと、かうして只今行くところでございます。尤も、神様が私をゾライダの連れ合ひにして下さいましたからには、いかに幸福なればとて、これに優ると思はれるやうな廻り合せは、とても割り當てられるわけのものではないと存じます。彼女が貧乏に伴ふ艱難辛苦を堪へ忍ぶその忍耐と、キリスト信者にならうために見せるその熱心とは、まことに感服の至りで、私は彼女の爲めにこの一生を捧げようと思ひます。尤も、この自分の國で、この婦人を宿らせる片隅でも見つけられるかどうか、また時と死とは私の父や、弟等の生命や財産に非常な變化を與へて、もしあの人たちに逢はねば、もう一人も私を知つたものはないのであるまいか、さういふことが分りませんので、自分がこの婦人のものであり、この婦人は自分のものであると思つて感ずる私の幸福は、掻き亂されがちではありますけれど。

『皆さん、もうこの上お話しする物語もありません。これが面白い珍らしい話であるかどうかは、皆さんのすぐれた御判断にお任せいたします。たゞもつと手短にお話しすればよかつたのにと申すまででございます。尤も皆さんを御退屈させぬかと心配して、ところ／＼抜かしはしましたが。』

第四十二章

は宿屋に於けるその後の出來事、及びその他數々の知るに足る事どもを述べる。

かう言つて、捕虜は口を噤んだ。するとドン・フェルナンドは彼に言つた、『まことに大尉殿、その目覺しい冒險のお話し方は、全くその斬新奇抜な事柄に適して居りますよ。全體のお物語が珍らしく奇抜であります上に、聴き手を驚かせ不思議からせるやうな事件もなか／＼豊かでありました。それで私たちは非常に面白く拜聴して居りましたので、たとへ今一度その同じ物語をお始めになつて、明朝まで徹夜して聞かされましても結構でございます。彼がかう言つてゐる一方で、カルデニオ始めその他の人々は、自分の力の及ぶ限り、どういふ方法でも大尉の爲めに盡さうと、親切と眞心をこめた言葉で申し出たので、彼もその

好意を厚く喜んだ。殊にドン・フェルナンドは、もし自分と共に家へ行つて呉れるなら、ゾライダの洗禮式には自分の兄の侯爵を教父に立て、やり、そして自分の方では、大尉がその身にふさはしい品位や威嚴を保つて故郷へ顔出しの出来るだけの、取り賄ひをしてやらうと申し出た。これ等のことに對して、捕虜は非常に丁寧に禮を述べた。けれどもさういふ慈悲深い申し出の何れをも受けようとはしなかつた。

この時はもう夜が迫つてゐた。そして晩になると、幾人かの騎馬の家來に護られた一臺の箱馬車が、この宿屋にやつて来て、家來どもは部屋を命じた。それに對してお上さんは、この宿屋には掌ほどとも塞らぬところはないと答へた。

『さうではあらうが、しかし、』とその騎馬で乗りこんだうち一人が言つた、『この判事殿の御用ぢやから部屋を都合して貰はねばならぬ。』

その名前を聞いてお上さんは驚いて言つた、『貴方様、實は寢床がござりませんので、けれど判事様は、申すまでもなく御自分の寢床はお持ちになつとりませうから、もしさうでござりましたら、どうぞお入り下さりませ、夫と私

の居ります部屋を、判事様へ御都合いたしましたから、』  
『それで結構、さうしてくれい。』と家來は言つた。しかしそれと同時に一人の男が馬車から出た。その服装は一見してその人の官職と位地とを示した。即ち彼の着てゐる襪のついた袖のある長上衣は、その家來が言つた通り、控訴院判事であることを示した。彼は旅行服を着た若い娘の手を取つて下りた。それは見たところ十六ばかりの、非常に品の高い美しいしとやかな娘であつたので、その姿を現はすと、皆見とれてしまつたのである。それで、もしこの宿屋に居るドロテアやルシシやゾライダなどを、見てさへひなかつたら、皆この娘の美貌ほどの容貌は見つからぬと思つたであつたらう。判事がその若い婦人と共に入つて来る時に、ドン・キホーテも居合せた。そして彼は判事を見るや否や言つた、『閣下何卒この城内へ安心してお入りあつて、お寛ぎ下さるやうに。部屋の設けは乏しく貧しうはござりませうが、いかに窮屈で不便でも、文武を招ずることの出來ぬ程の場所といふものはあるものではありません。取り分け文武がおの／＼美人をその先達嚮導とする段になれば尙更のことぢや。貴方によつて代表される文の方には、この美しい處女子がられます。この方に對しては城が自ら門を



開いて明け渡さねばならぬのみか、巖石とても自ら割れは  
じけ、山々とても自ら裂けて叩頭三拜してこの方を迎ふべ  
きぢや。さアどうぞ貴方、この樂園へお入り下さい。貴方が  
お伴れになつたその「天」の好伴侶たる、星辰や日月がこゝ  
にをられます。こゝでこそ貴方は至高絶倫の武と、絶世  
完璧の美とを見られるでござりませうわい。」

判事はドン・キホーテの言葉を聞いて面喰つて、頭の先か  
ら爪先までつく／＼と見てゐたが、その言葉よりもその姿  
に尙更吃驚したのである。そして彼に答ふべき言葉の見つ  
からぬうちに、自分の眞ん前にルシンダやドロテアやゾラ  
イダの居るのを見て、彼は更にまた驚いた。その婦人たちは  
新來の客人やその若い婦人の容貌の<sup>容</sup>を聞きつけて、そ  
の婦人に逢うて歓迎しようとして来たのである。しかしド  
ン・フェルナンドやカルデニオや牧師補は、もつと慇巧に  
品よく彼に挨拶した。要するに判事はその入り際に見るも  
の聞くもので、仰天してしまつた。またこの宿屋の美しい  
婦人たちはその綺麗な少女を親切にもてなした。判事は、概  
してこゝに居る人々は皆善い人であることを見て取つた。  
しかしドン・キホーテの姿や顔つきや振舞ひには、判断がつか  
きかねた。そこで挨拶も悉く交換され、宿の部屋割りの相

談も出来て、前に決まつてゐた通りに決まつた。即ち婦人  
等は残らず既に述べた例の天井裏に退き、男子は皆それを  
護衛するものゝ如く外側に居るといふのであつた。そこで  
判事は、非常に喜んで自分の娘を（これは判事の娘であつた  
ので）、その婦人たちと一緒に居させた。娘も亦心から喜ん  
でさうしたのである。そして亭主の狭い寢床の一部に、判事  
の携帶してゐた寢床を足して、彼等が思ひ付けてゐたより  
も、心持のよい夜の設けを作つたのである。

その判事を見た途端に、何だかこれが自分の弟のやうな  
氣かしてたまらなかつた件の捕虜は、彼の伴れてゐた召使  
等の一人に、彼の名前や、彼の出身地はこの國のどの地方  
であるか、それを知つてゐるかといふかと訊ねた。彼の名前は學士  
ジアン・ペレズ・デ・ギエドマ、そして聞くところによればレ  
オン連山中の或る村の出身であるとその召使は答へた。そ  
の言葉や、自分の目撃したところから、捕虜は、これこそ自  
分の父の勧めによつて學問の道を選んだ自分の弟であると  
確信した。そこで氣も浮き立ち喜んで、彼はドン・フェルナ  
ンドやカルデニオや牧師補を傍らに呼び、その判事は確  
かに自分の弟ですと言つて、事の次第を物語つた。例の召  
使は、尙彼が今メキシコ的高等法院判事に任ぜられて、印度

諸國アメリカの

へ行くところであると知らせた。それにま  
た、その若い婦人は彼の娘であつて、その母はこの娘を産  
む時死んだといふことや、また娘のために遺されてある持  
參金の故に、彼が非常に富裕であるといふことなども聞か  
してくれた。捕虜は、自ら名乗り出るのはどんな方法を取つ  
たものか、またさう名乗り上げた場合に、こんな見すばらし  
い自分を見れば弟が恥と思ふであらうか、それとも濼かい  
心で受けてくれるであらうか、それを前以て確かめるには  
どんな方法を探つたものかと、三人の者に相談したのであ  
る。

『それを確かめることは私にお任せなさい、大尉殿、』と牧  
師補は言つた。尤も貴方がやさしく受け容れられまいと思  
像する理由は少しもないのですがな。といふのは、あの素  
振りでも分る通り、貴方の弟さんは人品も智慧も備へて居  
られますから、高慢ぶつたり不人情なことをしたり、或ひ  
はまた、運の廻り合せといふものを、それ相當の値打ちに見  
るすべを知らなかりしやうな人ではありませんよ。』  
『でもやはり、私は不意に名乗り出すに、何か遠まはしの  
方法でやりたいと思ひますが。』と大尉は言つた。  
『今も申す通り、私たちが皆な満足するやうなやりかた

で、私がそれを始末させよう。』と牧師補は言つた。

折柄夕飯の用意が出来た。そこでこの捕虜と、自分等の  
室で自分等だけで食事をした婦人連を除いて、あとの人々  
は皆食卓についた。作者は筆が既に食事を終へたことを忘れてゐる。夕飯の半ばに牧  
師補は言つた、『判事殿、私がコンスタンチノールで數年  
間捕虜になつて居りました時、貴方と同姓の仲間が一人居  
りましたがな。その仲間は、スペイン全禮の歩兵隊中、最  
も強い軍人なり將校なりの中の一人でありました。しかし  
その男は、その夥しい俠氣や勇氣に劣らぬ夥しい不運に逢  
ひましたよ。』

『そしてその大尉は何といふ名前でしたか、貴方？』と判  
事は尋ねた。

『レイ・ペレズ・デ・ギエドマといふ人でした。』と牧師補は答  
へた。『そしてその男はレオン連山中の或る村の生れでし  
た。そしてその男は父や弟たちに關係した或る事情を話し  
て聞かせましたが、それをもしあんな誠實な人からでも聞  
かなかつたら、お婆さんたちが冬火に當りながら話すやう  
な、お伽噺とでも思つて取り上げなんだからと思ひますよ。  
その男の話では、その親父さんは三人の息子に財産を分け  
てやつて、そしてめい／＼にケイトー紀元前三世紀より二世紀の  
間のローマの賢明な監察官



の一番よい忠告にも優つた分別に富んだ忠告を與へたさうです。然るに私の知つてゐるところでは、彼は自ら好んで戦争に行きましたか、それが非常な成功で、遂に自分の勇氣と勇ましい働きで、たゞ自分の手柄ばかりの力で、僅か二三年の間に歩兵の大尉に昇進して、そして遠からず軍團を指揮するやうな地位に昇らうとして居りましたのぢや。しかし運が悪かつたのか、好い運を手に入れさうなところであつたのです、その好運と一緒に身の自由までも。しかもそれはレバントの海戦であつた澤山の人々が自由を回復した目出度い日に。私はゴレタで捕虜になりました、いろいろ危ふい目に逢うてから、コンスタンチノープルでその人と友達になりました。あそこからその人はアルジュールへ行きましたが、あの市であつた人は、世の中の誰一人として出逢うたことのないやうな、稀代の珍事に出逢うたのです。』

こゝで牧師補は判事の兄とゾライダとの奇縁を手短に物語つた。それに對して判事は、今まで自分の聞いた如何なる訴訟にも與へたことのない程の熱心な傾聴を與へた。しかし牧師補は、例のフランス人があの小舟に乗つてゐた人々を掠奪して、その仲間や美しいムーアの婦人が窮乏と悲歎

の中に取り残されたといふところまでしか話さなかつた。その人々はその後どうなつたか、果してスペインへ着いたのか、それともフランスへ連れて行かれたか、それは知ることが出来なかつたと牧師補は言つた。

大尉は少し離れて立ちながら、牧師補の話に残らず耳傾けつゝ、自分の弟のあらゆる動作を見成つてゐた。弟は牧師補が話を終つたのを見るや否や、深い吐息をついて、眼には一杯涙を浮べて言つた、「あゝ、貴方、今のお話が私にとつてどんなものであるか、どれほど胸に迫りますか、それは世間も知り自制力もある私ですが、この通り涙をこぼして心の痛みを現はすのでも、御推察下さい！ 貴方のお話になつたその勇敢な大尉は、私の一番上の兄です。あれは私よりもいま一人の兄よりも勇ましい氣高い心を有つてゐましたので、貴方のお仲間であつたその捕虜が、昔嘶のやうに思はれる話の中で申しました通り、父が私らに持ち出した三つの仕事の中の貴い譽れある武の職を選びました。私は文官の職に従ひましたが、私は神祿や私自身の努力のお蔭で御覽の通りの地位に昇りました。中の兄はベル（南メキシコ）に居りますが、あれは非常に富裕になりました、今までに父や私やに送つてくれましたものだけでも、優

に自分の貰つた割前を拂ひ戻したばかりでなく、父の生來の潤達を満足させるに足る資財をさへ父の手に供へて呉れました。同時に私も更に立派に見苦しからず自分の研究を續けまして、現在の地位に達することが出来ました。私の父はまだ生きてゐます。尤も死ぬるほどに長男のことを知りたがつては居りますが、そして、息子の顔を見てから自分の眼をつぶらせて下さるやうにと始終神祿へお祈りをして居ります。しかし長兄のことで合點の行きませんのは、あれだけの常識を持つてをりながら、自分の困難辛苦につけ、或ひは立身出世につけて、何の消息もせず打ちやつて置くといふことです。父なり私たち二人の弟のどちらかになりが兄の境遇を知りさへしましたら、何もその蘆の奇蹟を待たずに身請けが出来ましたらうに。しかし差し當り心配になりますのは、そのフランス人等が兄を自由にしてやつたか、それともその掠奪の形跡を隠すために殺してしまつたか、不確かなことです。私の今度の旅は、折角満足をして始まりましたが、そんなことの爲めにこの上なく陰氣な悲しい心持ちで續けることになりませう。あゝ懐しい兄上！ たゞ貴方の今居られる處さへ分れば、たとひ私はどんな苦勞をしませうとも、すぐに貴方を捜しに行つて貴方

を古しみから救ひ出させうに！ あゝ貴方はたとひ變地の最も深い牢獄の中に居られうとも、たゞ生きて居られるといふ消息さへ、年取つた父上にお聞かせ申すことが出来ればよいのですが、さうすれば父上や中の兄上や私の財産で、そこから貴方を救ひ出して上げませうから！ あゝ美しい情ぶかいゾライダ、私は兄さんへの御親切を報いたいのです！ 私は貴方の新たな靈の誕生日に（洗禮式）また一同にとつて目出度い貴方の結婚式に出席がしたいのです！

判事は自分の兄の消息を聞いて非常に深く感動して、この他さまざまのことを言つたので、聞き居る人々は皆誇はれて彼の悲みに同情を表した。かやうにして牧師補は、自分の目論見や大尉の願ひの遂げられたことを見てとり、最早この上彼等を悲ませて置きたくはなかつた。そこで彼は食卓を離れてゾライダの部屋に行き、手を引いて彼女を連れて來た。その後からルンダやドロテアや判事の娘などが續いた。大尉は牧師補が何をする積りなのか見ようと待つてゐた。すると牧師補は彼をも一方の手で引いて、判事その他の紳士等の居るところへ一緒に進んで、そして言つた、『判事殿、どうか涙をお止め下さい。そしてお望み通り十分に貴方のお心を満足させて下さい。貴方の前に居られ



るのが、貴方の立派な兄上と善い嫂上です。此處に御覽に  
 なりますのが、ギネドマ大尉で、これが令兄に親切を盡され  
 たムーアの佳人です。先きに申し上げたフランス人等はこ  
 の方々をこの通り見すばらしい有様にしてしまひましたか  
 ら、どうぞ貴方の優しい御親切をかけて上げて下さい。』  
 大尉は弟を抱擁しようとして走り寄つた。が弟はその顔  
 をよく見ようとて、兩手を相手の胸の上に置いて支へてか  
 ら少し間隔を取つた。しかし、十分にその見分けがつくや  
 否や、心から湧き出る嬉し涙と共に、彼を兩腕に堅く抱い  
 たので、並み居る人々も大方皆それにつれて涙を流さずには  
 居られなかつた。兄弟の交した言葉や、彼等の現はした  
 感動は、書きしるすことは愚か、想像さへ出来ないと思はれ  
 る。彼等は互ひに今までの身の上を手短に語り合つた。彼  
 等は眞實な兄弟の愛情の力の限りを示したのである。それ  
 から判事は、自分の所有は残らずライダに捧げませうと  
 言つて彼女を抱擁した。その次には娘と彼女とを抱擁させ  
 たので、美しいキリスト教徒と愛らしいムーア人とは四つ  
 の眼から新たな涙を流した。ドン・キホーテは一語も渡せず  
 に、熱心にこれ等の不思議な成行を眺めつゝ、その悉くを  
 武者修行の幻想に歸してゐたのである。やがて大尉とゾラ

イダは、弟と共にセギールまで歸つて、父親が来て結婚式や  
 ゾライダの洗禮式に出席の出来るやうに、長男の無事で居  
 所が知れたといふ知らせを送ることに相談が纏まつた。艦  
 隊はこれから一ヶ月のうちに新スペインス、メリカの  
 セギールを抜錨するので、その便に遅れると非常な不便を  
 來たすであらうと聞いてゐたので、判事は自分の旅立ちを  
 延ばすことは出来なかつたからである。要するに誰も彼も  
 捕虜の好運を非常に喜び目出度がつた。そして最早夜は三  
 分の二も過ぎてゐたので、皆々残りの時間を退いて休むこ  
 とに決めた。ドン・キホーテは、巨人か悪意ある悪漢かど、  
 この城内にある美人といふ大寶物を欲しがつて襲つて來る  
 かも知れぬから、自分はこの城の護衛をして居らうと申し  
 出た。彼を了解してゐる人々は、その勤務に對して禮を述  
 べた。そして彼の異常の氣質に就いて判事にも話して聞か  
 せたので、彼は少からず面白がつた。サンチョ・パンザ一  
 人は、退いて休む時刻の遅れたのをぶつ／＼言つてゐた。  
 そして一同の中で彼が一番寢心地よくしたのである。それ  
 は彼は自分の驢馬の馬具の上に寢そべつたからである。と  
 ころがこの馬具は、段々話して行けば分るが、彼になか／＼  
 えらい目を見せる事になる。

そこで婦人たちは自分等の部屋へ退き、その他の人々も  
 出来るだけ寢心地のよいやうに具合をよくしたので、ドン・  
 キホーテは、約束した通り、城の番兵の役を勤めるために  
 宿屋の外へ出た。然るにたま／＼夜明の近づく少し前に、  
 非常になだらかな良い聲音がふと婦人たちの耳に入つて來  
 たので、みな／＼思はずもそれに聴きとれたが、かねて目  
 覺めてゐたドロテアは殊にさうであつた。彼女の側にはド  
 ニャ・クラ、デ・ギネドマが（それは判事の娘の名である  
 が）、眠つてゐた。こんな良い聲で歌ふのは誰であるか、誰  
 も想像することが出来なかつた。そしてその聲は如何なる  
 樂器にも合してはゐなかつた。或る時はその歌ひ手がちや  
 うど中庭に居るやうに思はれ、或る時は廊の中に居るやう  
 にも思はれた。そして彼等が皆不思議がりをながら聴き入つ  
 てゐると、カルデニオが戸口まで來て言つた、「眠つて居  
 られぬお方は何方もお聴きなさい。ほれ／＼とするほどに  
 歌うてをる驢馬追ひの聲が聞えませうがな。」  
 『貴方、わたし達はもう先きから聴いてをりますの。』とド  
 ロテアは言つた。そこでカルデニオは行つてしまつた。そ  
 してドロテアはその聲にあらゆる注意を集中して、その歌  
 の言葉を次のやうに聞き分けた――

**第四十三章** には驢馬追ひの面白き物語  
 及びこの宿屋で起つたその他  
 の奇異なることどもが述べて  
 ある。

やんれわが身は、戀のふかみの大海を  
 帆かけてわたる戀の水夫、  
 どこに港があるやら知らず、  
 そこへ着くことも望みやせぬ。

はるかあなたの、獨りぼつちの二つ星  
 あれこそわが身の道しるべ、  
 あれはバリヌルス（ヴェーダの「エーニード」に出る水先案内者にて、航海中海に落ちて溺死した）を照  
 らしてやつた  
 昔の星よりや明るかる。

しかもわが身は、彼方此方へ吹き流されて、  
 何處へ行こやら分りやせぬ、  
 あの星ばかりを見つめて居れば  
 他の星には構やせぬ。



されどあんまり用心深い用心や  
つめたい内氣が雲となり、  
是非とも光りをほしがるときに、  
つれなやこがるゝ星かくす。

照る星さまよ、私の上から照るうちは、  
焦がれるわが眼の目標で、  
君の姿の隠れる時は  
身の終りぞと思ひましょ。

歌ひ手が此處まで進んだ時に、こんな佳い聲をクラ、に  
聞き落さすのは残念だと思つたので、ドロテアは彼女を頻  
りに揺ぶつて目を覺まさせてかう言つた、『お目を覺まさ  
せて御免なさいよ。けれど、貴女もこれまでこんな佳い聲  
をお聞きになつたことはございますまいから、これを聞か  
せて喜ばせて上げませうと思ひまして。』クラ、は全く睡さ  
うに眼を覺ました。そしてその時にはドロテアが何を言つ  
たのか解らなかつたので、何ごとですかと彼女は訊ねた。  
ドロテアは今言つたことを繰り返したので、クラ、は直ぐ

さま聞き耳を立てた。しかしその歌ひ手が續けるのを二行  
と聞くか聞かないうちに、彼女は宛ら烈しい四日熱の瘧の  
發作に襲はれたかの如く、異様な身顫ひを始めた。そし  
て兩手をドロテアに投げかけて言つた、『あゝ、ほんたうに  
貴女様！ 何故私をお起こしになつたのです？ もうあの  
不仕合せな歌ひ手を見も聞きもせぬやうに、この眼も耳も  
塞いで頂くのが、今の場合私への一番の御親切でございま  
す。』

『まあ、貴女は何を言つておいでなさるのです？ あの歌  
ひ手は驛馬追ひださうではありませんか！』とドロテアは  
言つた。

『いゝえ、あれは澤山の領地の持ち主ですよ。』とクラ、は  
答へた、『それに私の心の持ち主で、私の心を堅く捕へて居  
られますので、あの方が御自分からそれをお棄てにならぬ  
限りは、とてもそれをあの方から奪ひ取ることは出来ませ  
んのです。』

ドロテアは少女のこの熱烈な言葉に驚いたのである。そ  
れはその言葉が、彼女ほどの若い年輩の少女にありがちな  
人生の經驗を、遙かに越えてゐるやうに思はれたからであ  
る。そこで彼女は言つた、『どうも貴女の仰有るのは私には

分りかねますよ、クラ、さん。もつとはつきり言つて下さ  
い、そして心とか領地とか、またそれほど貴女を感じさせ  
たあの歌ひ手に就いて、貴女の仰有るのはどういふことな  
のですか、私に話して下さい。けれど今は何も仰有るな、  
貴女の熱情に氣を奪られて、あの歌ひ手の歌の面白いのを  
聞き損ねるのはいやですから。あれ、また新しい節や新し  
い調子で歌ひ出しましたよ。』

『どうぞ、お聞きなさい。』とクラ、は答へた。そして自分  
はそれを聞くまいとて兩手で兩耳を抑へた。それを見てド  
ロテアは再び驚いた。しかし、注意をその歌の方へうつす  
と、それは次のやうなものであつた――

わが力、麗しの「希望」よ  
汝がこゝろざす目標にむかひて  
汝こそ進め、

障りも碍げものかは、  
更に恐れず  
たとひ歩々にして死は近づくとも。

禍なるは

雄々しき面を運命に向け得ざるものよ、  
勝ちどきも  
勝利のよろこびも臆せる心はこれを知らず、  
身も魂も  
たゞ懶惰の奴僕とぞなる。

戀の取り引き  
價ひ高くば、必ずや戀の力ぞ現はるゝ。  
黄金も何かせん、  
戀の梅印押したるものに比ぶれば、  
人も皆知る如く、  
得やすきものはこれを貴ばず。

戀の一念は  
「かなはぬ」といふ言葉を知らず。  
よしやわが求婚も  
果てなき碍げに惱まされんとも、  
いかなる絶望かよく  
我を地上に縛りて上天せしめざらん。



此處でその聲は止まつた。そしてクラ、の騒り泣きは更に始まつた。この様子はドロテアの好奇心をそゝつて、あれほど心をこめて歌ひ、あれほど痛ましく泣く譯を知りたく思はせた。そこで彼女は先に聞きかけてゐたことを更めてクラ、に尋ねた。そこでクラ、は、ルシンダが洩れ聞きはせぬかといふ心配から、外の人には誰にも聞かれる心配なく安心して話されるやうに、兩手を堅くドロテアに巻きつけて、その口を彼女の耳にびつたりとつけ、そして言つた、「貴女、あの歌うて居る人は、アラゴン（スペインの富豪地地方）の富豪で二ヶ村の領主で、そしてマドリッドの私の家の眞向ひに住んで居られる方の息子さんでございます。私の家の窓には多は窓懸、夏は簾（すだれ）がかけてありますが、どうかして——それは私は存じませんが——御勉強最中のあの方が、教會でか他の處でか分りませんが、私を御覽になりました。そして實は私に戀をなさいまして、お宅の窓からいろ／＼の手眞似や涙でそれを私へお知らせになりました。私もどうせよと仰有るのかは分らぬながらに、餘儀なくその方を信ずるやうになり愛するやうにさへなりました。その手眞似のうち、あの方は私と結婚したいといふ心を見せる爲めに、何時も二つの手をつなぎ合せてお見せになりました。

それが私に出来さへすれば私は嬉しいのでございませうけれど、私はひとりぼつちの母なし子で、誰に心を打ち開けてよいやら分りませんので、あの方へは何の愛相も致さず、にそのまゝ打棄（うつす）つて置きました。尤も私の父もあの方のお父さまもお留守の時は、窓懸か簾を少したくし上げて、はつきり姿を見せては上げました。どうしますとあの方は、まるで氣でも違つたやうに思はれる程お喜びになりました。そのうちに私の父の出渡の期日が参りました。あの方もそれをお聞きになりました、けれど私はとてもそれを申し上げることは出来ませんでした、私からではありませんでした。するとあの方は病氣になられました——悲しみの爲めぢやと私は思ひます。それで私たちの出渡の日には、たとへ眼と眼とだけででもお別れを申し上げることは出来ませんでした。けれど二日の間旅をしまして、此處から一日路（いちじろ）の或る村の旅籠屋（りやうや）に入る折に、私はあの方が驛馬追ひに身を變（か）して、その入口に居られるのを見ました。非常に上手に姿を變へて居られましたので、もし私の心にあの方のお像（おさま）をちやんと彫（う）つけて持つてゐませぬなら、とても見分けることは出来ななだでございませう。けれど私はあの方と氣がついて、驚きもし嬉しうもございました。あの方

は私の歩く道中でも立ち寄る宿屋でも、私の前を通る時はいつも父の眼からは隠れられるので、私を見てをられても父には疑はれませなんだ。私はあの方のことは存じて居りますし、また徒歩で旅をなされるかうした難儀は、すべて私を愛して下さる爲めぢやと思ひますと、お氣の毒で身も世もございませぬ。それであの方の踏んで行かれるところにお出でになりましたか、またどうして、お父様の側を離れることが出来になつたか分りませぬ——お父様は他にお世嗣（よつぐ）は一人もなし、それにあの方は、貴女が御覽になれば分りますが、なか／＼お可愛らしい方ですから、非常に可愛がつて居られます。それにあの歌は皆な本當に御自分のお作りになつたものでございませぬ。人の噂ではあの方はなか／＼の學者で詩人でありになるさうですから。それにまた、私はあの方を見たりその歌を聞いたり致しますとごとくに身體中が顫（ふる）へまして、父があの方と感づいて私たちの戀を着破りはせぬかとびく／＼しますのです。私はまだあの方には一言も申したことはございませぬが、それでもやつぱりあの方なくては生きる甲斐のないほどに愛して居ります。貴女、あれ程貴女をお喜び申したあの聲の主

について申し上げることはこれだけでございます。そしてこれだけでも貴女は、あの方が驛馬追ひでなく、先に申しました通り私の心の持ち主、村々の持ち主ぢやと容易にお分りにならませう。』

ドロテアはこれを知ると、彼女を幾度も／＼接吻して言つた、「クラ、さん、もう何も仰有いますなよ、もう何も仰有いますな、たゞ明日までお待ちなさい。明日になればその貴女の事件は大丈夫神様がちやんと始末して下されて、その無邪氣な始まりにふさはしい日出度い終りをつけて下さいませう。』

『まあ、貴女、』とクラ、は言つた、「あの方のお父様はあんなに御身分が高くあんなに金持ちでゐらつしやるのですから、私をその息子さんの奥様には愚かのこと、お女中にも向かぬとお思ひなさいませうから、どんな結末が望まれませう？ それに私の父に知らさずに結婚するやうなことは、どんな事があらうとも致したくございませぬ。私はただもうあの方に私を棄て、歸つて下さいとお願ひする外はございませぬ。あの方を見ずにつつと遠方へ旅して行きましたら、大方唯今のこの苦しきは樂になるでございませう。尤も私のこの療法はあんまり利き目がないかとも思ひます







貴女様の御執着をこの上尙もお打ち明けになつて、この拙者にこの上の情ない素振をさせては下さりませぬ。そして若しや拙者を思つて下さるところから、何か拙者の力で貴女様へお盡し申すことの出来るものをお見つけ下さいませうならば、戀のことでさへなければ、何なりと仰せ付け下さりませ。それは此處に居りませぬ拙者の愛する婦人の名にかけて、たとへ御所望のものは、悉く蛇であつたといふメヅサギリシヤ神話の女神、アテナと神の怒りにより頭髪悉くメヅサに蛇ミ化し、これを見る人皆石に化せりと傳へらる。の頭髪でありませうとも、また囁語にした太陽の光線でありませうとも、必ず即座にお引き受け致しませう。」

これを聞いてマリトルネスは言つた、『武者修行さま、お嬢様はさういふものは少しも欲しがつては居られませぬよ。』

『そんなら、お嬢様は何を欲しがつて下さりますのぢやな、しとやかなお侍女よ。』とドン・キホーテは答へた。

『たゞ貴方のお美しい片手だけを。』とマリトルネスは言つた、『その手の上にお嬢様は深い／＼思ひをお洩らしになりませう。お嬢様はそればかりに、名譽にもお構ひなく、この銃眼へお出でになりましたのですよ、もしや大股襜がお聞きにでもなりましたら、一番安う積つてもお嬢様の耳

は斬られませうよ。』

『さうなさるのを見たいもんですな、』とドン・キホーテは言つた、『しかし城主殿はさういふことを愼まれるがよろしいのぢや。さうでない、戀に惱んだ娘御のしなやかな手足に手をかけたために、世界の父親が未だ曾て招いた例のないやうなひどい目を見られようも知れぬ。』

マリトルネスは自分の求めた通り大丈夫ドン・キホーテは手を差し出すであらうと思つたので、さうすればかうしてやらうと心を決めて、その穴から下りて厩へ行つた。そしてそこからサンテロー・パンザの驢馬の糞糞を取つて、大急ぎで元の穴のところへ歸つて来た。すると丁度ドン・キホーテは、そこに戀に惱める少女の居ることと思ひ込んでゐた、その格子つきの窓に届かう爲めに、今しもロシナンテの鞍の上に身を衝つ立てたところであつた。そして彼は彼女に手を差し出しながら言つた、『姫君、この手を、いや、世の悪漢を懲すこの答をお取りなされい。さアこの手をお取りなされい。この手にはまだ婦人の手は一つも觸つたことがありません、拙者の全身を悉く生擒にしてをりますあの婦人の手さへも。これを貴女に差し出しますのぢや。しかしそれは貴女に接吻させませうためではなく、たゞこ

の筋骨の組立や堅い肉の緊りや血管の太さ強さをお目にかけて、かういふ手を持つ腕の力はさぞかしであらうと推察して頂かうためでございますわい。』

『今にそれを見せて貰ひませう。』とマリトルネスは言つた。そしてその羅絆に投げ輪差を拵へて、それをドン・キホーテの手首の周りに引つけ、穴を下りて、その一方の端を薬置部屋の戸の門にうんときつく縛りつけた。

ドン・キホーテはその索の硬さで手首が痛くなつたので、叫んだ、『貴女様は拙者の手を撫でられるといふよりは擦つて居られるやうぢやな。さう手荒にしては下さるな、何も拙者の決心の堅いのはこの手の罪ではありません。また貴女の恨みをこんな小さい箇所でお晴らしなさるには當りません。それほどに戀する人は、かやうにひどく復讐するものではないではありませんか。』

しかしもはや誰もドン・キホーテの是等の言葉に耳傾けるものは無かつた。マリトルネスが彼を縛りつけてしまふや否や、彼女も合棒の娘も、死にさうに笑ひこけながら、彼の身をとても脱けられないやうに縛りつけたまゝ、行つてしまつたからである。

彼はその片手を穴に入れ、手首は戸の門に縛られたまゝ

先に述べた通りロシナンテの上に立つてゐた。そしてロシナンテが何方へか少しでも身動きをしたら、片腕でぶらさがつたまゝにならうといふ大恐慌に陥つてゐたのである。

そこで、ロシナンテの沈着な性質や忍耐力から推して、全一世紀の間でも動かずに立つて居られるであらうと豫期する十分な理由はあつたものゝ、ドン・キホーテは些との身動きも敢てし得なかつた。やがて身はしかと縛られ、しかも婦人たちは引つ込んでしまつたことに氣がついたので、彼はこの前に同じくこの城で馬方に化けた魔術使ひのムーア人に殴られた時のやうに、これは悉く魔術に依つてなされたことと思ひ初めた。そして、初めての時あれほど散々な目に逢ひながら、またもや敢てこの城内へ入り込んだ自分の分別判断の乏しさを心の中で呪つた。一體武者修行者の掟として、或る冒險を試みて、それが巧く成し遂げられなかつた場合には、それはその冒險を自分以外の武者修行者の爲めに保留して置くべき微なので、自分は二度とそれを試みる必要はないのであつた。魔術とは信じながらも、尙彼は脱れぬことは出来ぬかとその片腕を引いて見た。然し彼の一切の骨折も甲斐がないほどに堅く縛つてあつた、尤も彼はロシナンテが動かぬやうにと、そつと腕を引いて見た



だけではあつたが。しかし鞍の上に身を据ゑようとしていかに力をつくして見ても、たゞしやんと突つ立つか、或は手を引きもぐかより外はなかつた。そこで彼が欲しいと思つたのは、どんな魔術も之には効能のないといふアマデイスの劍であつた。さて又彼は自分の不運を呪つた。その次には、自分がかやうに魔術にかけられて居る間に、彼の不在の爲めに世界の受くべき損失を、誇張して考へた。何の疑ふ餘地もなく魔術のためであると彼は信じてゐたのである。次には今一度自分の愛するドルシネア・デル・トボソの事を考へて見た。次には自分の重寶な家來サンチョー・パンザを呼んだ。が彼はちやうどこの時は自分の生んだ母のことを打忘れて、驢馬の荷鞍の上に大の字なりに眠りこけてゐた。その次には二賢人リルガンデオとアルクイフ（可れも中世騎士物語中の魔術使ひ）に助けを求めた。その次には自分の親友ウルガンダに援助を求めた。そして最後に夜が明けて、彼はそこに絶望し當惑して牡牛のやうに唸つてゐた。蓋し彼は自ら魔法にかゝつてゐる以上は未來永劫この苦みが續くであらうと信じてゐたので、晝が來ても何かの救ひがあらうといふ望みは持たなかつた。そして彼がさうと堅く信じたのは、ロシナンテが決してビクとも動かぬのを見たからである。そこで彼

は悪い星の廻りが過ぎ去るか、もつと偉い賢人の魔術使ひがこの魔術を自分から釋いてくれるまでは、自分も馬もこの儘の姿勢で、食ひも飲みも眠りもせずに居なければならぬと思ひ込んでゐたのである。

しかしこの結論は非常に間違つてゐた。といふのは、日の光が差すか差さぬに、身支度旅装も立派にして、鞍の前輪には、各條發銃を横たへて馬に乗つた四人の男が、この宿屋へやつて來た。彼等は大聲を立てゝまだ閉まつてゐた宿屋の門をドン／＼と叩いた。それを見るや、ドン・キホーテはまだそのまゝの位置にはありながらも、歩哨として爲すべきことは忘れなかつた。そして聲高い威張つた調子で言つた、『騎士か家來か何であるか知らんが、お手前等は此の城の門を叩く權利はないのぢや。言はずも知れたこと城中の人たちはまだ眠つて居られる。さうでなくとも日の光が大地の面に治ねく擴がるそれまでは、この替を開け放すやうな習はしてはないのぢや。遠くの方へ引き退れい、そしてあか／＼と夜の明けるまで待つてをれい。その上でお手前たちは此處へ入れてよい者であるかどうかを檢べてやらう。』

『私にそれ程儀式張らさうと言ふが、一體こゝがどうい

ふ城や砦ぢやと言ふのぢや？』と一人が言つた、『お前さん、亭主なら此處を開けるように言ひ付けなさいよ。私は旅の者で、急いで居るから馬に飼糧さへやつて貰へば、直ぐ行くんぢや。』

『貴方がたは、拙者が宿屋の亭主と見えると思はれるかな？』とドン・キホーテは言つた。

『お前さんがどう見えるかは知りませんが、』と今一人の男は答へた、『しかしこの宿屋を城ぢやと言ふのは痴げごとぢや。』

『これは城ぢや、』とドン・キホーテは答へた、『いや、それも、この縣中第一の城ぢや。そしてこの城の中には、笏を手に持ち冠を頭に戴いた人々も居るのぢやわい。』

『そいつをあべこべにしたらよからうに。』と旅人は言つた、『頭の上には笏を置いて手には冠を持つて。ぢやが、さうとすると、こゝにはお前さんの言ふやうな冠や笏を平生に持ち歩く役者の一座が居ると見えるな。こんな小ぼけな宿屋に、しかもこんなしんとした處に、冠や笏を持つやうなお歴々の人が宿を取らうとは思はれんからな。』

『お前はまるで世間を知らんのぢや。』とドン・キホーテは答へた、『お前は騎士道の一と通りのことさへ辨へて居ら

ん。』

しかしこの話し手の仲間どもはドン・キホーテとのこの問答が嫌になつたので、新に非常な勢ひで門を叩き始めた。そこで宿屋の亭主は、いや彼のみならず宿屋中の人々は残らず目を覺ました。そして亭主は何方ですかと尋ねようとて起きた。丁度この時表に待つてゐる四人の乗馬のうちの一匹がロシナンテを嗅ぎに來た。ロシナンテは、悲しげに悄氣て耳を垂らして、じつと動かずに立ちながら、ひどくぐんなりしてゐる主人を支へてゐた。この馬は宛ら木で作られたやうに見えては居たけれど、やはり生き物であつたので、自分の方へ氣を寄せて來た馬に誘はれて嗅ぎ返さずには居られなかつた。しかし彼がほんの少し身動きをするや否や、ドン・キホーテは足場を失つた。そして彼は鞍から滑つたので、片腕で吊り上げられてゐなかつたら地べたへ落ちたであらう。その爲め彼は手首が切れるか腕が抜けるかと思ふ程の痛みを感じた。そして足の爪先がもうすぐ地べたに觸る位になつたので、彼にとつては愈々具合が悪くなつた。それは、もうホンの少しで足をしつかり立てられると思つたので、一生懸命に足場を得ようともがいて身を伸ばしたからであつた。それは丁度かの吊り落し（兩手を後ろに廻して吊り下げる刑）



の拷問にかゝる者等が、足の「觸るか觸らぬか」の位置に吊るされると、今少しで地べたへ届くであらうといふ氣迷ひから、もしやの希望に欺かれて、體を伸ばさうと烈しくもがくので、ます／＼その苦痛を大きくするやうなものであつた。

第四十四章 には前代未聞の宿屋の冒険

が続く。

實際ドン・キホーテの叫び聲は非常に大きかつたので、亭主は大急ぎで宿屋の門を開けて魂消て飛び出しながら、誰がそんな聲を立てたのかを見ようとて走つて來た。そして戶外に居た人々も亭主につゞいた。ちやうどこの時、この同じわめき聲で目覺まされたマリトルネスは、それと覺つて薬置き部屋へ馳せ上り、誰にも見られずに、ドン・キホーテを吊るしてあつた縄を解いた。そこでドン・キホーテは亭主や旅人等の眼の届く地面へ降りて來た。彼等はドン・キホーテに近づきながら、どうしてそんなに喚いたのかと訊ねた。彼は一言も答へないで、その腰から索を除けて立ち上りさまロシナンテに飛び乗り、腕に桶を括りつけ、槍を横たへて、廣場を大きく一と廻りしてから跑を打たせ

つゝ叫びながら歸つて來た、「拙者が魔術にかけられて居つたのは當然ぢやといふ奴は、何者であらうとも、もしわがミコモコナ姫が拙者にさうせよとお許しなさるなら、さういふ奴は嘘つきぢやというて、拙者と一騎打ちをさせませうわい。」

新來の旅人等はドン・キホーテの言葉に吃驚した。しかし亭主は、彼の人柄を説明して氣狂ひだから氣にかけることはないと言つて、彼等の驚きを取り去らせた。そこで彼等は亭主に向つて、年頃十五歳ばかりで、驃馬追ひの装をして、これ／＼の容顔をして——とクラ、の戀人の容顔を數へあげて——さういふ若者がひよいとこの宿屋に泊つてはゐないかと訊ねた。すると、この宿屋には非常に大勢の客が泊つてゐるからお尋ねになる人には氣がつかないと、亭主は答へた。しかし旅人等の一人は判事の乗つて來た箱馬車を見とめて言つた、「あの人が隨つて來るのは、この馬車ぢやで、疑ひなく此處にゐなさるのぢや。この中から誰か一人この門に立つてをつて、他の者は内へ捜しに行かうよ。それとも、おゝさうぢや、あの人は中庭の塀を越えて逃げるかも知れんから、誰か一人この宿屋の周りを廻る方がよからう。」それがえ」と他の者が言つた。そこで

二人が内へ入ると、こちらでは一人が門にとゞまり、いま一人は宿屋の周りを廻つた。それを見て亭主は、どういふわけでそれほどに用心深くするのか判じ兼ねた。尤も彼等が自分に聞かしたやうな人相の若者を捜すのだとは承知してゐたが。

もうこの時はあか／＼と日が照り出してゐた。それもさうであつたし、その上ドン・キホーテの立てた騒ぎ聲の爲めに、誰も彼も目を覺まして起き上つた。クラ、とドロテアとは取り分けさうであつた。といふのは、その夜この二人はよく眠れなかつたからである、一人は自分の戀人がすぐ手近かに居るので氣が落ち着かなかつたからであり、一人はその戀人を見たいといふ好奇心からであつた。ドン・キホーテは、例の四人の者が一人として自分に氣を留めず、また自分の挑戦に答へもしなかつたので、ぶん／＼腹を立て躍起となつて怒つてゐた。そこで、武者修行者たる者が或る事業に身を捧げて、それを成し遂げるまではどんな事業にも捲き込まれないと言葉や節義をかけて誓つて置いて、更に何か他の事業に手出しをしたり従事することは正當であるといふことが、もしや騎士道の掟の中にありでもしたら、彼はその四人をいどきに攻撃して、そして彼等を

して心ならずもそれに應じさせたであらう。しかしミコモコナ姫をその王國の玉座につかせないうちに、別の新たな冒険を始めるとは、自分に似つかはしくもないしまた正しくもないであらうと考へたので、彼は逸る心を靜かに抑へて、その旅人等のする事の成り行きがどうなるかを見るために、おとなしく待つことにした。その中の一人は、例の若者が或る驃馬追ひの側に眠りこんでゐるところを捜し出した。若者は自分が見つけ出されるとは愚か、誰か自分を捜しに來てゐるとも知らずにゐたのである。

その男は若者の腕を掴んで言つた、「ドン・ルイス様、ほんとに貴方様は着てござる着物によう似合ひなされませうな。また寝てござるこの寢床も、お母様が貴方を育て上げなさつた贅澤さとうよく釣り合つてをりますなア。」

若者は眠たい眼を擦つて、自分を掴んでゐる男を暫く見据えてゐたが、直ぐに自分の父の下男の一人だと見分けがついた。そこで非常に狼狽して、稍暫くの間は何と言つてよいか口も利けなかつた。その間に下男は續けて言つた、「ドン・ルイス様、もうかうなりやどうすることもござりません。たゞおとなしく言ふ事を聽いて家へ歸らつしやるばかりぢや。お父様の大旦那様は、貴方がゐなさらんのを



氣に病んで御壽命も縮まるほどござりますよ、貴方もそれがお嫌なら歸つて上げて下さいませ。』  
『けれどもお父様は、どうして私がこの道をこんな装りで来たといふことを御承知になつたのか?』とドン・ルイスは言つた。

『貴方様もくろみを打ち明けなかつたぢや書生さん、』と下男は答へた、『あの人が、貴方が行方を晦ましなつたのでお父様が氣落ちして居られるのを見るに見兼ねて、残らず知らせて呉れましたわい。そこでお父様は貴方様を捜しに四人の男をお出しになりました。それで私らは残らずお跡をつけて此處へ參つて居りますのぢや。まあこんなに早う、貴方様に焦れてござるお父様の眼の前へ、貴方様をつれて行けるんで、私らの喜びは御推量にも及びませぬわい。』

『歸るかどうかは私の勝手ぢや、でなければ神様のお差圖通りぢや。』とドン・ルイスは答へた。

『貴方様の御勝手でも神様のお差圖でも、歸らつしやらん事がありますかい? それより外にはどうも出来はしませんのぢや。』と他の下男は言つた。

二人の間のこの會話は、ドン・ルイスの側に寝てゐた驃馬

追ひに洩れ聞かれた。そこで彼は起き上つて、この場の出来ごとを知らせようとて、今しも身拵へを済ましたドン・フェルナンドやカルデニオやその他の人々の所へ行つた。そして下男がかの若者に「ドン」といふ敬稱をつけて呼んだことや、二人の間に交はされた言葉や、また、下男がお父様のところへ歸つて下さいといふけれど若者はそれを嫌がつてゐるといふことを話した。それを聞いて、またその若者が天稟稀なる美聲を有つてゐるのを既に皆知つてゐたので、彼等はその若者の素性をもつと細かに知つて、若し彼に無理なことでも仕向けるなら加勢でもしてやりたいと非常に熱心に思つたのである。そこで彼等は、若者が尙も下男と言葉のやり取りを續けてゐるところへと急いだ。丁度この時ドロテアは身體中顛へてゐるドニー・クラ、をつれて部屋から出て来た。そしてドロテアはカルデニオを離れたところへ呼んで、例の歌ひ手とドニー・クラ、との物語を手短に話した。と同時に、カルデニオも今朝の出来事を——彼の父の下男等が彼を捜しに来てゐることを話した。しかし彼がさう話した時に聲が十分低くなかつたので、その話をドニー・クラ、に聞かれてしまつた。それを聞くや彼女の驚きは一方ならず、もしドロテアが大

急ぎでその身體を支へて呉れなかつたなら床の上へ倒れたであつたらう。そこでカルデニオは、この事件は自分がすつかり都合よく取り計らふやうに骨折るから、貴女がたは部屋へ歸つてお出でなさいとドロテアに言つた。二人はその求めの通りにした。ドン・ルイスを捜しに來た四人の者は、今や残らず宿屋の中へ入つて、彼を取り卷きながら、一瞬間の猶豫もなく即座に家へ歸つて父を安心させるやうにと言ひ聞かせて居つた。ドン・ルイスは自分の生命と名譽と心を賭けてゐる或る事件の始末をつけないうちは、どんなことであらうとも歸らないと答へた。下男等は、どうしてもかうしても彼を連れずには戻らない、否でも應でも引つ張つて行くと言ひながら、彼に迫つてゐた。

『お前たちにそりア出来まいよ、』とドン・ルイスは答へた、『私を殺して連れて行かん限りはな。それでも連れて行くなら、命のない私を連れて行くんぢや。』

この時は、もうこの宿屋にゐた大抵の人々はこの問答に氣を取られてゐた、取り分けカルデニオとドン・フェルナンドと、その同伴者たちと、判事、牧師補、理髮師及びドン・キホーテとは。蓋しドン・キホーテは最早この城を警護して居る必要がないと考へたからである。カルデニオは、

既にこの若者の物語を知つてゐるところから、彼を連れて行かうとしてゐる人々に向つて、一體どういふわけで、この若者の意に逆つてまでも連れて行かうとしてゐるのかと訊ねた。

『そのわけは、』と四人のうちの一人が言つた、『この方のお父さんの生命を助ける爲めです。そのお父さんはこの方が行方を晦ましなつた爲めに生命が危いのです。』

それを聞いてドン・ルイスは叫んだ、『私のことを他人様に知らす用はないのぢや。私は自由ぢや。私の氣が向けば歸るのぢや。氣の向かんものをお前等は誰も強ひるわけには行かん。』

『道理が貴方様を強ひるんでござりますよ、』とその男は言つた、『その道理が、貴方様には效能がなうても、私らには、かうして出向いて來た用事や、せねばならん務めをさせる力を有つてをりますのぢや。』

それを聞いて判事は、『一體このことの一伍一什はどうしたといふのです。』と言つた。そこで判事を近所の人として見知つてゐたその男が答へた、『判事様、この若様を貴方様は御存じでございせんか? この方は貴方様の御近所の息子さんで、御覽の通り身分に不似合ひな、かういふ身装



でお父さんの家を逃げ出して来られましたのです。」

それを聞いて判事はよく／＼氣をつけて見ると、それと見分けがついたので、若者を抱擁して言った、『ドン・ルイスさん、これは何といふ馬鹿げたことですか。またどうしたわけで、貴方の身分に不似合ひなこんな装いで、こんな方面へやつて来られるやうなことになつたのですぞ?』

若者の眼には涙が浮んだ。そして判事には一と言も答へることは出来なかつた。判事は四人の下男等に向つて、萬事うまく片付けてやらうから心配せぬやうにと言つた。それからドン・ルイスの手を取つて、人々から少し離れたところへ連れて行つて、どうしてこゝへ来たのかと訊ねた。

しかし彼がかう訊ねてゐた時、宿屋の入口に大きな喚き聲が聞えた。その譯は、此處に夜を明かした二人の客が、誰も彼も、例の四人の男の何事であつたのかを知らうとて氣を取られてゐるのを見て、自分等の拂ふべき物を拂はずに行かうといふ惡心を起したからであつた。しかし他人のことよりも自分のことを餘計に心配するこゝの亭主は、彼等が門を出ようとするところを見つけて勘定を催促した。そして彼等の不正直を餘りに口汚なく罵つたので、とう／＼鐵拳の返禮を受けるまで彼等を怒らせた。二人は非常な勢

ひで殴り出したので、この可哀さうな亭主は已むなく泣き出して助けを呼び求めたのである。お上さんも娘も、この加勢にはドン・キホーテほど手の明いてゐる者はないと見たので、娘は彼に言つた、『お侍様、どうぞ後生でございませうから、私の可哀さうなお父さんを助けて下さい。二人の悪者がお父さんを目茶々々に殴つて居りますから。』

それに對して、ドン・キホーテはねつちり／＼落ち着き拂つて答へた、『お美しい少女子よ、時も時としてそのお頼みには生憎でござりますのぢや。といふわけは、拙者が誓ひを立てた一つの冒険に目出度い結末をつけぬうちは、外の冒険にこの身を委ねるわけに行きませんのぢや。しかし折角のお頼みぢやで、かう爲さつたら宜しからうと考へますわい、走つて行つて貴女の父君へ、「この戦には精一杯その立場を踏みこたへて、どういふことがあらうとも決して負けてはなりません」と仰有るのです。その間に拙者はミヨミコナ姫様のところへ行つて、困つて居られるその父君に助太刀してもよいといふお許しを願ひませうわい。そしてもしその許しがあつたなら、拙者が父君を救つて上げるによつて、まア御安心なさるがよからう。』

『まア魂消た!』と、傍に立つてゐたマリトルネスは叫ん

だ、『お前さんがその許しを受けなさらんうちに、私の旦那はあの世へ行つてしまふぢやらうに。』

『お嬢さん、まア拙者のいふその許しを受けさせて下さりませ。』とドン・キホーテは答へた、『その許しさへ受くれば、父君があゝの世に行つてござらうとも大したことぢやありませんわい。何故といへば、地獄が一生懸命に拒んでも、拙者がそこから救ひ出して上げやうからぢや。それでなくとも、せめて父君をあゝの世へ送つた奴等に手ひどく復讐をして上げませうから、貴女がたは十二分に満足なさらんぢやよ。』そしてそれ以上は何事も言はずに、ドロテアの前行つて跪いて、騎士らしい武者修行者らしい口調で、どうぞ姫君様この城の城主が今や悲しむべき危地に陥つて居りますから、彼に助太刀をして救ふやうお許しを賜りたうござりますと願つた。姫君は情深くもそれを許し給うた。そこで彼は即座に桶を片腕に掻い込み、劍を抜き放つて宿屋の門へと急いだ。其處ではかの二人の客がまたも亭主をぶん殴つてゐたのである。しかしその場所へ近寄ると、彼は少し手前で立ち止つた。マリトルネスとお上さんが、自分等の主人なり良人なりに何故早く加勢して呉れないかと言つたけれども、彼はじつと立つてゐた。

『こんな従士風情の人間どもに向つて劍を抜くのは法に適はんで、かうためらうて居りますのぢや。しかし私の従士のサンチョーを呼んで下され。この防禦や復讐はあれの勤める仕事ぢやで。』とドン・キホーテは言つた。

宿屋の入口の事件はさういふ風で、つまり拳固打ちや平手打ちが非常に活潑に交換されて、その果ては、亭主のひどい損失となり、マリトルネスやお上さんや娘の憤りとなるに至つた。この女等はドン・キホーテの意氣地なさや、また自分等の主人であり良人であり父である人の受けてゐる侮辱やを見て火のやうに怒つた。しかし亭主のことはこのまゝにして置かう。彼は必ず自分を助けて呉れる人を見つかるであらう。もしそれが出来なければ、自分の力に及びませぬことをしようと思つた報いに、散々辱められても、黙つて居らせることにしよう。我々は五十歩後へ退つて、かの判事に對してドン・ルイスが何と答へたかを檢べよう。我々はこの判事が、何故そんな卑しい身装をして徒歩でやつて来たかと、その理由をひそかに訊ねるところで話を切つたのであつた。

この問ひに對して若者は、何か非常な悲みに胸を痛めてゐると見えるやうに手を絞つて、瀧なす涙を流しつゝ答へ



た、「貴方、私の申し上げますことはただこれだけです——ふとした縁で、また御近所に居りましたせいで、お懐しい貴方のお嬢様を、ドリーニャ・クラ様を、初めて見ましたその時から、私の心の君と致しました。私のまことの主人なるお父様、もしや貴方のお心にも別にお差し障りがございませんなら、今日只今からお嬢様を私の妻に申し受けませう。私はお嬢様ゆゑに父の家を棄て、お嬢様ゆゑにかうして身を賣して、あの方がたとひ何處へ行かれうとも、矢が的を届け水夫が明けの明星を届けけるやうに、私は従いて参りました。お嬢様は時々遠いところから私の眼に一杯涙のあるのを見られて、それで推量なされたかも知れませんが、それ以上は深く私の心を知つては居られませぬ。貴方様、貴方は私の両親の財産や家柄や、また私がたつた獨りの後取りといふことも、とうに御存じでございませう。もしこれだけで私を何不足ない仕合せ者にして下さるだけの謂れがあるとお考へ下さいませぬなら、直ぐに貴方の息子として私をお受け下さいませ。私の父がもしや自分ひとりこの幸福に異議を申しませうとも、物事を作り變へて行く力は、人間の心よりも、時が優つて居りますから。」

かう言つて、戀に憐む若者は口を噤んだ。判事はこれを聞くと、ドン・ルイスが心の秘密を白状したしとやかさ賢さにも、また自分自身が立ち至つたこの立場にも、びつくりもし驚きもし當惑もしたのである。そしてこんな出し抜けの思ひがけない事には、どうしてよいか分らなかつた。それ故その答へとして彼がドン・ルイスへ與へたのは、たゞ差し當りのところは先づ安心して居るがよい。そして今日は連れて歸らんやうに下男どもへ相談するから、とだけであつた、それはつまり、雙方に取つて一番良い方法を熟慮する暇を作らうためであつた。ドン・ルイスは強く判事の手を接吻した。いな、判事の胸はおるか大理石像の胸をも感動させるやうな風情にその手を涙で洗つた。判事は抜け目のない人であつたから、この結婚はいかに自分の爲めに得であるかを疾くに感じてゐた。尤も彼は、ドン・ルイスの父親が自分の息子の爲めには有爵の者を求めてゐるのを知つて居たので、出来ることなら、その父親の同意を得てから事をきめる方がよいと思つて居た。

もうこの時は、例の客人等は亭主と仲直りをしてゐた。つまり客人等は、脅文句でよりも却つてドン・キホーテの説諭やなだめ言葉によつて、亭主に催促されただけのものを

拂つたのである。そしてドン・ルイスの下男等は、自分等の

主人と判事との相談の纏まりの結局を待ち受けてゐた。折しもあれ、決して眠ることのない悪魔は、いつぞやドン・キホーテにマムブリノの兜を分捕られ、そしてサンチョ・パンザには驢馬の馬飾りを取り換へられた、あの床屋を、丁度この時この宿屋へ来るやうなことに立ち至らしめたのである。驢馬を厩へひいて行くと、その床屋は、サンチョ・パンザが何かと荷鞍の手入れをしてゐるのを見とめた。そしてその馬飾りを見るや否やそれを知つたので、床屋は勇を鼓してサンチョーに跳びかかりさま叫んだ、「やい、この盗人め、もう逃がさんぞ！ 手前の盗んだ己の金盃も荷鞍も馬飾りも皆返しやがれ。」

サンチョーはかく思ひがけなくも喰つてかゝられ、罵詈雑言を浴びせかけられたので、片手ではその荷鞍を掴み、片手ではその床屋を毆つて齒から血を出させた。しかし床屋は自分の抑へたその荷鞍を、直ぐさま手離すことはしなかつた。それどころか彼は非常な喚き聲をあげたので、宿屋中の人々は残らずこの騒ぎや喧嘩の譯を知らうとて馳せ集まつた。「まア、ほんとに聞いて下され！」と床屋は叫んだ、「この盗人め、追ひ剥ぎめは、私が自分の物を取り返

さうすると私を殺さうとしますのぢや。」

「嘘をつけ、」とサンチョーは言つた、「私は追ひ剥ぎぢやないぞ。立派に戦をして私の旦那のドン・キホーテ様がかういふ分捕物を手に入れさつしやれたのぢやわい。」

この時ドン・キホーテも側に立つてゐたが、自分の従士が攻めるにも守るにも勇敢なのを見て非常に喜んだ。そしてこの時以來、彼はサンチョーを元氣者と見なし、そして騎士道の位階を與へても恥しくない確信するところから、その機會の來次第に、彼に騎士の稱號を授與してやらうと心のうちに固く決した。

この言葉のやり取りの進むうちに、床屋はこんなことも言つた、「旦那様、この荷鞍が私のぢやちふことは丁度私が神様に壽命を借りてをるやうに確かでございますのぢや。そして私は自分でこいつを生みでもした程によろ知りとりませぬのぢや。まア試して見なされ、さうした上で、もしそれが私の驢馬の脊のやうに、ちやんと合はなんだら、私を悪黨と言ふがよい。その上に、こいつを盗まれた同じ日に、まだ一度も使つたことのない、何時賣つても一クラウンにする新しい眞鍮の金盃も一つ盗られましたのぢや。」



それを聞くとドン・キホーテも答へずには居られなかつた。そこで二人の間に口を挿んで、彼等を引き分け、事實が落着くまで人の眼につくところへ置かうとて、その荷鞍を地上に置いて、そして言つた、この立派な従士が、昔も今もこの後もマムブリノの勇であるものを、金盃ぢやといふのが間違ひであることは、皆さんもはつきりと明白にお認めになりませうな。あれは晴れの戦で拙者がこの男から分捕りまして、さてこそ拙者自ら法に適うた正當な所有品の持主となりましたのぢや。この荷鞍は拙者の陽はり知つたことぢやない。がしかしこのことに就いて申したいのは、拙者の従士サンチョが、自分の馬を飾らうために、この負けた腰抜け男の駿馬の馬飾りを剥ぎ取りたいと拙者に許可を願うたといふことです。拙者はそれを許しました。そこでサンチョはそれを取りました。そしてそれを馬飾りから驢馬の荷鞍に變へたといふことに就いては、拙者は普通の説明より出来ません。それは即ち、武者修行の冒険の間にはかういふ取り變へは屢々生ずるといふことです。この事を一切確かめる爲めに、これサンチョ、走つて行つて、その男が金盃ぢやと言つてをるあの兜をこゝへ持つて來い。」

「あゝ、旦那様」とサンチョは言つた、「もし私らの申し分の證據が貴方様の言はつしやるだけなら、この男の馬飾りが驢馬の荷鞍でござりますやうに、やつぱりあのマムブリノの兜も金盃でござりますぞよ。」  
 『私の言ひ付け通りにせい、』とドン・キホーテは言つた、「この城内の何も彼もが魔術にかゝつて居るといふことは、よもあるまいて。」  
 サンチョはその金盃のあるところへ急いで行つて、それを持つて來た。ドン・キホーテはそれを見て、手に取り上げて言つた、「あの従士は、これを拙者の言ふ通りの兜ではない金盃ぢやと、どの顔で言ひ張れたものか、皆様よう見て下されい。そして拙者は自ら従ふ騎士道にかけて誓ひますが、これはこの男から分捕りました兜で、何の附け足しも取りのけもせぬ、そつくりそのまゝの物ですわい。」  
 『そりや全くその通りでござります、』とサンチョは言つた、「私の旦那はこれを分捕つてから今日まで、これを被つて戦をなさつたのは、あの鎧に繋がれとつた不合せ者を逃がしてやんなさつた時でござりましたよ。あの時は大變石つぶてが飛んで來たから、もしこの金盃兜のお蔭がなかつたら、旦那様は御無事ぢやなかつたでござりましたよ。」

第四十五章

ではマムブリノの兜と荷鞍との疑はしい問題が遂に解決する。尙眞實眞劍に起つたその他の冒険のことども。

『旦那様がた、さアこの旦那がたの言はつしやることアどうでござりますのぢや、』と件の床屋は言つた、「この人らはこれを金盃ぢやなうて兜ぢやと言ひ張らうとまでさつしやるが。」

『さうぢやないと言ふ者は誰彼の用捨はせん、』とドン・キホーテは言つた、「もしそれが騎士であらうなら、その偽りを言ふことを拙者が思ひ知らせてやらうし、またそれが従士ならば百千倍も思ひ知らせてやらうわい。」

先程から此處に居りもし、またドン・キホーテの氣質もすつかり呑み込んでゐる我々の方の理髮師は、ドン・キホーテの妄想に後援して、一つ皆の娼みにしてやらうと考へつた。そこでもう一人の床屋に向つて言つた、「床屋さん、か誰かは知りませんが、私もやつぱりお前さんと同じ職業をしとる者で、鑑札を受けて店を出してからも二十年以上になつて、理髮職の道具は一つ残らず隅から隅までよ

う承知しとるものなのぢや。それにまた若い頃しばらく兵隊もしとつたから、兜や圓兜や庇のある鐵帽や、それからその他兵隊の仕事に入り用な品物、つまり兵隊の武器ぢやが、さういふものもやつぱり知つて居りますのぢや。そこで私は立派な考へは取つて置いて何時も着實な判断に従ふのぢやが——今私らの眼の前でこの旦那さんの手に持つてござる品物は、床屋の金盃でないどころぢやない、まるでそんな物とは黒と白とほどに、嘘と眞ほどにかけ離れて居りますわい。それにまた、これは兜は兜ぢやが、満足な兜ぢやありませんよ。」  
 『全くさうぢや、』とドン・キホーテは言つた、「その半分が、即ち頬當が缺けて居りますのぢや。」  
 自分の友人の理髮師の心組を見て取つた牧師補は、「全く本當ですよ。」と言つた。それにカルデニオもドン・フェルナンドもその伴侶の人々も、また判事さへも、もし彼の考へがドン・ルイスの事件で充たされてゐなかつたら、この冗談を仕上げる爲めに加勢したのであつたらう。しかし判事はこんな冗談には、少しもか、いな少しも注意を拂はなかつた程、眞面目な問題に没頭してゐたのである。  
 そこで彼等のおもちやにされてゐる床屋は叫んだ、「まア



こりア魂消てしまふ！こんな身分のあるお仲間で、これを金盥ぢやない兜ぢやと、どうしてまアよくも言はれたものぢや！ほんとに、こりア、どんな賢い大學生でも皆魂消てしまふやうなことでござりますわい。まアようござります。もしこの金盥が兜なら、それぢやまアこの旦那の言はつしやるやうにこの荷鞍も馬の馬飾りの筈ぢやな。」

『拙者には荷鞍のやうに見えるのぢや、』とドン・キホーテは言つた、『しかし今も言うたやうに、その問題には拙者は與からんのぢや。』

『それが荷鞍であるか馬飾りであるかに就いては、たゞドン・キホーテ殿が言はれる通りです。かういふ騎士道の事柄については、この紳士たちも私も残らずこの方のお考へに従ふのですからな。』と牧師補は言つた。

『實は皆さん、』とドン・キホーテは言つた、『拙者が宿泊する度に二度ともこの城内では不思議なことが餘り澤山起りますので、此處でのことは何事にかゝはらず確とした返答はどうも拙者には憚られますわい。この城内で行はれることは残らず魔術によつて行はれると信じますからぢや。初めの時は、こゝに居る魔術使ひのムーア人がしたゝか拙者を苦しめたし、サンチョーとてもその手下の者の爲め善くは

扱はれませなんだのぢや。そして昨夜は大方二時の間もこの腕で拙者は吊り下げられてゐたのぢやが、どうして又何故にそんな災難に出逢ふのか拙者には分りません。そこで唯今も、拙者としてこんな逢ひ易い問題に進んで意見を持ち出しては、輕率な斷案を下す恐れがあります。これが兜ではなうて金盥ぢやとの説に向つては、すでに拙者が答へを與へました。しかし、これが荷鞍か馬飾りかといふ問題については、拙者は確とした意見を出すのは憚つて、ただ皆さんの優れた御判斷に任せませうわい。恐らく皆さん方は拙者のやうに騎士の位を有つてはござるまいから、此處の魔術も貴方がたには效能がありますまい。それで貴方がたの能力は邪魔をうけぬので、この城内の諸物は皆さんに本當に眞實にありのまゝに見えて、拙者の眼に映るやうではありますまいぞ。』

これを聞いてドン・フェルナンドは言つた、『そりアもうその通りですよ。ドン・キホーテ殿はまことに賢くも言はれました。この事柄は私らがきめます。そこで私らはこれを成るべく確かな寄りどころによつて決めたいので、皆さんの祕密投票を願ひまして、その結果をすつかり明瞭に公表させよう。』

ドン・キホーテの氣質を知つてゐる人々にとつては、これは全く非常に面白いことであつた。しかしそれを些とも知らない人々に取つては、世の中にこれほどの馬鹿げたことはないと思はれた。特にドン・ルイスや、その四人の下男どもや、また偶然この宿屋に来てゐた三人の旅客などには、

その旅客等は實は「神聖救済組合」の巡邏であつたのだが、いかにもさう思はれた。誰よりも呆氣にとられた者は、自分の本當の眼の前で、自分の金盥がマムブリノの兜に變つたのを目撃し、そして自分の荷鞍に違ひないものが、立派な馬飾りに成るのを見た床屋であつた。ドン・フェルナンドが、一人々々に投票を集めながら、かくまで争ひの的になつてゐるこの實は、荷鞍であるか馬飾りであるか銘々のお考へを言つて下さいと囁きつゝ歩くのを見て、皆な吹き出した。しかし彼は、ドン・キホーテを知つてゐる人々の投票を集めてしまつてから、聲高く言つた、『な前さん、實を言へばこんなに数多い人たちの考へを集めるには私も疲れたのぢや。といふのは、私が知りたいと思ふことを訊ねて廻るに、皆なが皆な、この品を馬に使ふ馬飾り而も駿馬に使ふものぢやと言はずに驢馬の荷鞍と言ふのは不條理ぢやと、私に言はぬ人とはなかつたからぢや。そこで前

さんもそれに従はねばならん。つまり前さんやお前さんの驢馬は何と申しても、これは馬飾りであつて荷鞍ではないのぢや。そしてこの事件について前さんの申し立てや證據は殆んど役に立たぬのぢや。』

『貴方がた皆さんが間違つてござらんなら、私は天へは行けいでもよござります、』と可哀さうな床屋は言つた、『これが私にや馬飾りぢやない荷鞍と見えるやうに、私の魂も神様の眼にうつりますやうに。ぢやが「掟は王様の好きなやうになる」——私アもう何も申しません。私アほんとに酔うてはをらん、私ア罪業のせいでこそないが、お精進しとりますから。』

床屋のこの愚痴はドン・キホーテの痴けた事どもに劣らぬ慰みを與へたのである。ドン・キホーテは言つた、『かうなれば最早銘々自分のものを、また神様に授かつたものを取るより外はないのぢや、どうか聖徒ペテロ二弟子の長様が祝福を下さるやうに。』

しかし四人の下男のうち一人は言つた、『まアこりやよく／＼巧んだ冗談でなければ、こゝにござるかういふ賢い、いや、さう見える方々が、これを金盥でないといひ、それを荷鞍でないと言つて何處までも言ひ張らつしやるち



ふことは、どうも私の腑に落ち兼ねますよ。けれどもそれをこの人たちが言ひ張りなるところから見ると、どうしてもまざり見えすいとる實物や本當の事に逆うたことを頭張らつしやるこの裏にや、何か隠し事があるとききや判斷されませんのぢや。何故というて——と此處で彼は率直な誓言を呟鳴り立て、——『私ア誓つて言ひますが、世の中の残らずの人間が来て、これを床屋の金盥ぢやない、それを牡驢馬の荷鞍ぢやないと私に思ひ込ませることは出来ませんからの。』

『そりや手もなく牡驢馬の荷鞍にもなりません。』と牧師補は言つた。

『どちでも同じ事ですよ。』とその下男は言つた、『私アそこを言ふんぢやありませんわい。たゞ貴方様かたの言はつしやるやうに、これは荷鞍であるかないかちふのですよ。』

この言ひ争ひに耳傾けてゐた新來の「神聖救済組合」の巡邏の一人は、これを聞くと、立腹と癩癩とを抑へ兼ねて叫んだ、『これが荷鞍ぢやといふことは私の親父は私の親父といふやうに確かなことぢや。これをさうぢやないと言ひたり言はうとしたりする者は皆な酔つげらひぢや。』

『お手前は士百姓のやうに嘘をつく人ぢや。』とドン・キホ

ーテは言ひ返した。そしていつも手から離したことの無い例の槍を振り上げて、相手の頭を狙つて恐ろしい一撃を加へたので、もしその巡邏が身をかはさなかつたら、長々と踏反り返つたであつたらう。槍は地べたに當つて切れ、に砕けた。そしてその餘の巡邏等は、自分等の仲間が打ちかゝられたのを見るや、大聲を揚げて、「神聖救済組合」の助けを呼んだ。その組合員であつた宿屋の亭主は、即座にその職の杖と自分の劍とを取りに走つて行つて、自分の仲間の側に立ち並んだ。ドン・ルイスの下男等は、この混雜に乗じて主人が逃げ出しはせぬかと、その周りに集まつた。家中上を下への騒ぎを見て、床屋は今一度その荷鞍に手をかけた。とサンチョーも同じことをやつた。ドン・キホーテは劍を抜いて巡邏等に打つてかゝつた。ドン・ルイスはその下男等に向つて、自分は一人きりにして置いてドン・キホーテやその加勢をしてをるドン・フェルナンドーやカルデニオを助けに行け、と叫び出した。牧師補は聲の限りに叫んでゐるし、お上さんは黄色な聲を出すし、その娘はわあわあ泣き、マリトルネスはめそ／＼と泣き、ドロテアは仰天し、ルシンダは吃驚してしまひ、ドニー・クララは氣絶した。床屋はサンチョーを殴りつけ、サンチョーは床屋を叩

きつめた。ドン・ルイスは自分を逃がさぬやうに捕へて置かうとて無遠慮にも腕を掴まうとした一人の下男に鐵拳を一つ見舞つたので、その男の齒は血まみれになつた。判事は彼の味方をした。ドン・フェルナンドーは、巡邏の一人を投げ倒して思ふ存分ひつ叩いてゐた。亭主はまたもや大聲をあげて「神聖救済組合」の加勢を呼んでゐた。そこでこの宿屋中は悉くこれ叫喚、叱咤、混雜、戰慄、驚駭、災害、劍撃ち、拳打ち、棒打ち、足蹴、流血の巷となつた。そしてこの混雜と騒ぎとどさくさ紛れの眞つ最中に、ドン・キホーテは自らアグラマンテ

同教徒の諸王侯の主將としてパリ包圍中に會議の陣營の騒擾の眞つ唯中に身を跳り込ませて居るかのやうに思つたのである。そこでこの宿屋中を雷鳴の如く揺り動かす大音聲で叫んだ、『皆の者控へろッ、皆な劍を鞘に收めるのぢや。生命を惜しいと思ふ者は皆静まつて拙者の言ふことを聞くがよい！』

この大音聲で皆な静かになつたので、彼は言葉を續けた、『貴方がた、この城には魔術がかゝつてをるし、一聯隊かそこらの悪魔どもが住んでをると、拙者が申さなんだことですか？ その證據には、貴方がた御自身の眼で、これ見られい、アグラマンテの陣營の騒動が此處へやつて来て、拙

者等の眞つ唯中に移つたではありませんか。その人々が、此處では劍の爲めに、彼處では馬の爲めに、彼方では軍旗の爲めに、此方では兜の爲めに、闘うてをるのを御覽なされい。拙者等は残らず戦うてをりますのぢや、しかも互に心を知り合はずに戦うて居るのぢや。そこで、さア、貴方、判事殿、それから、貴方、牧師殿、お出でなさい。一方はアグラマンテ王を、一方はソブリーノ王を代表して、拙者等を和睦させて下されい。實に、實に、拙者等のやうな優れた人々が、かうも夥しく、些細な種から互に殺し合ふといふことは嘆かほしい次第でありますからな。』

その巡邏どもは、ドン・キホーテの話し風も解せなかつたし、またドン・フェルナンドーやカルデニオやその仲間の人々に散々虐められたので、仲々鎮まりさうにもなかつた。しかし床屋は、その髯も荷鞍も掴み合ひの爲めに更に痛んでゐたので、鎮まつた。サンチョーは忠良な僕らしく、その主人の些細な言葉にも従つた。それからドン・ルイスの四人の下男どもは、静かにしてゐないでも得るところは殆んどないと思つたので、じつと静かにしてゐた。亭主ひとり、この宿屋に来るたびに騒ぎを起すこの氣狂ひの無禮を罰せねばならぬと言つて聴かなかつた。しかし遂に



差し當りこの大騒動はやんだ。唯ドン・キホーテの想像の中には、世の終りの審判の日まで、その荷鞍は馬飾りとして、金盞は兜として、またこの宿屋は城として残つてゐたのである。

判事や牧師補の説諭で今や凡ての人々が平和になり仲好くなつたので、ドン・ルイスの下男等は、直ぐさま一緒に歸りませうと、または主人にせがみ始めた。彼が下男等とこの事を言ひ合つてゐる間に、判事は事なり行きやドン・ルイスが自分に言つたことなどを打ち明けて、ドン・フェルナンド、カルデニオ及び牧師補に、この場合、自分の取るべき方法に就いて相談したのである。その結果遂に、ドン・フェルナンドがドン・ルイスの下男等に自分の身分を打ち明けて、ドン・ルイスを自分と共にアンダルシアまで連れて行き、其處なる自分の兄の侯爵の家でそれ相當の待遇を以て客分にする、といふことに話が纏まつた。つまりかうしなければ、ドン・ルイスは今のところ、たとへ身を切れ切れに引き裂かれても父の家には歸らぬであらうとは、彼の決心から極めて容易に見て取ることが出来たからである。ドン・フェルナンドの身分やドン・ルイスの決心を知つたので、そこでその四人の下男等は、そのうちの三人が

事の次第を報告する爲めに父親の許へ歸り行き、あとの一人がドン・ルイスに付き添うてゐて、三人が再び歸つて来るまでか、或は父親の命令の知れるまでは、その側を離れないやうにするといふことに話が定まつた。かういふ風に、アグラマンテの權威やソブリーノ王の智慧によつて、このごたくさした争論もすつかり片づいた。しかし和合の敵、平和の憎み手は、自分が軽んぜられ馬鹿にされたと感じ、そしてかくも骨の折れる紛亂の中へ巻き込まれた後で如何にも得るところの無かつたのを見て、今一度新たに喧嘩や騒動を惹き起すことにしてやらうと決心したのである。

それはかういふ風にして起つた——その巡邏どもは、自分等の相手になつてゐる人々の身分を聞いたので、この喧嘩の結果はどうあらうとも、どうせ自分等の不利益になりさうだと考へつゝ仲直りをして、その取つ組み合ひから身を引いたのであつた。しかしそのうちの一人は、即ちドン・フェルナンドに散々殴られて蹴られた男は、自分が或る犯罪者を捕へる爲めに持つてゐた多くの逮捕令状の中に、ドン・キホーテに對するものゝあつたことを思ひついた。サンチョがいかに尤もな理由から氣遣つた通り、「神聖救濟組合」は、ドン・キホーテが船奴隷を逃がしてやつた爲め

に彼の逮捕方を命じてゐたのであつた。そこで若しやと疑ひながら、その巡邏はドン・キホーテの人相とその令状とが一致するかを十分に確かめようと思つた。そして自分の懐から一通の書附を取り出すと、偶然にもそれは自分の搜してゐた書附であつた。そこで入念にその書附に讀み耽りながら、彼は手早く讀める男ではなかつたので、一言拾ひ讀みしてはドン・キホーテに眼を据ゑつゝ、逮捕令状に記してあるものと彼の人相とを較べて行つた。そして彼こそ全く疑ひもなくそれに記してある人間だと見破つた。彼はそれを十分確めるや否や、その書附を疊んでしまひ、左の手にその令状を持ちながら、右の手ではドン・キホーテの襟元を呼吸もつけぬほどにむんづと掴んだ。そして大聲に叫んだ、「神聖救濟組合の御用だッ！ この盜賊を逮捕しろと命じてあるこの令状を讀まれたらば、誰でも私が本氣でかうすることが分りませう。」

牧師補がその令状を取つて見ると、その巡邏の言つたのは本當であつたし、またドン・キホーテの人相と合つてもゐた。ドン・キホーテの方では、この土百姓づらにこんな手荒く扱はれるのを見て、憤怒の絶頂に逆せ上げ、激怒の爲めにありだけの節々をがた／＼と鳴らせながら、兩手に全

力を注いでその巡邏の咽喉を締めつけたので、もしも仲間の助けがなかつたなら、ドン・キホーテが手を緩めぬうちに彼の息は切れたであつたらう。自分の仲間を助けねばならぬ義務のあつた宿屋の亭主は、即座にその加勢をした。お上さんは、自分の良人が新たな喧嘩にかゝり合ふのを見て、新たにその聲を張り上げた。そしてその聲は直ちにマリトルネスや娘やに取り次がれて、或は天に向ひ或は其處に居合せる人々に向つて助けを呼んだ。サンチョはこの有縁を見て叫んだ「やれまア私の旦那様がこの城にや魔法があると言はつしやるのは全く本當ぢや。こゝでは一時間と無事には暮らされんものなア。」

ドン・フェルナンドはその巡邏とドン・キホーテの間へ割つて入つた。そして一方は相手の上着の襟を、片方は相手の咽喉を、おの／＼掴んでゐた互の手を緩めさせて、雙方を納得させた。しかし、それに拘らず巡邏どもはその科人を請求し、人々に助力を呼び、そして科人を縛つて渡せと言つて聴かなかつた。それはつまり王への勤めや「神聖救濟組合」への勤めとしてさうせねばならなかつたので、本道や脇道を荒すこの盜賊追劔召し捕りの實をあげる爲めに、彼等はまたもや王や「神聖救濟組合」の名を並べて加勢



援助を求めたのである。

ドン・キホーテは此等の言葉を聞くと微笑して、落ちつきすまして言った、「こら、賤しい生れ損ねの蟲けらども。貴様等は、あの縛られた者等に自由を與へ、囚人を釋し、不幸の者を助け、倒れた者を起し、求めてをる者に恵んでやつた人に向うて、大道の盜賊呼ばはりを致すのか？ この忌々しい奴ども、貴様等は卑しい悪智愚のお蔭で、武者修行に含まれてをる徳も知らせて貰へねば、また貴様等が、武者修行者の本人は勿論のこと、その影法師をも敬はぬ爲めに犯す罪業や無智をも教へて貰へぬのぢや！ やいこら、役人ぢやない盜人どもの一隊よ、「神聖救済組合」の鑑札有つた追剥どもよ。一體拙者のやうな騎士を召し捕る爲めの逮捕狀に印を捺した馬鹿者は何奴ぢや？ 武者修行者は一切の法律に縛られず、武者修行者の法律は即ち剣であり、その法典は武勇であり、その勅令は己が本心であるといふことを知らぬ奴は一體何者ぢや？ 重ねて言ふが、武者修行者が一旦騎士の位階を授けられて、骨の折れる騎士道の職に身を獻げた曉に與へられる特權や免除は、如何なる貴族の特許状も與ふることの出来ぬやうなものであるといふことを、知らぬほどの馬鹿者は一體何奴ぢや？ 全體武者修

行者が今まで人頭税や普通税や王妃の化粧税や王の割當税や通行税や渡し錢を拂うた例があるか？ 武者修行者に着物を拵へてやつて拂ひを受けた仕立屋があるか？ 自分の城中に武者修行者を泊らせて宿賃を拂はせた城主があるか？ 武者修行者を食卓に招かなんた王があるか？ 武者修行者に戀をしかけて、全くその好き好むまゝに身を任さなんだ處女があるか？ そして最後に、萬一敵對して來た時に、たつた一本の手で四百人の「神聖救済組合」の巡邏に四百の鐵拳を見舞ふほど勇敢でない武者修行者が、昔も今もこの後とても世にあらうか？」

第四十六章 「神聖救済組合」の巡邏等の

著しき冒險の終局、並びに我が優れたる騎士ドン・キホーテの大勇猛のことども。

ドン・キホーテがかういふ調子で喋舌つてゐる間に、一方では牧師補が頻りと骨を折つて、その行爲や言葉で認められる通り彼が全く正氣を失つてゐることや、またたとひ彼を捕縛して連れて行つたところで、氣違ひのことであるので、どうせ釋さねばならぬであらうから、最早この事はこれ

より以上に追窮するには及ぶまいと言つて、巡邏どもを宥めたのである。それに對してその逮捕狀を携へてゐる者が答へるには、自分等は何もドン・キホーテの狂氣のことは詮議だてしてゐるのではない、たゞ上役の命令を執行するまでであるから、一旦引致して行つて、若し此方の氣に向いたら三百度でも放免しようと言つた。

『さうではありませうが、』と牧師補は言つた、『貴方がたは今度はこの人を引致してはいけません。また私の考ではその人も引致されることを背きますまい。』

要するに牧師補は非常に言葉を盡し、ドン・キホーテは非常に氣違ひめいたことをしてのけたので、もしそれでこの巡邏どもが彼の正氣の無いことを認めなかつたら、彼等こそ彼にまさつた氣違ひであつたらう。そこで彼等はまづ我慢をするに越したことはないと考えた。そして今尙鋭い言葉のやりとりを續けてゐる、例の床屋とサンチョ・パンザとの仲裁役をさへすることになつた。とう／＼彼等は、公儀の役人として、たとひ雙方を完全に満足させることは出来なかつたまでも、或る程度まで満足させた仲裁によつて、この問題を落着させたのである。つまり二人は荷鞍だけを取り換へて、腹帯や面勒には及ばなかつた。そしてマムブリ

ノ一の兜に關しては、牧師補がこつそりと、ドン・キホーテに知れないやうに、その金盃の代として八リールを拂つたのである。そこで床屋は今日以降未來永劫最早この上の請求は致さず候アーマン、と悉皆辨濟の證書を作つた。最も重要で且つ最も眞面目であつたこの二つの争ひが落着いたので、後には唯ドン・ルイスの下男どもを納得させることだけが残つた。それは詰り、そのうちの三人を家へ歸して、あとの一人を主人と共に残して置いて、ドン・フェルナンドが連れて行かうと思つてゐるところへ一緒に行かせることであつた。好運や僥倖は、この宿屋の戀人たちや勇士たちを祝福して、すでに困難を解決し障礙を除去し始めてゐたので、氣を變へずに、よろづのことに喜んで目出度い結末を齎したのであつた。つまり下男等はドン・ルイスの望み通りにすることに同意した。これはドリーニャ・クラ、に非常な悦びを與へた。丁度その時彼女の顔を見た人は、誰もその心の喜びを見とめぬわけには行かないのであつた。ゾライダは自分の見るすべてのものを十分に會得する事は出来なかつたものゝ、いろ／＼の顔色を見まもつて推測しては、その譯は解らぬながらに沈んだり陽氣になつたりした。殊に自分が何時も眼を離さずに魂を打ちこんでゐる懐かし



いスペイン人の顔色に就いては、取り分けさうであつた。牧師補が床屋に與へた心づけや賠償は、宿屋の亭主の注意を脱れなかつた。そこで彼は、ドン・キホーテの勘定と、その他葡萄酒の糞の損害高や葡萄酒の損耗を請求して、これを一文缺けず拂つて貰はぬうちには、ロシナンテもサンチョの驢馬も決して放さぬと嚴談しかけた。牧師補は萬事を穩かに片づけ、ドン・フェルナンドがそれを拂つた。尤も判事もやはりその勘定を拂はうとまさに言ひ出すところであつた。そこで凡てが平和に穩かになり、この宿屋はもはやドン・キホーテが言つたやうなアグラマンテ陣營の騷擾には似もよらず、却つてオクタヴィアスアウガスタス大帝のこゝに即ちローマの第一の帝王の時代の平和靜穩に歸したのである。これは残らず、牧師補の大熱誠と雄辯と、それからドン・フェルナンドの比類なき義侠に當然感謝すべきであるとは、一般の意見であつた。

ドン・キホーテは今やあらゆる喧嘩から、自分自身のからも家來のからも、全く身を脱し得たので、既に始めてゐる旅を續けて、特に自分に頼まれてゐる大冒険を片づけるのが上分別であると考へた。そこでこの大なる決心を以てドロテアの前に行つて跪いた。が彼女は彼が立ち上らないうちは、一語も口を利かせなかつた。そこでその命に従つて

立ち上り、そして言つた、「美しい姫君よ、「精勵は好運の母なり」とはありふれた諺でござりまして、また談判する者の熱誠によつて危ない事件に上首尾の結末をもたらすことは、よく重大な事件の場合に實地に示されてをります。しかしこの眞理が一番明らかに示されるのは戦ひに越したものはござりません。つまり戦ひにおきましたは敏速活潑は敵の謀略の機先を制して、敵が自ら防禦を備へぬうちに勝利を得ますのぢや。いと高くやんごとなき姫君よ、拙者がかやうに申し上げますのは、拙者は最早この上はこの城の逗留も無益でござりませうし、それにまた唯今のところはまだそれと分りませんが、かうして居ればどういふことが拙者等の不爲めになるやらも計られませんが。貴女様の仇敵の巨人が、祕密に入念に間諜を入れて、拙者があれを討ち滅ぼしに行くところであるといふことを聞き知らぬとも限りませんからです。あれがもし左様な機會を得ましたら、得たり賢しと、何處か難攻不落の城か要塞に立て籠るべきでござりませう。さうなれば、如何に一生懸命に不撓不屈の腕力を盡しましたも、效果は餘りありません。そこで姫君、今も申しますやうに拙者等は迅速に先方の計畫に先んじませう。そこで直ぐさま出發してその幸運を手

に入れませう。つまり拙者と貴女の仇敵との出會が遅れるばかりに、貴女がその幸運を心のまゝに存分にお受けなさる日を遅らすことになりませうから。」

ドン・キホーテはこれだけ言ふと黙りこんで、美しい姫君の答へを靜かに待ち構へた。姫君はいとおごそかな威嚴を以て、ドン・キホーテの物言ひ振りに釣り合ふやうな風で次のやうに答へた、

『騎士殿、孤兒や貧乏人を助けるのを生れながらの義務とする善良な騎士のやうに、この苦境に在る私に扶けをお與へ下さる貴方の御熱誠にはお禮を申します。神様はどうか貴方の願望も私のをも適へて下さいますやうに。さうすれば貴方様は、この世には恩を知る婦人があるとお分りになりませうから。私の發足のことに就いては、私として貴方様のお考へより別に何もありませんから、すぐに致しても構ひません。全く貴方のお氣の向いたやうに私を導いて下さりませ。一旦貴方様に一身の保護を委ねて、貴方様の手に領土回復のことをお任せしました上からは、貴方様のお考へから割り出されたことに異議を申し立てようなどと思つてはなりません。』

『おゝ、それでは誓つて、』とドン・キホーテは言つた、『苟

くも婦人が自ら卑下せらるゝ場合には、拙者は必ずその方の身をもり立て、御先祖よりの玉座に即かせて上げずには置きませぬ。」「危険は遲滞の内に在り」といふありふれた諺も、拙者に旅立てよと促しますから、即座に發足致しませう。そして拙者を威嚇し恐怖せしめ得るものは、天も未だ造り出さず、地獄も未だ見たことがござりませぬ。こらサンチョ、ロシナンテに鞍を置け。そしてお前の驢馬もこの姫君の御乗馬も用意せよ。拙者等はこゝの城主にもこの紳士がたにもお別れして、今の今こゝを發足するのぢや。』

この開始終側に立つてゐたサンチョは、頭を振りながら言つた、「あゝ！ 旦那様、旦那様、皆さまがたの御免を蒙つて申しますとな、この村にや聞いたこともない惡戯がござりますぞい。』

『何ぢや、阿呆め。私の美名を傷け得るやうな惡戯が、どこの村にも、また世界のどこの市にもあらうかい？』とドン・キホーテは言つた。

『そりや立派な御家來として私が是非申し上げにやならんことぢやし、また立派な下男ならきつと自分の主人へ申し上げにやならんことぢやござりますがな、もし貴方様が怒らつしやるなら私はこの舌を抑へて申し上げずに置きましよ



わい。」とサンチョは言った。

『お前の言ひたい事を言ふがよい、』とドン・キホーテは言つた。『尤もその言ひ草が拙者に恐がらせんやうなことならばぢやよ。』といふ譯は、お前は恐がる時がお前らしいのぢやが、拙者は恐がらん時が拙者らしいのぢやからの。』

『眞實誓言、さういふことぢやござりません。』とサンチョは言つた。『たゞそれはな、御自分からミコミコナ大王國の女王様ぢやというてござるそのお姫様はな、まるでさうぢやないちふことが、確かな動かんとおぢやと私は思ひますわい。何故と云うて、このお人かもし自分で言はつしやるやうなお人なら、こゝらにござる誰かさんと、行きつく先きでいつもかも、鼻を擦り合せるやうなことはなさるまいがな。』

ドロテアはサンチョの言葉で緒くなつた。といふのは實は、彼女の良人のドン・フェルナンドが時々他人の見てゐない時を覗つては、彼女の唇から自らかち得た戀の報いを収めてゐたからである。サンチョはこれを見て、かういふ惡をするのは大國の女王といふよりは娼婦にふさはしいと思つたのであつた。しかしドロテアはかう言はれても何と答へも出来かねて、或ひは答へたくなかつたので、サン

チョの言ふに任せたので、彼は續けた。『旦那様、私がこれを申し上げますわけはな、私らが脇路や大道を旅して行つて辛い苦しい月日を過ぎた後で、もしや今この宿屋で自分ひとりで楽しんでゐる人が、私らの骨折りの果實を收穫れてしまふやうなら、何も私が慌て、ロシナンテに鞍を置いたり驢馬に鞍褥をかけたたり、婦人乗の馬の用意したりすることはござりませんからの。私らはじつとして居るがようござりましようわい。そして性惡阿魔にはめい／＼の絲を紡がせて、私らは御馳走くひに行きましようわい。』

あはれ、ドン・キホーテがその従士のかゝる傍若無人の言ひ草を聞いた時の、彼の憤怒はどうであつたらう！ 激怒のため舌はもつれて發音は不明瞭になり、眼は炎々たる火と輝いて、彼は叫んだ。『横着な土百姓め。無禮な、づうづうしい、馬鹿な、口の悪い、口ぎたない、禮儀を知らぬ蔭口きゝの惡口吐きめ！ 貴様はこの拙者の前で、またこの名だたる婦人がたの前で、ようも／＼さういふことが言へたもんぢや？ 貴様はその濁つた頭の中にようも／＼そのやうな賤しい恥知らずな考へを宿したな？ 拙者の前からさがり居れ、この生れながらの怪物め、嘘の置き小屋、偽りの善へ所、惡業の物置き、惡口作者、謔言の觸れ太鼓、至尊

の御身を敬はぬ無禮ものめ！ 失せ居れ、二度と拙者の前に姿を見せたらどういふ目に遇ふか分らんぞ。』かう言ひながら眉を皺め、頬をふくらませ、あたりを睨み廻して、自分の胸にせき上げて來た激怒をあらゆる方法で示しつゝ、右の足で烈しく地面を踏みつけた。サンチョはこの言葉や猛烈な身振りによつて恐れて縮み上つてしまつた。もしその刹那地臺に穴があいてその身を飲み込んでくれたなら、嬉しかつたかも知れぬ程に。それで彼方へ向いて、この怒つてゐる主人の前から逃げて行きたいとばかり思つた。

しかし、もはやドン・キホーテの氣質を非常によく會得してゐた機轉の利いたドロテアは、彼の怒りを宥めようと言つた。『憂ひ顔の騎士様、貴方のよい御家來がつまらぬ事を言はれたとて、さうお怒りなさいませぬ。この人として大方何の理由もないことは申しますまいし、それにこの人は正氣もありキリスト教徒の本心も有つて居りますから、誰に對してもない事を言ひふらすやうなことはありますまい。それ故私たちは何の躊躇もなくかう信じてよろしいでせう、つまり貴方様の仰有るやうに、この城中での出來事はすべて魔術の力で終始して居りますから、サンチョもその惡魔の力によつて、自ら見たと申すことを、私の婦徳を

傷けるやうなことを、見たのでございませう。』

それを聞いてドン・キホーテは叫んだ。『なる程御尤もぢや、貴女様は岡星をお指しなされましたわい。そりやきつとサンチョといふこの罪人の眼の前に何か卑しい幻想が起つて、それで魔術の力に依らねばとても見るこの出來ぬものをこの男に見せたのでござりませう。此奴のおとなしい惡氣のないところから考へますと、この男が誰に對しても偽りを言ひかけるやうなことの出來ぬのは拙者も十分會得して居りますのぢや。』

『全くそれに違ひない、』とドン・フェルナンドは言つた。『ドン・キホーテ殿、さういふわけなら、この男がそんな幻想で正氣を失はらんうちにお赦しなさつて、そして貴方のお慈悲の懷へ取り返しておやりなさらねばいけませんな。』

ドン・キホーテは直ぐさまサンチョを赦した。そこで牧師補がサンチョを連れに行くと、彼は非常におとなしく歸つて來て、自分の主人の前に跪づいてその手を求めた。すると主人はその手を差し出して彼に接吻を許し、彼を祝福しつゝ言つた。『のうサンチョよ、この城中での出來事は残らず魔術の力によるのぢやと、拙者が幾度も言つて聞かせたことを、お前もよう信じてをらうがの。』



『へい、私も信じて居りますわい、』とサンチョは言った、  
『尤もあの毛布の一件は別ですよ。ありや當り前に本當に  
起つて來ましたのぢや。』

『さう思うてはならぬぞ、』とドン・キホーテは言った、『何  
故といふに、若しさうであつたら拙者はあの時、いや今で  
も、お前の仇敵を取つてやれたであらうぞ。しかし拙者は  
あの時にせよ今にせよ、お前を虐めた奴に復讐をしてやる  
ことも出来ねば、又その相手も見つからんぢや。』

人々は皆なこの毛布事件の何であるかを知りたがつた。  
そこで亭主はサンチョの胸上げを詳しく話した。それを聞  
いて人々は少からず笑つた。そしてそれを聞いてサンチョ  
は、もし主人があれも凡て魔術であつたと今一度彼に確  
かめなかつたならば、少からず恥しい思ひをしたであらう。  
それに拘らずサンチョは、自分は自分の主人が信じて主張  
して居るやうな正體のない妖怪變化に依つて、血あ  
り肉ある人間に依つて毛布上げにされたのだと思つてゐる  
ので、その事を、何等の迷妄もつき纏はない明白簡單な事  
實では無いと思ひ込むことが出来るほどに、愚直ではな  
かつたのである。

この名高い一團の人々は、はやこの宿屋で二日を暮し

た。そこで彼等も出發すべき時だと思つたので、ミヨミコ  
ナ女王の復位といふ口實で、ドロテアやドン・フェルナンド  
にドン・キホーテの村まで從いて行く勞を取らすことな  
く、牧師補と理髮師と言ひ出した通り、この二人で彼を  
その村へつれ歸ることにして、そして牧師補がこの氣違ひ  
を自宅に監禁することの出来るやうな一策を工夫したので  
ある。そこでその策略を實行する爲めに、ふと前を通りか  
かつた牛車の人足を頼んで、次のやうな風にしてドン・キ  
ホーテを運ばせた。即ちドン・キホーテの身が樂に入れ  
だけの大ききの、木柵づきの檻みたやうなものを拵へた。  
それから牧師補の差圖や忠告に依つて、ドン・フェルナンド  
やその伴侶やドン・ルイスの下男どもや、それに「神聖救  
濟組合」の巡邏ども、及び宿屋の亭主は、銘々その顔を蔽う  
て、いろ／＼の風に變装して、ドン・キホーテがこの城内で  
既に見た人々とは全く違つて見えるやうに作つた。それが  
出来あがると、一同は今しもドン・キホーテが先の騒動の  
疲れを休めて眠つてゐる部屋へ黙つて入り込んだ。そして  
彼が、そんなことの起らうとは夢にも知らずに、すやくと  
眠つてゐるところへ押し寄せて、彼を引つ捕へ、その手も足  
もきり／＼とふん縛つた。そこで彼がびつくりして目を覺

ました時には、動くことも出来ないで、唯自分の前にある  
異様な姿を見て驚き惑ふばかりであつた。茲に於て彼はそ  
の狂つた心の迷ひから、限りなく自分の前に拵へ上げた幻  
想に、すぐ没頭してしまつた。それらの姿は残らずこの魔  
術のかゝつた城の内の怪物で、自分は動くこともどうする  
ことも出来ないで、言ふまでもなく魔術にかけられてゐ  
ると考へたのである。この策略の拵へ手である牧師補の豫  
期してゐたことが、そつくりそのまゝに起つた譯である。そ  
こに居合せた凡ての人々の中では、サンチョひとりだけが正氣  
でもあり、また自分の本當の姿をもして居つた。彼も主人  
の病氣にかぶれんばかりであつたけれども、それらの變装  
した人々の誰であるかを、感づくことは出来た。しかしこ  
の不意の襲撃や、自分の主人の生捕りの結果が、どうなるか  
を見るまでは、敢てその肩を開かなかつた。また主人も、自  
分の災難の結果を待つて見ようと一語も發しなかつた。  
その結末はつまり、彼等は檻の中へ彼の身體を運び入れて  
中に閉ぢ込め、そして容易にこぢ開けられぬやうに、しつか  
りと柵を釘づけにしたのである。それから彼等はそれを肩  
の上にかついで部屋を出ると、その途端に、荷鞍の床屋でな  
い今ひとりの理髮師が、出し得る限りの嚴かな聲で言ふの

が聞えた——『あゝ、憂ひ顔の騎士よ、汝は今この囚はれ  
の境涯を歎くまいぞよ。それは汝の大なる心を籠めし冒險  
の成就の日を、いよ／＼早からしむる爲めに必要な事であ  
る。その冒險は荒れ廻るマンチャ村の牡獅子とトボソの白  
鳩とが手をつなぎ合せて、その尊大な頸をへりくだらせて  
やさしい婚姻の輓に入るれば、直ちに成就するであらうぞ  
よ。その不思議なる結合により、その勇ましい父親の鉤爪  
にも匹敵するほどの牡の兒が生れ出でて、世の光ともなら  
うぞよ。そしてこの事は、逃ぐるニムフを追ふ者、太陽の  
指が、その持ち前の速き歩みによつて、天の星座を二廻りと  
せぬうちに起るであらうぞ。而してまた汝、劍を片脇に佩  
び、顔に鬚髯を生やし、嗅ぐに鼻ある者のうちにて、いと  
も氣高き忠良なる従士よ。汝は、今汝の眼前にて、この「武  
者修行の花」が連れ去られようとも氣を落す勿れ、歎く勿  
れ。もし宇宙の造り主の御意に叶はば、やがて間もなく汝  
は自から思ひがけなき出世をなして、汝の良き主人が立て  
し契約は必ず汝を欺くまいぞよ。予は賢人メンティロニアナ  
から作られた名前、の權威にかけて、汝に受け合ふのぢや、即ち  
汝の給金は、その時が來れば分るであらうが、必ず汝に支  
拂はれようぞ。それ故この魔術にかけられてをる勇壯なる



騎士の足跡に従いて行け。それは汝等兩人の爲めに前世から定められてをる宿命へ汝を導く旅路ぢやわい。あゝ、もはや我はこの上告ぐることを許されてをらぬによつて、おさらばぢや。我はこれより住みなれしところへ歸り行かう。』この豫言を述べ終る時に、彼はその聲を高く張り上げて、それから段々と低くして行つたので、これを冗談だと知つてゐた人々でさへも、つひ本氣に聞くやうになつたのであつた。

ドン・キホーテはこの豫言を聞いて心を安んじた。蓋し彼は、忽ちその意味を限なく會得して、自分は屹度、自分の愛するドゥルシネア・デル・トボソと神聖な正常な婚姻によつて結びつけられ、その婦人の祝福された母胎から、牡の兒即ち自分の子息が生れ出て、ラ・マンチャの永遠の榮えとなるといふことを約束されたものと思つたからである。そしてこれを悉く確かに信じこんだので、聲を張り上げて深い吐息を吐いて叫んだ、『あゝ、拙者にかくも心嬉しきことを豫言なされた貴方はどういふ方かは存ぜぬが、どうか拙者の利害を見成つて下さるその魔術使ひの賢人へ、拙者に代つて、唯今拙者に向つてなされた左様な悦ばしい比類なき約束を果たさぬうちに、現在かうしてつれて行かれる

この囚はれの境涯で我身を滅ぼさせては下さらぬやうにと、願うて下されたい。その約束を果たしてさへ下されたら、拙者はこの囚はれの苦痛を榮譽と思ひ、縛られてをるこの鎖をも樂しと思ひ、また拙者を横たはらせてをるこの寢床を、辛い戦場ではなう嬉し婚禮の寢床と見ませうわい。また拙者の従士サンチョ・パンザを慰めることに就いては、拙者はこの男が順境にも逆境にも拙者をふり棄てぬその正直律義に信頼しますのぢや。といふのは、もしやこの男か拙者か何方かの不仕合せによつて、拙者が約束したあの島をも、またそれと同等の別品をも授け得ぬやうなことになるやうとも、せめてその給金だけには間違ひがないからです。拙者は既に拵へてをる拙者の遺言状の中に、この男に拂ふべき金額を明記して居りますからの。尤もそれはこの男の數多い忠勤によつて勘定したわけではなく、たゞ拙者の勝手元の都合によりましたのぢや。』

サンチョは非常に恭しく頭を下げて、主人の両手を一時に接吻した。その手は一緒に縛られてあつたので、片手だけを接吻することは出来なかつたのである。それがすむと、怪物等は其の檻を肩の上に持上げて、それを牛車の上に据ゑ付けた。

第四十七章

ラ・マンチャのドン・キホーテが魔術をかけられて伴れ行かれる異様の有様、及びその他注目に價する出来事ども。

ドン・キホーテは、さういふ風にして檻に入れられて荷車の上のせられるのを見て言つた、『拙者はこれまで武者修行者たちの嚴肅な傳記を數多く讀んだが、かういふ風に、またこんなろい遲鈍な動物の歩きさうな、そんなのろくさい足どりで、魔術をかけられた武者修行者が運び去られたといふことは、まだ一度も讀みもせねば見も聞きもしたことはないのぢや。一體武者修行者を運び去る時は、いつも眞つ黒なむら雲に包むか、火の戦車に載せるか、或ひはまたヒッポグリフ半馬半鷲やそれに似よつた獸にのせて、恐ろしい速さで宙を飛んで伴れて行くのぢや。然るにかういふ風に牛車に乗せて拙者を伴れて行くとは！ あゝ拙者には譯がわからぬ！ しかし多分今の世の騎士道や魔術は、往昔のものとは違つたやうかたをするのであらう。そしてまた、この拙者は世界の新しい騎士であつて、すでに忘れられてをる武者修行の道を復活させる開祖ぢやから、

彼奴等も種類のちがつた魔術や妖術をかけられたものを伴れ去る新規の方法などを、新たに作り出したことかも知れぬ。これサンチョ、お前は一體この事柄をどう思ふのぢや？』  
『私はどう考へてよいやら分りませんわい。』とサンチョは答へた、『貴方様のやうに武者修行の書物を讀んどりませんでな。けれどそれはさうとして、御遠慮なしに申しますと、眞實誓言この私らと一緒にをる怪物どもは、全く天主教信者ぢやござりませんわい。』  
『天主教信者！』とドン・キホーテは言つた、『まあ何の事ぢや。こんな變化の形をしてやつて来て、こんなことをして、拙者をこんな目に逢はせるやうな悪魔どもが、どうして天主教信者であらうぞ？ それをお前が確かめたければ、彼奴らに觸つて撫でて見るがよい。さうすれば彼奴らの身體は唯の空氣で、見えはしても手觸りのないといふことが分らうわい。』  
『ほんとに、旦那様、』とサンチョは答へた、『私はもう觸つて見ましたよ。するとそら、そこに急いで行くあの悪魔は手答へのある身體を有つてをつて、話に聞いてをつた悪魔の身體とはまるで違つた別の正體を有つとりますよ。どう



見てもこの人たちは皆銘々硫黄の匂いや他の悪い匂いやのを有つてをりますな。ところがこの一人は一里離れたつても琥珀の香ひがしますわい。』サンチョはドン・フェルナンドのことをかう話した。その人は高貴の紳士らしく、サンチョの言つた通り良い香料を用ゐてゐた。

『そんなことで吃驚すまいぞよ、のう、サンチョ。』とドン・キホーテは言つた、『つまりこの悪魔どもは狡猾なのおや。彼奴らがたとへ身に香料を付けて居るとしても、彼奴ら自身はもとゞゞ靈氣ぢやから、何の匂ひも有たんのぢや。またよしんば彼奴らが何かの匂ひを有つて居るにせよ、嫌なむつとする匂ひの外にや、好い薫りなど有つ事は出来ぬのぢや。それは、彼奴らは何處へ行つても身に地獄を持ち運んで行く、それでその苦惱から助かりやうがない。それにまた好い香氣は楽しみと喜びを與へるものぢやから、彼奴らが好い匂ひのする筈はないのぢや。そこでお前の言うてをるその悪魔が、琥珀の匂ひを持つとるやうに思はれるなら、それはお前が感ぢがひをしとるか、それともそれが悪魔でないと思はせるやうに、お前を晦まさうとしとるのぢや。』

主従の間に交された會話はこんなものであつた。そこで

ドン・フェルナンドとカルデニオとはサンチョが既に或る點まで見破つてゐる自分等のたくらみを、すつかり見破つてしまひはせぬかと氣遣はしくなつたので、取り急いで出發しようと決心した。そして亭主をそつと呼んで、ロシナンテに鞍を置き、サンチョの驢馬に荷鞍を置くやうに命じた。亭主は非常に手敏てびんくそれをした。その間に牧師補は例の巡邏たちに若干の日當を拂つて、自分の村まで伴なはせるやうに手筈をきめた。カルデニオはロシナンテの鞍輪の片側に楯を、片側には金盃を吊るした。そしてサンチョに、自分の驢馬に乗つてロシナンテの羈絆はづかを執るやうにと手眞似で命じた。また荷車の兩側には鐵砲を持つた巡邏を二人づつ附けた。しかしその荷車が動き出さぬうちに、主婦と娘とマリトルネスとは、ドン・キホーテの不幸を悲しんで泣く風をしながら、彼に別れを告げようとして跳び出して來た。そこでドン・キホーテはこの女どもに向つて言つた、『やさしい御婦人がた、かういふ災難はすべて拙者の勤める職分に従ふ人々の運命ぢやから、お泣きなされるな。かういふことは名聲の乏しい騎士には決してふりかゝらんのですよ、世間の人はさういふ人たちを物の數ともしませんからの。勇敢な騎士たちはその美德や勇氣の爲に、

卑劣の手段で優れた者の破滅を計るやうな數多の王侯や騎士たちに妬まれるので、かういふ目に逢ひますのぢや。それに拘らず美德はそれ自ら力を有つが故に、魔術の開祖のゾラストレス拜火教の開祖のことであらうが知つてをる限りの魔術を盡しても、美德は試めされる毎に凱旋して、ちやうど太陽の天に於けるが如く美德は地上にその光を注ぎませう。お美しい御婦人がた、もしや拙者の粗劣から何かにつけて貴女がたの御機嫌を損ねたことがありますたら、何卒お許し下さい。拙者は何人に對しても、知りながら故意と左様なことをしたことはござりません。そしてどうか、意地の悪い魔術使ひのために拙者が陥いれられて居るこの囚はれから、拙者を救うて下さるやう、神へ祈つて下さい。拙者がこの囚はれから免かれましたら、この城内で貴女がたから受けました御恩寵は、しかと心に留め置いて、それ相應に感謝もし記憶もしまた御報恩も致したいものでござりますわい。』

城内の婦人たちとドン・キホーテとの間にこんなことが言ひ換はされてゐる間に、牧師補と理髮師とは、ドン・フェルナンドやその伴侶の者等にも、大尉やその弟にも、それから今や残らず幸福になつてゐる婦人たちにも、取り分け

ドロテアとルシンダにも別れを告げた。彼等は皆互に抱擁し、以後は音信を通じようと約束した。そしてドン・フェルナンドは牧師補に手紙の宛て先を教へて、自分に取つてはそれを聞くより面白いことは外にないから、是非ドン・キホーテの身の上を知らせよと言つた。そして自分の方でも、ゾライダの受洗やドン・ルイスの事件や、ルシンダの歸家など、凡て牧師補が知りたがつてゐると思はれることどもは、残らず書き送ると約束した。牧師補は間違ひなくその求めに従ふ旨を約束した。そこで二人は今一度抱擁してその誓ひを新にした。

亭主は牧師補のところへ來て、これはいつぞや『無分別なる好奇心』といふ小説の入つてゐた提鞆の裏覆ひの中から見出されたからと言ひながら、何かの書き物を手渡しした。そしてこれの持ち主も未だに取りに來ないから、皆残らず持つてお出でになつても宜しうございますと言つた。つまり亭主には讀めないもので、自分にはそんなものは用がなかつたからである。牧師補は禮を言つてその書き物を開いた。するとその草稿の見出しに『小説リソコネテとコルタデロー』といふ言葉を見た。これによつてそれは小説であると分つたし、それに『無分別なる好奇心』の小説もな



か／＼面白かつたので、これもやはりさうであらうと思ひこんだ。といふのは、二つながら大方同じ作者のものであつたからである。そこで牧師補はいつかの折に讀まうと思つて、その草稿をしまひ込んだ。やがて彼の友人の理髪師も、二人ともドン・キホーテに見破られまい爲めに顔を隠して、何れも驛馬に乗つた。そしてその荷車の背後に従いて出發した。進行の順序はかうであつた、眞先には荷車が牛牽きに導かれて行き、その兩側には既に述べた如く鐵砲を持つた「神聖救濟組合」の巡邏が付き、その次ぎには驢馬に乗つて、ロシナンテの糞料糞料を執つたサンチョ・パンザが續き、そして最後には、牧師補と理髪師とが各逞しい驛馬に乗つて、前述の如く顔を包んで、嚴めしいもの／＼しい様子をして、牡牛のろい足取りに合ふやうに各歩みを計つて進んだのである。ドン・キホーテはその兩手を縛られ兩足を擴げて、宛ら肉身の人ではなく石像でもあるかの如く、黙つて辛抱強く柵に倚りかゝりながら、じつと檻の中に坐つてゐた。かやうにしてそろ／＼と黙つて二リীগほど進んだかと思ふ頃、とある谷間に着いた。牛牽きは此處が憩むにも牛に草を飼ふにも恰好な場所だと思つたので、さう牧師補に言つた。しかし理髪師は、すぐ向うに

見える丘陵丘陵の向う側には、今休まうと言つてゐる谷間よりもつと草の多いよい谷間のあることを知つてゐるので、今少し前進した方がよいと言ひ出した。この申し出が採用されて、彼等は旅を續けた。

丁度その時牧師補がふと振り返つて見ると、後の方から旅装のよく整つた六七人の騎馬の人々がやつて來るのであつた。その人たちは、のろくさい念入りの牛の歩みでなく、役僧役僧の驛馬に乗つて、もう一リীগと隔たらぬところに見えてゐる宿屋へ行つて、早く晝の休みをしたいと思いますらしく、急いでゐたので直ぐさま追ひつた。その足の早い旅人等はそろ／＼と近づいて來た。丁寧な挨拶が交された。そしてその新來の人々の一人は、それは實際トレドトレドの役僧で、またその一行の主人であつたが、この牛車や巡邏やサンチョやロシナンテや、牧師補や理髪師や、取り分け檻の中に囚はれてゐるドン・キホーテなどの、この規律正しい行列を見るや、何故何故こんなにして、この人を護送してゐるのかと訊ねずには居られなかつた。尤もその巡邏どもの徽章によつて、これは屹度手に終へぬ追剥か、それとも「神聖救濟組合」の權限で罰される、何か他の犯罪人かに相違ないと、すでに判斷してはゐたのである。彼にさう訊ねかけ

られた一人の巡邏は答へた、『かうして護送される譯はどうか、この御本人にお聞き下さい。私らは存じませんで。』

ドン・キホーテはこの會話を洩れ聞いて言つた、『もし貴方、貴方はもしや騎士道のことに通じてはござるまいか？もしさうならば、拙者は身の不運をお話ししませう。もしさうでなくば、骨折つてそんなことをお話し申しても役に立ちません。』しかしこの時牧師補と理髪師とは、この旅人がドン・キホーテと話をしてゐるのを見て、自分等の策略を看破られないやうな風に答へる爲めに、乗り出して來た。役僧はドン・キホーテに答へて言つた、『いや實は私は有名なダイラルバンド神學者の「論理の要素」紀元一五五七年に出版よりも騎士道の書物のことを餘計に知つてをりますよ。そこで、それだけでよかつたら、どうぞ安心して貴方のお話を聞かせて下さい。』

『やれ／＼さうでしたか、』とドン・キホーテは言つた、『さういふことなら喜んでお話ししませうが、實は拙者は悪い魔術使ひの嫉み嫉みや欺瞞欺瞞から、この檻の中へ魔術で縛られてをりますのぢや。つまり美德は善人に愛されるよりも悪人に阻害されることが多いのですからの。拙者は武者修行者ですが、しかしその名を名譽の記録に傳へて不朽にするに

足らぬと思はれるやうな、さういふ武者修行者ではありません。嫉妬がいかにお息巻息巻けばとて、またベルシャの産んだ残らずの魔術師や、インドの生んだ婆羅門教徒や、エティオピアの生んだジムノソフィストインドの理想哲學者の一團を指す等が、いかに息巻けばとて、それに拘らず、その名を永久不滅の殿堂に納めて、未來永劫の模範典型とし、それに依つて武者修行者たちに、汝等もし武道の譽れの最高絶頂に達したくば、こゝを踏まねばならぬぞと、その足跡を示し得るやうな、さういふ武者修行者のうちの一人でござりますのぢや。』

『ラ・マンチャのドン・キホーテ殿の言はれることは本當ですよ、』と牧師補は言つた、『この方は御自分の罪過罪過からでなく、たゞ美德を忌み憎むものどもの姦惡の爲めに、かうして檻の中に魔術をかけられて居られますのぢや。貴方、或ひはその名前だけはお聞き及びがあるかも知りませんが、これこそは「憂ひ顔の騎士」殿で、その勇ましい事蹟や偉大なる手柄は、嫉みがそれを湮滅させ惡意がそれを隠さうとして一切の努力を拂ふにも拘らず、永久の不滅の大理石像に留められるであります。』

この囚はれ人と自由な人とが、共にさういふ調子で話すのを聞くと、役僧は膽を潰してまさに自ら十字を切らうと



した。そして自分の眼前に在る物事の見分けがつかなくなつた。その供の人々も皆同じく驚いてしまつた。

丁度この時、その會話を聞かうとて近くに來てゐたサンチョ・パンザは、萬事を明白にする爲めに言つた、『ちよつと旦那様がた、私の言ふことがお氣に入るか入らんか知らんが、本當の事實はかうでございます、私の旦那のドン・キホーテ様は私のお袋ほどに魔術にかゝつてゐなされるのぢや。旦那さんは全くの正氣でゐなされますよ。旦那さんは食べもなされば飲みもなされる。また昨日檻に入れられる前になさつたやうに、他の人と同じに用足しもなされます。さうすると、この方が魔術にかけられてゐなされると私に思はせようとなされるのは、どういふつもりでございますか？ 魔術にかゝつた人は食ひも眠りも話しもせんといふことは、いろ／＼の人が言うて居りましたぞい。ぢやが私の旦那様は貴方がたが止めさへなさらずにや、三十人の代言人よりも餘計に喋舌りなされるぢやろ。』そして今度は牧師補に向き直つて叫んだ、『あゝ、牧師様、牧師様、私に貴方が分らんと思ふとなされるかい？ 貴方はこの新規の魔術の魂膽を私が感づいて居らんと思ひなされるかい？ ふん、そんなら申しますが、貴方がどんなに顔を包みなさらうが、

私はちやんと知つとりますのぢや。また貴方がどれほど手管を隠しなさらうと、私は感づいとりますのぢや。どうせ妬みの蔓るところぢや徳は住めません、また慾張りの居るところにや施しはござりませぬ。何と忌々しいこつちや！ 貴方さんさへなけりや、私の旦那様は今頃はミヨミコナ姫様と結婚して、そして私は安う積つても伯爵になつとります。私の旦那の「憂ひ顔の騎士」様の御親切や私の大した御奉公から考へて見ると、それより下のことはありさうに思はれませぬな。ぢやが私は今になつて、こゝらの人の言ふ、運勢の車は水車の車よりも早う廻り、昨日上に居つた者は今日は下になるといふことが、本當ぢやと分りましたわい。私は女房や子供に氣の毒でなりませんよ。何故なら、あいつらはこの親父がどこかの島か國の太守か總督になつて歸つて來るのを待つてをる、それも無理もないことぢやが、そこへ親父はたゞの馬丁で歸つて來るのぢや。牧師様、私はたゞ貴方さんが私の旦那に苛くなされたことを御自分でよう胸に手を當てゝ考へて貰はうとてかう申しましたのぢや。そして用心なされんと、あの世で神様は、こんな風に貴方が私の旦那を囚人になされたことを數へ上げて、私の旦那のドン・キホーテ様がかうして閉ぢ籠められ

てござる爲めに、人助けの功德をせずに打棄つて置きなされる罰も、みんな貴方がお受けなせうぞよ。』

それを聞いて理髮師は叫んだ、『その燈はそこでちよん切れよ！ サンチョ、それぢやお前もやつぱり旦那同様の氣違ひぢやな？ ほんに、お前も少し御主人の氣風や騎士道を承けついで居るから、旦那のお伴をして檻の中へ入つて、旦那のやうに魔術をかけて貰ふことになるぢやらうよ。お前が旦那の約束を眞に受けて釣られたのも、またそれほどほしがつて居る島のことがお前の頭へ入り込んだのも、ほんとに間の悪い時ぢやつたよ。』

『私は誰にも釣られちや居りませぬぞい、』とサンチョは答へた、『たとへ王様にぢやつて、釣られたりするやうな人間ぢやござりませぬわい。私は貧乏はしとりますか、生れつきのキリスト信者で、誰にも借りはござりませぬのぢや。私が島をほしがるなら、他の人はもつと悪いものを欲しがつとる。私らは皆自分の働きのどんなものにもなる。私は男ぢやから、島の總督はおるか法王様にでもなれんことはないのぢや。それに私の旦那様は、誰に分けて呉れてよいか分らん程澤山獲物があらうからの。床屋の親方、言ふことに氣を附けなされ。何もかも鬚髯剃るやうには行か

んからの。ペテロとペテロとの間にもちつとは違ひがありますからの。私らはお互によう知つとるので、私にやごまかしの骰子ころは利き目があるまいで、私はかう言ひますのぢや。私の旦那が魔術にかゝつたといふことは神様が本當のところを知つてござる。そのまゝに放つて置きなされ。掻き立てると却つて藪蛇になりますぞよ。』

理髮師は自分と牧師補とで苦心慘愴して隠さうと努めてゐることを、サンチョの明つ放しの物言ひぶりで發かれはせぬかと恐れたので、彼に返答しようとはしなかつた。そして牧師補も同様の氣違ひから、その役僧に少し前へ乗り出してくれるやうに、さうすればこの檻の中の人の祕密も亦その他さま／＼の面白いことも話してきかせるからと言つた。役僧は同意した。そしてその從者等と共に先に進んで、牧師補から聞かされるドン・キホーテの性質や經歷や狂氣や癖などの物語に熱心に耳傾けた。牧師補はドン・キホーテの狂氣の始めの起りを手短かに述べて、この檻に入れられるまでの武者修行の話の一伍一什と、彼を自宅へ連れて行つてその狂氣を療養する方法を講じようとしてゐる自分等の計畫なども加へて物語つた。役僧も從者もこの不思議なドン・キホーテの身の上話を聞いて又更に吃驚した。そ



してその話が終ると、役僧は言つた、「牧師さん、實は私も所謂騎士道の書物は國家に害をなすものと考へてゐますのぢや。私もつまらぬ悪趣味から印刷されてをるあゝいふ書物は、大抵残らず初めの部分だけは讀みましたがな、一冊でも始めから終りまで通讀することはとても我慢が出来ませなんだよ、といふのは、あゝいふ書物は残らず大抵同じことのやうに思はれますのでな。そしてあの本とこの本とで何程も違ふちや居りませんし、どれもこれも同じですかな。私の考へでは、こんな種類の書き物は、ミレタスの物語ギリシャローマに流行したる如何はしき物語といふ作り話と同じ種類のものですか。あれは教訓を與へるんでなく、たゞもう娛樂一點ばりの馬鹿げた物語で、娛樂と教訓とを同時に與へるあの教訓寓話とは丁度正反對ですよ。またあゝいふ書物の主な目的は娛樂でありませうが、さればとてあゝいふ恐ろしい痴言ちごごだらけの本が世に持囃されるのはどういふ譯ですか。一體心に感ずる樂みは、眼や想像が心の前に持つて來る様様の物に對して、心が見分けたり味うたりする美と調和とから來なければなりません。心に映つて醜いとか不釣り合ひとか思はれるものは、何の快樂も與へることは出来ません。そんならばぢや、十六歳の少年が塔のやうに高い巨人

を斬り倒して、丁度扁桃菓子のやうに、眞つ二つにするといふやうな本や作り話に、何の美がありません。その部分と全體とに、全體と部分とに、何の釣り合ひがありませんか？ また戦の有様を傳へようと思ふ時は、先づ敵の側には百萬からの戦士が居ると言つて置いて、本の主人公をそれに雙向はせませうのぢや。するとその所謂騎士が自分の強い片腕の力だけで勝利を得るといふことを、好かうが好くまいが、無理にも私は信じねばならんぢや。それからまた、生れながらの女王様なり皇后様なりが、見も知らぬ浮浪人の騎士の懐に容易に身を委ねてしまはれるといふに至つては、一體何と言つたら宜しからうぞ？ また騎士を一杯詰めた大きな塔が、順風を受けた船のやうに海を渡つて行つて、今夜はロムバルディヤの地名に居るのが明日の朝はインドのプレスタージョンの地名の國に在つたミ備へらる。初めに天文地理學を講じたる學者も記さねばマルコ・ポーロ十三世紀の有名な旅行家も見たことのない土地へ着いてをる、といふやうなことを讀んで面白がるのは、全く無智な教養のない人でなうて何でありませう？ もしそれに答へて、かういふ書物の作者はそれを小説として書くのぢやから、微細な事實にこだはる必要はないと云ふかも知れんが、さうしたら

私はかう言ひませう、小説は眞實らしく見えるほど優れたもので、また如何にもありさうぢや、これはあり得ることぢやと思はせれば思はせるだけ面白いものです。小説の結構は讀者の理解力と結合すべきものぢや。また不可能のことをもありさうに見せ、困難なことも滑らかにし、讀者が驚き面白がり氣を晴らし娛むやうに常にその心を引き緊めさせて、驚きと喜びが足並を揃へて進むやうに仕組まねばなりません。眞實らしく見せ眞に迫らせるところに作の骨はありますが、それを避けるやうな人には、上に述べたやうなものとは出来ません。どの騎士道の本を讀んでも、その眞中が始めと合ひ、その終りが始めや眞中と合ふやうに、その各章をちやんと一つの纏まつた結構で一貫して居るのは遂に一冊も見たことはありません。それどころか、非常に澤山の人物で組み立て、居るので、釣り合ひのとれた一人の人間よりも物の怪か怪物を拵へ出さうとしたやうに見えますな。その上にまた、その文章が粗雑で、その手柄ぶりも信用されず、その色戀はだらしく、その鄭重な言葉は無細工で、その闘ひは冗漫で、その問答は馬鹿馬鹿しく、その旅行は辻褄が合はず、そして一口に言へば聰明な藝術らしいものは悉く缺けてをります。かういふ譯

ですから、そんな物は無益の物としてキリスト教國から追放してしまふべきですよ。』  
牧師補は熱心に彼に耳傾け彼は正しい判断を有つた人であると感じ、また彼の言ふことには立派な道理があると感じた。そこで彼はかう言つた、「私もやはり同じ意見をもつて居りました騎士道の書物は嫌でしたから、澤山あつたドン・キホーテの書物は残らず燃やしてしまひました」と。それから自分がそれ等の書物を一々吟味したことや、焼いてしまつたものや残して置いたものに就いて話した。それを聞いて役僧は、少からず面白がつて、自分はそれ等の書物のことをあんなに悪くは言つたものゝ、尙ほその中に一つ善いことがあると思ふ、それはこれによつて天才を發揮させる機會を與へたことであると附け加へた。といふのは、是等の書物は、筆を自由に走らせることの出来る廣い茫漠たる天地を開いて、難破船や、暴風や、一騎打ちや、戦などを寫し、大將たるに必要なあらゆる資格を備へた大將を描き出し、その大將をして敵の謀計を先見する智謀を有たせ、その部下の兵士等を激勵し鎮撫する雄辯を有たせ、神謀英斷にして攻勢にも守勢にも大膽ならしめ、こゝに悲しい痛ましい出來事を描いてをるかと思へば、忽ち何か喜ば



しい思ひがけない事件を描き、此處には操正しく賢くつゝ、まじやかな美姫みいがあり、彼處には勇敢にして温良なるキリスト教徒の騎士あり、此處には無法な野蠻な空威張りものが居るかと思へば、其處には華奢な上品な王子が居り、臣下の忠義獻身を示すと思へば貴族の尊嚴と寛大とを示すのである、『お負けに、』と役僧は言つた、『その作者は自ら天文學者にでも、熟達した宇宙學者にでも、音樂者にでも、國政に達した人にでもなつて現はれることが出来ずし、また時には自分の氣が向けば魔術使ひとして出て来る折もありませう。作者はユリッシスの詭計も、エーニアスの信心も、アキリーズの剛勇も、ヘクトルヘクトルキリーズキリーズに殺さるゝの不運も、シノンの謀反も、ユリヤルスの友情も、アレキサンダーの寛大も、シーザーの豪膽も、トラヤーンのローマの寛仁や眞實も、ゾピラスの誠忠も、ケートーの智慧も、つまり名高い人々を完全に一切の資格をば、或は一人の人に結び付け、或は大勢の人々に配りなどして描きます。それでもしそれが出来るだけ眞實を志して、美妙な文體や巧妙な創意を以て書かれましたら、作者は確かに晴れやかな色樣様の織物を織り出して、それが出来あがつた曉には、善美を盡したものと成つて、私が前に申した通り、教訓と娛樂

とを共に與へるといふ、一切の文章の達し得る限りの最高の目的を達することになりませうわい。かういふ書物の範圍は制限がないので、作者は敘事詩も抒情詩も、悲劇も喜劇も、また詩や雄辯術などといふ人の心を惹く美しい藝術の用ひ得る限りの形式を使うて、その力量を見せることが出来ませうわい。敘事詩は韻文同様に散文でも書かれますからな。』

#### 第四十八章

では件の役僧が騎士道物語の問題を論究する。附り彼の才智すぐれしことども。

『貴方、そりや仰有る通りですよ、』と牧師補は言つた、『さういふ理由から考へても、今まであゝいふ種類の本を書いた人々は、善良な趣味や藝術の法に従つてさへ居れば、ギリシャとラテンの二詩星ヘーメルが詩界に於ける如くに、散文界に於いて名高くなれたかも知れませんのに、そんなことに注意を拂はずに書いたので、益々非難に相當するわけです。』

『兎も角、私自身も、』と役僧は言つた、『今申した諸々の點を守つて騎士道の本を書かうといふ氣になつた事がある

のですよ、そしてまア打ち明けて申しますと、實は百枚以上も書きましたよ。そして、それが私の考へ通りに出来たかどうかを試めさうとて、そんな種類の讀み物を好んでやる人達に、學問があつて聰明な人たちにも、痴言ちごんを聞いて面白がるより外何の能もない無學な人々にも見せました。すると皆の人から大喝采を得ましたのぢや。それに拘らず私はその先きを書き続けませなんだ、といふのは、私の職務と不釣り合ひの仕事のやうにも思はれたし、また世間には賢い人よりも馬鹿が多いと感じましたからですよ。馬鹿な大勢に喝采されるよりも、賢い少數の人に賞讃される方がましですが、かういふ本を讀むのは大抵愚昧な民衆なのですから、そんな人々の愚鈍な判断に任せることは私は好みませんでな。

『しかし自分で自分の手を抑へて、それを書き終へる考へまでも棄てさせた主なものは、近頃上演される戯曲について、私自ら起した一つの疑問でした。それはかうです、今日流行して居る戯曲は、純創作ものでも歴史ものでも、凡てが、いやその大部分が、頭も尻尾しつぽも無い他愛もない物です。それでもやはり世間は喜んで見物します。そして傑作どころの騒ぎぢやないものを、傑作と見たり持ち上げたり

してをりますのぢや。またそれを書く作者もそれを演ずる役者も、世間がそれを求めて他のものを求めぬので、これこそ本當の戯曲ぢやと申します。そこで正式に藝術の法によつて結構を作つた作は、唯五六人の識者が分つて呉れるだけで、その他の人々は皆その作の眞價に對しては盲目です。また作者としては少數の人に讃められるより多數の人からパンを得る方がましですからな。そこで私の前に申したやうな主義に従うて作らうとしたら、自分の眉毛を焦がしてしまつた揚句、私の本もその同じ運命に出つくはし、そして私は「エル・カムピローの仕立屋」唯で縫つて糸を掛した指の草臥になりませう。そして私は屢々役者を捕へて、お前らの採つてをる考へは間違つて居るし、またそんな不條理な戯曲の代りに、藝術の法に適うたものを演ずれば餘計に見物を牽き付け餘計に信用を得るであらうと、納得させようと、骨折りはしましたが、彼等はすつかり自分らの考へに囚はれて居りますから、どんな議論も證據もその考へを取り除くことは出来ません。

『忘れもしません私は、何時ぞやさういふ頑迷な連中の一入にかう申しました、「どうです、二三年前この國での名高い詩人が書いた三つの悲劇をスペインで上演した時のこと



を覚えてゐますかい。あれは賢い人にも無學な人にも上流社會にも下層社會にも凡ての貝物を残らず歎賞させ喜ばせ面白がらせたでせう、そして興行人もあの三つだけで、あの後出来た一番よい芝居を三十寄せたものより餘計の金を儲けたでせう。」

「するとその役者は答へました、「仰有る通りです。貴方は『イサベラ』や『フィリス』や『アレキサンドラ』ルベシオ・デ・ナルゼンの事を仰有るんでせう。」  
「あゝいふ物を言ふんです、」と私は言ひました、「そしてあれなどは藝術の法則に従つてゐなかつたかどうか、またそれに従つたために優れた作ともなれず全體の世間を喜ばすことも出来なだかどうかを見なさい。そこで下らんものに執着してゐる世間の見物が悪いのではなうて、何か他のものを作り出すべし知らぬ人たちが悪いのですよ。『復讐されし忘恩』ロペデ・エにも、『ヌマンシア』ヌマンシアはスペインの市、ローマ人に全滅さるゝ、それを材料にしてセルヴンテスが書いた悲劇であるにも、また『戀せる商人』グキョーラの喜劇にも、また『やさしき女敵』オダガタにも、それからまた某々天才詩人の書いた五六の物にも、下らんことは些ともありません。それはその作者自身の名を揚げ評判を高め、またそれを演じた人々に利益を興へましたよ。」と言つ

て、まだいろ／＼とそれに附け加へましたが、それに依つて私はその男を黙らせてこそは了ひましたが、しかしその妄を覺らせてやる程までに納得させたり満足させたりすることは出来なだかと思ひます。」

こゝで牧師補は言つた、「その點です、それを聞いて私は近頃流行の芝居に對して有つてゐる以前の憎惡の念を呼び覺まされました。その憎惡は全く騎士道の書物に對して有つてゐるのに劣らぬ程烈しいのです。テネリーのロイマシセロの説によれば一體戯曲は、人生の鏡、風儀の模範、眞理の畫像であるべき筈ですのに、現今流行してゐるものは無駄ごとの鏡、痴げごとの模範、淫奔の畫像でありますからな。唯今私たちが論じて居るその戯曲で、第一幕では襦袢むすねに包まれて出る赤ん坊が、第二幕では成人した髭男になつて出るといふ位馬鹿げたことが一體ありませうか？  
或ひは老人をから威張り者に、若者を卑怯者に仕立て、見せたり、下男に上品な言葉を使はせ、小姓に賢い諫言を言はせ、國王に玄關番の役をさせ、お姫様を臺所女中にしたりする以上の不條理がありませんか？ それに又彼等が演ずる劇の事件の發展には、殆ど時間の觀念がないのはイヤハヤ何と申しませうぞ？ その一例を挙げますと、何時ぞや

私が見ました或る戯曲には、第一幕がヨーロッパで始まり、第二幕はアジア、第三幕はアフリカでした。そこでもしあれが四幕物でしたら、疑ひなくその第四幕はアメリカで終つたに違ひありません。そこでその場面は全地球の四大地方に置かれたであらうませう。もし人生を寫すといふことが劇の志すべき主眼としますなら、ペピン王元七五二年に即位、紀シヤールかシャルレマン時代紀元六に起るものと思はれる劇中で、ヘラクリウス皇帝西部アジアの帝王、紀元六〇一年より六四二年まで在位に扮装した立役者が丁度ブイヨンのゴドフレイ第一次十字軍の主將、紀元一〇九九年にエルサレムへ入りキリストの聖墓を回らしたらしく十字架を持つてエルサレムへ乗り込み、聖墓を占領するといふに至つては、その兩者の間には數へも切れない程の年月の隔たりがありますので、どんな平凡な頭でもそれで満足させられることがどうして出来ませう？ 而もその劇は作り物語の上に立つてゐながら歴史上の事實に結び付けられて居つて、いやいろ／＼の人物やいろ／＼の時代に起つたきれ／＼の事實が、作り話とごつちやになつて、凡てが眞らしい面影さへないのみか、どう見ても赦し難い白々しい誤りでありますからな。それにます／＼驚くことには、かういふものこそ完全無缺で、これに過ぎるのは皆餘り過ぎたものぢやなどといふ無學な輩あほうが居りますよ。そ

れから宗教劇の方へ行きますと、まア何といふ奇蹟を拵へ上げて居ることです。或る聖者の奇蹟を別の聖者にくつつけるなど、實に出鱈目な拙劣な出来事ばかりですよ！ また通俗劇にさへ、何の理由も目的もなく、たゞさういふ奇蹟とか彼等の所謂變貌といふやうなことが、愚かな見物を驚かせて、芝居に引き付ける足になるであらう位の考へから、奇蹟を押し入れたりしますのぢや。これはすべて眞實を曲げ歴史を害する恐れがある、いや、そのみかスペインの天才たちの恥になります。といふわけは、劇の法則を几帳面に守つて居る外國の人たちイタリー人を指すが我が國で出来る劇の荒唐無稽を見ましたら、さぞわれ／＼を野蠻な物知らずと思ひませうからな。それで文明國の政府の意見で芝居を公認する主要な目的は、何か罪の無い娛樂を折々人民に與へて樂ませ、そして暇のある爲めに陥り易い惡風から救ふにあるのぢやと言つたり——またさういふ目的は、善かれ悪しかれどんな種類の戯曲でも達せられるから、作者や役者に制限したり、こんなものを作らねばならんぞといふ法律を布いたりする必要はない。それはつまり前に言ふ通り、國家の求める目的はどんな戯曲でも達せられるからであるなどと言つたりしたところで、それでは十分の



辯解になりません。その辯解に對して私はかう答へませう。その國家の目的は、言ふまでもなく悪い戯曲よりは善い戯曲に依つて更によく達せられる。何故と言へば、藝術の法に適つて拵へられた戯曲を見物する人は、その戯曲の諧謔に依つてそれを引き立てられ、その眞面目な役々に教訓せられ、その様々の出来事に依つて驚歎せしめられ、その言葉のやり取りを聞いて己の才智を磨き、奸策を見て戒められ、模範によつて賢くなり、惡を憎み善を愛するやうになつて歸りませう。かういふ様々の方法で善い戯曲は見物人の心を、如何に粗野な鈍い者でも感じさせるでありませう。そしてあらゆる不可能の中での一番の不可能は、さういふ様々の素質を残らず備へてをる戯曲は、今日一般に演ぜられてをる大部分の戯曲のやうに——つまりさういふ素質に缺けてをる戯曲よりも優つて、見物人を樂ませ満足させ喜ばせないであらうといふことです。しかしこの爲めに戯曲を書く詩人たちを咎めてはなりません。といふのは、詩人のうちには自分等の缺點を十分に悟つてゐて、自分等がどうせねばならぬかを残らず承知して居る人もありますから。しかし戯曲も商品になつて居りますから、かういふ流行に従はない作物は役者どもが買はぬのぢやと申

しますが、そりや全くです。そこで詩人は自分の作品に對して金を拂ふ役者の要求に適應しようと力めるのです。そしてそれが本當ぢやといふことは、この王國で一番優れた天才エガを指すの書いた無数の戯曲によつて分りませう。彼はその文名を天下に轟き渡らせたほどの絢爛と優雅と華麗と、洗煉された詩句、選擇された言葉、深遠な思想を以て、一口に言へばその筆力たるや實に豊富に、その文體たるや實に高雅でありました。しかも尙作者が役者どもの趣味に適はせようと願つた結果、その作の幾つかは達したやうに凡ての作が眞の完全無缺の域に達することは出来かねました。その他の作者等は實に、無頓着に戯曲を書きますから、それを演じた後で役者どもは罰せられることを恐れて逃げ身を隠すのです。實際これまでも屢々、王様か誰かを侮辱したり、どこかの華族を誹謗するやうなことを演じた廉で罰せられたことがありますから。そこでもし首府に、誰か聰明な分別ある人を置いて、常に首府で書かれるものばかりでなく、このスペイン國內で演ずる目的で書かれた戯曲は、上演する前に残らず一應檢閲させることにして、そしてその檢閲官の許可や檢印や記名がなければ、地方行政官はどんな劇でも興行させてはならぬといふことにすれ

ば、こんな弊害は残らず、そののみか今私がまだ言はない弊害までも取り除かれるであります。さうなれば役者はその戯曲を首府へ送る面倒さへ見れば、安心して演ずることが出来ますし、また作者も斯道に通じた人の嚴密な檢閲を受けるといふ恐れがあるから、随つて一層の注意と勞苦を拂つて銘々作をすることになりませう。さうなれば善良な戯曲が作られて、その目ざす目的も目出度く達せられ、國民の娛樂はもとよりのこと、スペインの天才の評判も、役者の利益や安全も、また役者に罰を課する面倒を省くことも得られませう。そして若しその同じ檢閲官なり別の人なりに、新たに書かれる騎士道の本を檢閲する權限を與へられますなら、必ず貴方が唯今仰有つたやうな完璧の傑作が現はれて、典雅な貴重な雄辯の寶で我が國語を富まし、單に惰けものばかりでなく、非常に忙がしい人々にも、害の無い娛樂を與へる爲めに、世に出て來る新作の光の前に、舊作は暗隅に逐ひ除けられてしまひませう。弓は何時曲げられて居ることは出来ず、弱い人間といふものは、何か正しい娛樂がなくては居られませんからな。』

た、『學士様、此處ですよ。私らが正午休みをするかたぐ、生々した草の多い草場があつて、牛にも結構な場所ぢやと申したのは。』

『なる程さうらしいな、』と牧師補は答へた。そして理髮師の言ひ出したことを役僧に話すと、彼もその眼前に横たはつてゐる美しい谷の跳めに牽きつけられて、彼等と共に休んで、この景色を樂しみながら、親しみの出來て來たその牧師補の話も聞かうし、また取り分けドン・キホーテの行爲に就いてもつと詳しく知りたいものと心を決めた。そこで自分の下男のうちの數人を、餘り遠くないところにある宿屋へ遣つて、皆の人々の腹を拵へられるだけの食物を持つて來させようと思つた。それは此處でこの半日を休まうと思つたからである。これに對して一人の下男は、今頃あの宿屋へ着いてをる筈の荷駄驛馬が運んでゐる食物が十分にあるから、大麥の外は宿屋から何も持つて來る必要はないと答へた。

『それでは、獸どもを残らずあそこへ連れて行つて、あの荷駄驛馬をこちらへ連れて歸れ。』と役僧は言つた。

こんなことの運ばれてゐる間に、サンチョは、どうも胡散臭いと思つてゐた牧師補と理髮師とが、始終くつき通



してゐた檻の側から離れたので、自分の主人と話が出来る  
と見て取つて、ドン・キホーテの入れられてゐる檻に近寄  
つて、そして言つた、『旦那様、私は貴方様が魔術にかゝつ  
てござることに就いて本當のことを申し上げねば気が休ま  
りませんわい。あの顔を包んで居りますあの二人の男は、  
私らの村の牧師さんと床屋さんでござりますぞい。私はど  
うも、貴方様が功名手柄をしてあの二人より偉いものにな  
んなさるのを嫉むばかりに、あの人等がかういふ風にし  
て貴方様を連れて行く謀略を考へついたんぢやないかと思  
ひますがの。もしそれが本當ぢやと、貴方様は魔術にかゝ  
つてござるのぢやない、たゞ瞞かされて馬鹿にされてござ  
るだけのことになりますぞい。そこでこれを確めるにや、  
貴方様へ一つものをお訊ね致したうござりますのぢや。そ  
して若し私が思うてをる通りに貴方様が返事をなさつた  
ら、貴方様はこの瞞着を發くことが出来ませうぞよ。そして  
御自分は魔術にかゝつて居るのぢやない、氣が變になつて  
居るのぢやといふことが分りませうぞよ。』

『サンチョよ、何でも訊ねるがよいぞよ、』とドン・キホー  
テは答へた、『拙者は何なりお前の訊くことに答へて満足  
させてやらうわい。あそこに居る私らの路伴どもを、私ら

の近所の人で知り合ひの、あの牧師や床屋ぢやとお前は言  
ふが、そりや如何にも同じ人間と見えさうなことぢや。し  
かしそれが眞實眞剣にさうぢやとは、どのやうな事があら  
うとも信じてはならぬぞよ。お前の言ふ通りだとへこの者  
等があゝの二人の者とそつくりに見えようとも、それは拙者  
に魔術をかけた奴がそれに生き寫しの姿をして居るのぢや  
と、お前は眞實思はねばならぬのぢや。何故といふに、好き  
なまゝの姿になることは、魔術使ひには譯もないことぢや  
から、今お前が思うてをる通りに思はせようとして、私らの友  
だちの姿になつて居るかも知れん。そしてお前がたとへて  
シウスの糸この事前を持つて居らうとも、遁げ道の見付けら  
れんやうな幻想の迷宮へお前を誘ひ込まうとて、姿を變へ  
て居るかも知れんぞよ。そして彼奴らは拙者の心まで無我  
夢中にしてしまつて、この災難が何處から湧いたか判断し  
兼ねるやうにしてをるかも知れんぞよ。一方にお前は私ら  
の村の牧師補や床屋が此處に路伴になつて居るといふし、  
また一方には拙者はかうこの檻の中へ閉ぢ籠められて居つ  
て、この拙者を閉ぢ籠め得る程の力は亂神の力なりでなうては  
世にあらう筈がないと心に辨へて居るとすれば、これをお  
前は何と言ふぞ、何と考へるぞ。それこそ古往今來魔術

にかけられた武者修行者のことを書いたあらゆる歴史の中

で、拙者が讀んだこともない魔術でなうて何であらうぞ？  
それ故彼奴らがお前の言ふやうな者ぢやといふことに就い  
ては、安心して居つてもよいぞよ。拙者がトルコ人なら彼  
らもお前の言ふ通りの者ぢやらうがの。しかしお前は何か  
拙者に訊ねたいと言つたが、言ふがよい。すればたとへお前  
が今から明日の朝まで訊ねても返答をしてやらうわい。』

『あゝ聖母マリア様助けて下さりませ！』とサンチョは  
聲を張り上げて言つた、『旦那様一體まア貴方様は私の言  
ふのが分り切つた眞實ぢやといふことも、貴方様のこの囚  
はれや災難には魔術よりも悪計の方が餘計に働いて居ると  
いふことも、お分りなさらん程に頭が鈍うて脳味噌が足ら  
ないのでござりますか？ けれど、さうぢやから仕方がな  
い、私は貴方様が魔術にかゝつてござらんぢふことを、は  
つきり教へて上げませうわい。サア旦那様、神様はこの苦  
みから貴方様を救うて下さりませうで、また貴方様が少し  
も當てにしてござらん時にドルシネアのお姫様が貴方様  
を抱いて下さりませうで——』

『私に禁厭は御免ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『お前  
の聞きたいことを言ふがよい。先きに言つたやうに出来る

だけ精しく返答しようからの。』

『それが私の望みでござりますわい、』とサンチョは言つ  
た、『私が知りたうて、貴方様に言うて貰ひたいのは、武者  
修行の名目で、貴方様が勤めてござるやうに武道に従うて  
ござる方々は、皆本當のことを言はつしやることと思ひま  
すし、また全くその通りでござりますが、さういふ工合に、  
何一つ足しも減らしもせず、残らず本當のことを言うて  
貰ひたいのでござりますわい——』

『こら／＼、拙者は何一つ嘘はつかぬぞよ、』とドン・キホ  
ーテは言つた、『もうその問ひは止めい。サンチョよ、お  
前のその誓言や強請ことや前觸れにはうんざりしてしまふ  
わい。』  
『へい、私はもう旦那様の御親切や御眞實に頼つて居りま  
す。』とサンチョは言つた、『そこで今の話に關はりのある  
ことぢやで、甚だ憚り様ながらお訊ね致しますが、貴方様  
は御自分で考へてござるやうに魔術でこの檻の中へ閉ぢ籠  
められなかつてから、世間で言ひますやうに、一寸用足し  
に何處か他へ行かうとか行きたいとかいふ氣にお成りなさ  
れましたらどうでござりますぞい？』  
『何處かへ行く』とは解せん、』とドン・キホーテは言つ



た、『サンチョー、ジャンとした返答が聞きたいならもう少しはつきり言へ。』

『何處かへ行く』ちふことが貴方様にお分りなさらん筈がござりますか？ はて、學校の子供でも、赤ん坊の時から知つとりますわい。まアそれぢやな、かう言へば分んなさらう——貴方様は何か人に代つて貰へんことをしたいと思はつしやらなんだかの？』

『あゝ！ 分つたよ、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『ウム、度々ぢや、丁度今もぢや。この窮境から救うて呉れい、さうせんと何もかも臺なしになつてしまふわい。』

第四十九章

はサンチョー・パンザが主人

ドン・キホーテと爲せし抜目なき會話を傳へる。

『はア、分りましたわい。』とサンチョーは言つた、『私<sup>わ</sup>が心から知れたがつとつたのは、それでござりますわい。サア／＼もう旦那様、人が氣の觸れとる時に、世間の人が「何<sup>なに</sup>某<sup>た</sup>は何處が悪いのか分らん。あれは食ひもせにや飲みもせず、眠りもせにや何を訊ねても當り前の返事はせん。あれは魔につけられとるとしか思はれんな。』と、よう申します

が、貴方様はそれを言ひ消すことが出来ますか？ それから考へて見ると、食ひも飲みも眠りもせず、また私の言ふ人間持ち前の働きもせんやうな、さういふ人が魔にかけられとる者ぢやといふことになりませわい。けれど貴方様のやうに便氣を催したり、飲み物を當てがはれりや飲みもするし、食ひ物があれば食ひもするし、訊かれるだけのことに返事もする人は、さうぢやござりませんぞよ。』

『サンチョーよ、お前の言ふことは本當ぢや、』とドン・キホーテは答へた、『ぢやが先にも言つた通り、魔術の種類は澤山あるのぢや。そして時代の移るにつれて魔術も段々變つて行く。往昔はさうぢやなかつたらうが、今時の魔術にかゝる人は拙者のするやうなことを残らずするかも知れんといふこともありさうなことぢや。そこで時代の慣はしを見ずに理窟を言うたり當て推量をしたりするのは埒もないことぢや。拙者は魔法にかゝつて居ると自分で知りもし感じても居るから、それで十分拙者の本心は安まるのぢや。もし拙者が魔術にかけられたのではなく、自分の卑怯や臆病からかうして徒らにこの檻の中に身を横たへて、今の今でも拙者の援助や保護を頻りに求め居らうも知れん萬民に對して、その窮乏不遇を救うてやることが出来るのに棄て、

置くのぢやと自分で思うたら、拙者は頗る心苦しいであらうがの。』

『それはさうでも、やつぱり、』とサンチョーは答へた、『貴方様はこの牢屋から出るやうになさつたら、この上の十分な御満足であらうかと思ひますわい、それにや、必ず私<sup>わ</sup>が力一杯手傳うて、この檻から貴方様を引き出してでも上げますからの。それでも一度あの忠義なロシナンテに乗れるか乗れんか試して御覽なされ。あの馬もやつぱり魔術にかゝつとると見えて、悲しさうに鬱いでをりますよ。さうすりや私らは今一度冒險搜しの運試めしが出来ませう。そして若しうまく行かなんだら、その時になつてこの檻へ歸つて來ても十分、間に會ひませう。もしそれ程貴方様の運が悪いか、私の間抜けのせいでこの計畫<sup>もろ</sup>を果せなんだら、貴方様と御一緒にこの檻の中に入つて參りますと、正直な忠義な御家來として誓言を立てませう。』

『お前の言ふ通りにすることにしよう。サンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた、『そしてもしお前が本當に拙者の身を自由にするこの出来る折が來たら、萬事お前の言ふまゝにならう。ぢやがな、サンチョー、拙者のこの災難に就いてお前の考へがどれ程間違つてをるかは今に分らうぞよ。』

この武者修行者と常軌を逸した從士とはかう話つゞけながら、牧師補や理髮師や役僧などが既に下馬して彼等を待ち受けてゐたところへ着いた。牛牽きは直ぐさま牡牛ともの軛<sup>くわ</sup>を外して、その美しい緑の草原に自由に放してやつた。その草原の鮮かさはドン・キホーテのやうに魔術にかけられた人でなく、その家來のやうに全く覺めて正氣である人を誘ひ寄せるかの如く見えた。家來は自分の主人を少時の間檻から出してくれるやうに牧師補へ頼んだ。それは、もう檻から出してやらないと、この牢屋は自分の主人のやうな紳士の禮儀に適<sup>あ</sup>ふほどの清潔を保てないかも知れないといふのであつた。牧師補はそれを察した。それで、その求めには喜んで同意するが、たゞその主人が自由にされる元<sup>もと</sup>の調子に返つて二度と再び見付けられぬやうなところへ往つてしまひはせぬか、それが氣遣ひであると言つた。

『旦那様が逃げなさらんことは私が受け合ひます。』とサンチョーは言つた。『また私も受け合ひます、』と役僧が言つた、『殊にもしこの方が騎士として、私らの同意を得ずには立ち去らんとしふ約束をなさるなら。』



ると言つて、その上自分のやうに魔術にかけられた者には自分の好きなことが出来るものではない、といふのは魔術をかけた人はそのかけられた人を三百年間も一つの場所から動かないやうにすることが出来る。そして若し遁げ出さうとしても飛んで歸らせる、それ故、殊に又萬事に都合の好いことでもあるから、貴方がたは拙者を釋いて下さつても差支へはない、若しそれを許さねば、貴方がたがずつと離れて居られぬ限りは、已むなく皆さんの鼻の穴に對して失禮をせねばならぬと言ひ張つた。役僧は二本一緒に縛られてあつたドン・キホーテの手を取つた。そして彼の口約束と誓言によつて人々は彼を釋いた。檻を出ると彼は夢中になつて喜んだ。彼は先づ第一に全身をうんと伸ばした。それからロシナンテの立つてゐるところへ行つて、その腰を二つ三つ平手で敲いて言つた、『神様も貴い聖母マリア様もまだく拙者を見放しはなされぬのぢや。あゝ駿馬の花よ、鏡よ。私らは共に望み通り、間もなく一緒にならうわい。そしてお前は、この背中に主人を乗せ、拙者はお前の上に乗つて、神様が拙者をこの世へお遣はしなされたその職務をば勤めよう。』さう言ひながら、サンチョーを従へて彼は片蔭へと退いた。其處から歸ると、非常に身輕になつてゐた。

つて、自分の家來の計畫を實行する念も前よりは一層強くなつてゐた。

役僧は彼の狂氣の性質の並外れなのや、凡て彼の言ふこととや返答には、優れた智慮が見られるのに、一旦騎士道の問題になると、かねて聞いてゐた通り、その鏡を踏み外してしまふのを、不思議に思ひながら、じつと彼を見つめた。そこで彼は氣の毒に思つて、丁度食物の來るのを待つて皆が緑の草の上に坐つてゐる時、ドン・キホーテに言つた、『もし、貴方、一體まア下らぬやくざな騎士道の書物をお讀みになつたお蔭で、魔術にかけられて居るとか何とかと、嘘と眞ほども事實から懸け離れてをることを、一心に信じなされる程正氣を失はれたといふのは本當でござりますか？ どんな人間の頭にでも、この世の中に本當に、あの數限りないアマデイスどもや、大勢の勇士や、トレビゾンドのあらゆる帝王たちや、あのヒルカニアのフリクスマルテたちや、あの澤山の婦人乗馬や、廻國の處女たちや、大蛇や怪物や巨人や、それから驚くべき冒険とか、戦争とか、素晴らしい一騎打ちとか、壯麗な衣裳、戀煩ひの姫君たち、伯爵になつた従士ども、滑稽な一寸法師、戀の手紙、喋々嘯の囁き、空威張りする女ども、つまり一と口に言へば、

騎士道の書物に收めてある謔言を悉く信じてることがどうして出来ませう。私自身としては、あんな本を讀む時に、ふと讀み止めて、こりや残らず嘘ぢや痴けごとぢやと思はぬ間は、唯幾らかの娛みを得ますと申すばかりです。しかしその本の何であるかをよく考へるやうになると、私はその中の最上の本でも壁へ投げ付けます。もし手近に火でもあれば、火の中へ投げ込みませう。常軌中庸の道から外れた詐欺瞞着の輩として、また新たな宗旨や道德の開山として、またあゝいふ馬鹿々々しい書物の中に書いてあるものを残らず眞理として、無學な社會に信じさせ押し付けようとする教師として、彼等にはさういふ刑罰が丁度相當ですからな。あゝいふ書物は圖々しくも貴方に向つてしたことで明らかに分る通り、身分のある聰明な紳士の正氣をさへ掻き亂して彈りませんよ。貴方もあゝいふ書物のお蔭で、この檻の中へ閉ぢ籠められて、丁度金儲けの爲めに獅子や虎を方々見せ物にして歩くやうに、牛車に乗せて運ばれなさるやうな目に逢うてお出でですからな。さア、ドン・キホーテ殿、少しは御自分を憐れとお思ひなさるがよい、常識の懐へお歸りなさるがよい。そして貴方のその潤澤な天賦の心性をば、何か貴方の本心を益し名譽を加へるに足るやう

な他の讀み物の爲めにお使ひなまつて、神様が貴方に賜うたその裕かな常識を役にお立たせなさるがよいですぞ。そして若し、それでも尙性癖に驅られて、軍功や騎士道のことを書いた書物を読みたいとお思ひなさるなら、聖書の中の「士師記」をお讀みなさい。あれには壯大な事實や、勇ましく確實な事蹟も書いてあります。ルシタニアポルテユガはギリアトッスを有し、ローマはシーザーを、カルタゴはハニバルを、ギリシヤはアレキサンダーを、カステイルはフェルナン・ゴンザレズ伯を、ブレナンシアはシードを、アンダルシアはゴンザロー・フェルナンデスを、エストレママンデラはディエゴ・ガルシア・デ・パレデーヌ三十二章の註を見よを、ジェレズはガルシ・ベレス・デ・ワルガスを八章の註を見よ、トレドはガシラソ十五世紀スベを、セギールはドン・マヌエル・デ・レオ十五世紀スベを有してゐます。かういふ人々の勇ましい事蹟を讀めば、高き心も樂まされ教へられて喜びと驚きに充たされませうわい。ドン・キホーテ殿、かういふ物こそ貴方の健全な理解力を以てお讀みになる値打ちがありませう。それに依つてこそ貴方は歴史の知識を高め、美德の愛を増し善に強くなり、禮節を磨き、猛々しからずして雄々しく、卑怯ならずして沈着になられませう。さすれば皆これ神の



榮えや、貴方御自身のお爲めや、また貴方の御出生の地と承はるラ・マンチャの名譽になりませう。』

ドン・キホーテは非常な注意を以て役僧の言葉を傾聴してゐた。そして彼が言ひ終つたのを見て、稍暫し彼を見詰めてから彼に答へた、『貴方、そのお話はどうも拙者に向つて、世の中には武者修行者などは決して無かつたとか、また、騎士道の書物は残らず嘘偽りで、國家の爲めに害あつて益がないとか、拙者があゝいふ書物を讀んだのは悪いこと、それを信じたのは尚悪いことで、拙者がそれに記してあるやうな武者修行といふ艱難の道に従ふことによつて、あゝいふことを模倣するやうになつたのは尚更悪いことであるなどと、説法なさるお考へであるやうに見えますがな。貴方はゴールやギリシャのアマデイスともとか、その他あゝいふ書物に一杯書いてある武者修行者などは、決して世に居らなんだものぢやと言はれますからな。』

『全く貴方が仰有る通りでございますよ。』と役僧は言つた。それに對してドン・キホーテは答へた、

『貴方は更にまた、かういふ種類の書物が拙者の正氣を顛倒させる程の害を與へて、拙者を檻の中へ閉ぢ籠めるに至つたとか、また拙者が自分の研究を改め變更して、更に多

くの興味や教訓を與へる一層眞實な他の書物を讀んだ方がよからうなどと仰有りましたな。』

『フム、なる程。』とドン・キホーテは續けた、『拙者には、貴方こそ氣の違つた魔術にかけられた人と思はれますわい。何故というて、貴方は大膽にもあの天下に治く事實として認められ受け容れられてをる事に對して、そのやうな不遜極まる言語を弄せられたからぢや。貴方のやうにあの事實を打ち消す者は悉く、讀めば腹が立つのでその本に加へよと貴方が言はつしやるその刑罰に當りますのぢや。一體アマデイスその他あゝいふ本に充ちて居る残らずの武者修行者が、決してこの世に存在せなんだなどと人に思はせようとするのは、丁度その人に、太陽は光を與へず、氷は冷たからず、地は物を育てずと思はせようとするやうなものぢや。世の如何なる才子と雖も、フロリブ姫とブルガンディのギイとの物語後者はシャイレマンや、またシャイレマン時代に起つたファイラブラス、第なる勇士とマンティブル橋の物語ファイラスの橋上の巨人を退治すが本當のことでない人と人を説き伏せることが出来ませうか？ 一切の善きものにかけて、今が晝間ぢやといふ程にそれは眞實ぢや。そして若しそれが嘘なら、ヘクトルや、アーキリリスやトロイの戦争やフランスの十二貴

族や、或ひはまた今尙大鵬に變つて生き存へ、絶えず、その國內で待ち設けられて居る、イギリスのアーサー王などの居つたといふことも、やつぱり嘘でなけりやなりませんぞ。さうなりやゲアリノ・メズクキノの傳記シャイレマン傳記はイタリー語、一五二七年にスペイン譯出づも「聖玉杯」搜索の物語傳説の中傳説の中も偽りぢやと證明し、またトリストラムとイソールト女王の戀も、ギネピアとランスロットの戀も二つながらアーサー王傳説のうちに在りみな偽りぢやと證明されるわけぢや。然るに大ブリテン國第一の酌人老女クインタニョーナを見て、まだ覺えてをる人々さへ居りますからの。それは全く本當のことで、拙者の父方の祖母がいつも床しげな頭布を被つてをる老女を見る毎に、「孫や、あの方はクインタニョーナさんによく似てござるわい」と言うたものですよ。この言葉から推しても、必ず祖母はその老女を知つてゐたか、或ひは少くともどうかして繪姿を見たことゝ判斷されますわい。それからあのピニールと美人マガローナの物語十二世紀のプロバを眞實ぢやないと打ち消し得る人がありますか？ ああ勇ましいピニールが木馬に乗つて宙を飛んで行く時に鞭代りに使つた鐵串は今日が日でも王室の武庫に見られませうわい。その鐵串は荷車の轆桿たがきよりか少々太いですよ。そしてその鐵串は今バビエ

サスペインの英雄の鞍の側にありますよ。それにロンセスワルレスには太い梁ほどもあるローランドの角笛がありますぞ。さういふ事からしてわれ／＼は十二貴族やピニールといふ者や、シードといふ者や、その他それに似寄りの騎士で人々が俗に冒險家と呼んでをる人々が居つたものと判斷が出来ませぬのぢや。さうでなくば恐らく拙者は、あの勇敢なルシタニア人のジュアン・デ・メローポルテユガの名高い騎士のやうな武者修行者も居らなんだと思はにやなりませんわい。この人はブルガンディへ往つて、それからアラスの町のフランスでモーサン・ピニールといふ名高いシャルニーの領主と闘ひ、その後バールゼルの町ルスの市でモーサン・アンリック・ド・ルメスタンと闘うて、兩方ともに打ち勝つて名譽を擔ひましたのぢや。また、勇敢なスペイン人ペドロ・バルバとグティエレ・キハーダこの一家の直系から拙者は出ましたのぢや、この二人が、やつぱりブルガンディでサン・ポーロ伯の息子たちを打ち負かした時に仕遂げた奮撃突進も嘘ぢやと思はにやなりませんわい。またドン・フェルナンド・デ・ゲヅラはゼルマニーへ武者修行に行つて、あそこでオウストリア公爵家の騎士メッシル・ジョルヂと眞劍勝負をしたことも、やつぱり嘘ぢやと思はにやなりませんわい。また「バソー」の騎



士シノーロー・デ・キニョーネスの數々の馬上試合も、カステイリヤの騎士ドン・ゴンザロー・デ・グズマンに對するモーサン・リュイ・ド・ファルスの壯圖も、ほんの嘘事と思はにやなりません。その外またわが國や外國のキリスト教徒の騎士たちの數多い事蹟もさうなりませう。拙者は繰り返して申すが、あれほど確固眞實なことを打ち消す人こそ、全く分別も正氣も缺いてをりますわい。』

ドン・キホーテが事實と作り話とを取り交せて言ふのを聞き、且つ武者修行の事蹟に關する事やそれに附屬することどもを如何にもよく知つてゐるのを見て、役僧は呆れてしまつた。そこで彼はそれに答へて言つた、『ドン・キホーテ殿、貴方の仰有ることも多少の眞理のあることは私も打ち消し兼ねます。殊にスペインの武者修行者に就いてはさうです。またフランスの十二貴族の存在したことも喜んで承認致します。しかしテュルバン大僧正があの人たちに就いて記して居ることを、残らずあの人たちが本當にやつたとは、信ずる氣になれません。つまり事の眞相はかうです、あの人たちはフランスの諸王に選ばれた騎士たちで、その人品も地位も武勇も、皆等しかつたので（等しくなかつたとしても少くとも等しくなければならん筈であつたので）同

輩」と呼ばれました。そしてそれは、今日サンチャゴとかカラトラブとかの階級があつて、その階級に居る者は生れの良い優れた勇氣ある騎士ぢやと見做されて居るやうな、さういふ風な宗教上の一階級でした。そして只今私らが聖ヨハネの騎士とかアルカンタラの騎士とか言ふやうに、その十二人の同輩が一つの武士階級に選ばれたので、あの當時「十二貴族の騎士」と言ひ慣はしてゐたのですよ。シードといふ人も、またベルナルド・デル・カルビーといふ人も、世に在つたことは疑ふべくもありません。しかし俗にあの人たちがしたと言つて居るやうな事を、あの人たちが本當にしたといふのは甚だ疑はしいと思ひますな。またもう一方の、貴方の仰有るピエール伯の鐵串のことや、それがバビエサの鞍の傍に在ると仰有ることに就いては、身の恥を懺悔致しますが、私は嘗てその鞍は見ましたが、その鐵串の方は、貴方様の仰有るほどに太いのにと拘らず、私が間拔けな爲めか近眼な爲めか、つひ見ることが出来ませなんだよ。』

『それは寸毫の疑ひなくその鐵串はあそこにありますのぢや、』とドン・キホーテは言つた、『それのみか、確かな筋から聞くとところに據れば、あれは錆びないやうに牝牛の皮の鞘に納めてあるさうですわい。』

『さうかも知れませんが、』と役僧は答へた、『しかし、私はそれを見た覺えがないと、自分の受けて居る僧職にかけて誓ひますよ。しかし、たとひそれがそこに在るとしても、それか何もあんなアマデイスたちや世間で噂をする大勢の騎士たちの物語を、私が信じねばならぬといふ譯にもならず、また貴方のやうに立派な、さまざまの美質を備へ立派な理解力をもつてをるお方が、あんな不條理な騎士道の書物に書いてある途方もない氣違ひめいたことを、眞實なことぢやと思ひ込まれるにも當りませんわい。』

第五十章

ドン・キホーテと役僧との抜目なき論戰。附りその他の出來事ども。

『冗談を言はつしやる！』とドン・キホーテは答へた、『國王の裁可を受け、その筋の人々の認可を経て印刷された書物が、そして偉人にも小人にも、富者にも貧民にも、學者にも、無學者にも、身分ある人にも無き人にも、要するにその地位財産の如何に拘らずあらゆる種類の人々に褒めそやされ、天下一般に喜んで讀まれる書物が——それが嘘ぢやと！ それのみか殊にその書物は如何にも眞實らしく見え

るものを、即ちその父も母も國も親族も年代も場所も、また一人なり大勢なりの騎士によつて成し遂げられた事蹟をば序を追うて一日々々と記して居るものを、貴方、お黙りなされい。そんな不謹慎な言葉を吐くものではござらんぞ。今日只今貴方に對して分別ある人間らしくなされいと御忠告申すから、それにお従ひ下されい。たゞ貴方はあの書物を讀まれるがよい、さうすればあれから與へられる面白味が分りませうわい。まア考へて御覽なされ、たとへば今こゝで我々の眼前に次のやうなことが現はれるとしたら、それより面白い見物があらうか？ 即ちこゝに深い泡立つ巨大な湖があつて、そこには大蛇小蛇蜥蜴の類がうよよと群がり、その上に兇猛な恐ろしいありとあらゆる生き物が泳ぎ廻つて居る、するとその湖の眞中から哀しげな聲が聞えて来て、『お、騎士よ、この恐ろしい湖を見て居る御身は何人であらうとも、若しこのほの黒い浪の下に隠されてある寶を手に入れようと思はゞ、おん身の雄々しき心の勇氣を現はして、この暗く渦巻く水の唯中に身を投げよ。さうせずばこの無限の闇の下に横たはる七人の妖精の七つの城に收めてある數々の大不思議を見ることは叶ふまいぞよ。』と言ふ。するとその騎士は殆んどまだその恐ろしい聲



の終らぬうちに、深く考へる暇もなく、わが身を曝すその危険を思ひ廻らすこともせず、また身に着けて居る重い鎧さへ脱ぎ取らずに、神と愛する婦人とに身の安全を祈りながら渦巻く湖の真中へ躍り入る。そしてわが身の運命の成り行くすべも知らず、思ひも寄らぬ時にエリジアの野邊もこれとは比べられぬやうな、花咲き匂ふ牧原に身は居るのぢや。そこでは、大空は遙かに澄み渡り、日輪は不思議な光りを以て照り輝き、眼にはあざやかな緑葉の木々の茂みが映つて、その青々しさに身心を恍惚たらしめる。その間に投げかはす枝々の間に、彼方此方と飛び交ふ数限りない美しい翅の小鳥どもの美しい自然のまゝの囀りは、聞く耳を慰める。此處には水晶水のやうな透明な小川があつて、その水は篩はれた黄金とも至純の眞珠とも見える細かな砂や白い小石の上を潺湲と流れて居る。其處には様々の色した碧玉や磨き立てた大理石で巧みに拵へられた噴泉が見えるし、此處には今一つ鄙びた風が見える。それは小さい贔貝の殻や螺旋状をした白や黄色の蝸牛の住宅などがわざと工夫をこらして不秩序に置かれ、しかも煌めく水晶石や不透明の緑玉石の碎片の中に混つて居るので、趣に富んだ細工は神に入り、技は自然を模しながらも自然を凌駕す

るかのやうに見えるのぢや。するとその騎士の眼には、思ひがけなく堅固な城廓か華麗な宮殿か見えて来る。その壁は黄金の大塊より成り、その数々の櫓は金剛石、その門は風信子石ぢや。一口に言へば、それを拵へてある材料は金剛石や紅寶石や紅玉石や眞珠や黄金や緑玉石に過ぎないが、しかもその技術が一段と珍しいので、その建築は實に驚くべきものである。こんなものを残らず見終つてから、さて更に神往き魂飛ぶのは、その城門から出て来る、はでやかに華やかに装うた一群の處女を見ることぢや。その有様をもし今拙者が、あの物語などに記してあるやうに描き出さうとしたとて、それこそ到底及ばぬことぢや。やがてその残らずの處女たちのうちで長と見える一人の處女は、この渦巻く湖に飛び込んだ勇敢な騎士の手を取つて、一言も口をきかずに、その立派なお城か宮城へ案内し、母親に生んで貰うた時のやうにその騎士を眞つ裸かにして、微温たかい水に沐浴させ、身體ぢうに薫のよい軟膏を塗り、思ふ存分匂はせ薫らせたこの上ない柔かい薄絹の肌着を着せますのぢや。その間にいま一人の處女がやつて来て、騎士の肩から長袍をかけてくれる、その長袍はどう安く見ても一市だけか或ひはそれ以上の値打ちがあるといふことです

わい。やがてそれがすむと、その騎士は別室に案内される、そこにはたゞ不思議と驚き歎ずるばかりであるほどに飾り立てた食卓がある。そして手を洗ふには、琥珀や芳香ある花から絞り取つた水を掛けられ、象牙の椅子に坐らせられ、處女等は皆深く沈黙して給仕をする。また如何にもおいしさうに拵へられた種々様々の馳走をば、どれに手を着けようかと選擇に迷ふ程持ち運び、誰が何處で奏して居るか分らんが、食事の間ぢう、音楽の奏せられるのを聞く、といふに至つては如何ばかり心往くことせう。やがて食事が終り食卓が片づけられると、その騎士は椅子に倚つて、恐らく平生の通り齒を剔じつて居る。すると外のより遙かに美しい一人の處女が不意にその室の戸口から入つて来て、騎士の傍に坐り、この城の眞相や、自分が魔術にかけられて此處に留められてをることや、その外この騎士を驚かせたこの騎士の傳記を読む人を吃驚させるやうなことを物語る。しかし拙者はこの事はもうこの上詳しくは話しますまい。つまりこれから推して、人の讀むどんな武者修行者の物語のどこの一節を何人が讀まうとも、喜びと驚きに充たされるといふことが分りませうがな。そこで貴方、拙者の勤めを聞きなさい。そして拙者が先きに言つた

通りかういふ書物をお讀みなさい。さうすれば貴方がどんなに氣が慥いで居られうとも、その爲めに氣が晴れて、元氣が減入つて居るならば氣を引き立て、くれませう。拙者としてはこれだけのことは言へますのぢや、つまり拙者は既に一個の武者修行者に成つて居りますので、勇敢にも慥慥にも寛大にも上品にも寛濶にも鄭重にも、剛毅にも柔和にも堅忍にもなつて、艱難をも牢獄をも魔術をも忍ぶことを學びましたのぢや。そしてたとへ拙者はほんの暫くの間こそ狂人のやうにこの檻に閉ぢ籠められては居りましたが、もし天が拙者を扶けまた運命が拙者を助けぬなら、この腕の力に依つて何處かの國の王になり、この胸に懐いてをる感謝や慈悲を現はすことが出来るやうにと望んで居りますわい。貴方、全くのところ貧乏人は、いかに強くその考へを懐いてゐても、自分の慈悲の美德を何人にも示すことは出来ませんからの。また心の中ではばかりの感謝といふものは、丁度行ひなき信仰が死んでをるやうに、死物ぢやでの。この理由から拙者は、幸運がこの身に皇帝になるやうな機會を早く與へて呉れ、ば嬉しからうと思ひますぢや。さうなれば自分の友人たちに對して、いや取り分け拙者の従士で世にまたと無い好漢サンチョ・パンザに對して、この心



を善行に現はして見せませう。そしてもう永いこと約束して居る一つの國を喜んでこの男に與へませう。たゞこの男に自分の領地を治める能力がないかと氣遣うて居りますわい。』

サンチョは主人のしまひの言葉を小耳に挟んだ。そして主人に言つた、『ドン・キホーテの旦那様、貴方しつかり骨折つて下さるやうにして下さりませ、貴方様はそれを何遍も約束なさつて、私は長いこと待つとりますんぢや。私にそれを治める腕がないといふことは決してござりません。またさうであつたにしたらところで、世の中にや、年に澤山の金拂うて領地を賃借する人があるぢふ話でござりますか。さういふ人たちが、政治向きの事はして呉れませんが、領主様は兩脚伸ばして、自分ぢや何の面倒も見ずに納めて来る年貢を受けなさるのぢや。私がしたいのはそれでござりませぬ。私は細かい事はほじくり廻さずに、早速皆な仕事から手を洗ひませう。そして公爵様のやうに地代を取つて、暢氣に暮らして行きませうよ。』

『そりや、サンチョさん、』と役僧は言つた、『たゞ歳入を請け取るといふことだけならそれで好いかの。しかし領地の領主は司法の府に臨まねばなりませんよ。そこでは才能

や健全な判断が必要になります。殊に眞實を發見する確固たる決心が必要です。若し始めにこれが缺けてゐたら、中頃やお終ひは何時も間違つてしまひますのぢや。そこで、神様は狡猾な人の悪計を無効になさるやうに、いつも質朴な人の正直な志を助けて下さるのぢや。』

『そんなむづかしい理窟は私にや分りませぬよ、』とサンチョ・パンザは答へた、『私は唯、その國が私の手に入りさへすりやその治め方は分るぢやらうと思つて居ますわい。何故と云うて、私も他の人同様に魂も人並の身體も持つとりますから、他の領地の王様に劣らず私も手前の領地の王様になれませぬ。さうなりや私の好きなやうにしたいもんで、好きなやうなことで楽しみたいもんで、そして楽しんで満足したいもんでござりますわい。人は満足してしまへばもう何の慾もござりませぬ。何の慾もなくなりやもうそれでお終ひでござりますわい。そこでその國が手に入りませうやうに。貴方さんも御機嫌よう。そして盲目が盲目に言つたやうに、お互に成り行きを見ませうよ。』

『サンチョさん、お前さんの言つて居ることも悪い考へぢやない。』と役僧は言つた、『それでもやつぱりその國のことに就いてはまだ言ふべきことが澤山ある。』

それに對してドン・キホーテは答へた、『何がまだ言ふべきことがあるのぢや。拙者は唯あの偉大なゴールのアマデイスがその従士をインストラ・フィルメの伯爵に封じたのを學んで、その先例に従ふまでのことぢや。そこで少しも良心の迷ひなくサンチョ・パンザを伯爵にしてやりますわい。この男は今まで武者修行者の持つてゐた最良の家來の一人ぢやからの。』

役僧はドン・キホーテの言つた筋の立つた痴言(も)し痴言(も)に筋が立つものとすればに、吃驚りした。彼が述べた例の湖の騎士の冒險の話しぶりや、讀んだ書物の中の念入りの嘘偽りが彼に與へた影響などに吃驚りした。そして最後に役僧は、その主人の約束した國を手に入れたいと一心に思つて居るサンチョの人の好きに驚いた。

折柄、先きに宿屋へ荷駄驛馬を伴れに行つた役僧の下男等が既に戻つて來たので、一枚の毛氈をひろげて、草原の緑の草を食卓として、皆木蔭に座を占めて食事をした。それは既に述べた通り、牛牽きはこの場所を利用してやらう爲めであつた。彼等が食事をしてゐると、突然氣たゞましい物音や鈴の音が聞えた。それはすぐ近くにある荆棘や繁つた灌木の間から聞えたやうに思はれた。するとその途

端に、身體一面に黒や白や鳶色の斑點のある美しい山羊が一匹その森の中から跳び出して來るのを見た。その山羊の後からは、山羊飼ひが、それを呼び止めて檻へ歸らせるいつもの呼び聲を出して呼びながら従つて來た。その逃げ出した山羊は物懐ぢしておびえて、恰も保護を求めめるかの如くこの一團の方へ走つて來て、やがてじつと立ち止まつた。そこへ山羊飼ひがやつて來て、その角を掴みながら、宛ら分別判断を備へて居るものに言ふやうに、山羊に向つて話しかけた、『うろつき者よ、うろつき者よ。』「斑」よ、「斑」よ。お前はどうして跛ひいて此處まで來たのぢや? おい娘や、狼でもお前を脅したのか? 容貌よしよ、一體どうしたのか言つて呉れんかい? ぢやがな、お前は雌ぢやから、じつとして居れんといふ外にや、何もわけはあるまいよ! お前の出來心にも懲りくぢや、またお前が眞似る外の奴等の出來心にも懲りくぢや! よい娘ぢやで、歸つて來い、歸つて來い。お前はさほど満足ぢやなうても、とにかく檻の中か仲間と一緒に居るかすりや大丈夫ぢやよ。皆を番して導かにやならんお前がかういふ風に迷ひ出したら、皆はどうなるんぢや?』

この山羊飼ひの言葉はそれを聞いた一同を面白がらせた



が、役僧は取り分け面白がつた。そこで彼は山羊飼ひに言つた、『まあ、お前さん、さう急きなさんな。さう泡食つてその山羊を檻へ驅り立て、歸ることはない。そりやお前さんの言ふ通り牝ぢやから、お前さんが幾らそれを防がうとしなさつても、その自然の本能に従ひますから。う。まあ一口食べて一杯飲みなさい。さうすりやお前さんの背に立ちも静まらうし、またその中にや山羊の氣も落ち着きませうわい。』とかう言ひつゝ、役僧は肉叉の先きに冷めたい鬼の腰肉をのせて山羊飼ひに渡した。

山羊飼ひは禮を言つてそれを受けた。そして一杯飲んで聲を落ち着けてから、かう言つた、『今のやうに私がこの檻へあんな眞面目なことを言つたとして、貴方様がたは私を阿呆ぢやと思つて下されては困りますぞい。打ち明けて申しますと、私の使つた言葉にや少し秘密がありますのぢや。私は馬鹿でござりますが、と云うて人間にすることと獸にすることの差別を知らんほどの馬鹿ぢやござりませんわい。』

『そりや私もさうぢやと思ひますよ、』と牧師補は言つた、『深林は學者を育て、羊飼ひ小屋は哲學者を宿すといふことは、身に覺えがあるので私もとうから知つて居りますので

な。』

『ともかくも、貴方様、』と山羊飼ひは答へた、『羊飼ひ小屋にや身に覺えのある人が泊りますよ。でこれが本當ぢやとよく皆さまへ承知してお貰ひしたいので、訊ねられもせんのに出しや張るやうでござりますが、もし貴方様がた御退屈なさらずに、一寸の間聞いて下さるなら、本當のお話を一つ致しませうわい。さうすりや私の申すこともこの旦那の(と牧師補を指さして)お言葉も確かになりませう。』

それに對してドン・キホーテは答へた、『その事柄にはどうも武者修行道くさいところかあると思ふので、お前さん、拙者はこの上もなく喜んで聞きますわい。またこの紳士がたも皆非常に利發な方ばかりで、お前さんの物語はきつとさうであると思ふが、人の心を興がらせ面白がらせ樂しませるやうな珍らしい新奇な物事を好かれるから、やつぱり喜んで聞かれようわい。そこでさア始めなさい。拙者等は残らず聞かうと待ち構へて居りますわい。』

『私は自分の杖を引いて行く（機軸的遊戯に於いて一人がその遊びから退く時にいふ言葉、自分の所爲を以て退く）とサンチョは言つた、『そしてこの饅頭を持つてあそここの小川へ行つて、三日分食ひ溜めしときましょ。私の旦那のドン・キホーテ様の言はつしやることを聞けば、武者

修行者は何かの拍子で六日の間も出路（でしか）の分らんやうな深い

森の中へ入り込むことが何度もあるので、武者修行者の家來は折さへありやこの上は詰らんといふまで食うて置かぬやならんからな。それでもし腹にもどつさり詰めて置かず旅囊にもうんと貯めて置かぬや、そんな事も度々あるのぢやが、乾枯びた木乃伊（みみ）になつて森の中に立往生するかも知れんわい。』

『サンチョよ、そりやお前の言ふ通りぢや、』とドン・キホーテは言つた、『お前の好きなどころへ行つて、精一杯食ふがよい。拙者はもう澤山ぢやで、たゞ心にさへ糧（か）を與へればよいのぢや。それはこの人の物語を聞けば得られることぢや。』

『私等も皆さうしませう。』と役僧は言つた。そして山羊飼ひにその約束の話始めるやうに頼んだ。

山羊飼ひは角を擱んで捕へてゐた山羊の背中を二つ三つ平手で敲いて、かう言つた、『斑（ま）よ、私の側へ坐るんぢや。檻へ歸るにやまだ間があるからな。』山羊は彼の言葉が分るらしかつた。即ち主人が坐ると、自分も靜かにその側に身を伸ばして、主人がまさか話さうとしてゐることを私も十分注意して聞きますといふやうに、彼の顔を見上げたので

ある。そこで山羊飼ひは次のやうにその物語を始めた。

### 第五十一章

はドン・キホーテ護送中の人々に話した山羊飼ひの物語を述べる。

『この谷から三リーグのところの一つの村があります。それは小さいけれどもこの近郷で一番富んだ村の一つです。そこになか／＼裕福な一人の百姓が住んで居りましたが、その人は非常に人に敬はれて居りました。金持ちであれば敬はれるのが當り前ですが、その人は自分の有つてゐた財産のお蔭といふよりは、その徳の爲めに敬はれて居りました。しかしそれにも増してその人を仕合せにしたものは、自分でも言つた通り、非常な容貌よしの、珍らしく利發な、やさしい操かたい娘を一人有つて居つた爲めでした。それでその娘を知る人見る人は誰も皆、この娘が神様や天然から受けた並ならぬ恵みに驚くばかりでありました。子供の時から美しかつたが、大きくなると共にその美しさも増して、十六の歳にはいかに美しくなりました。その美貌の評判はあたり近郷残らずの村々へ擴がりました。いや、私は何であたりの村々とだけ言ひませうぞ？ その



評判は遠い市々へも、また宮中や、あらゆる階級の人々にまで傳はつて、その人々はまるで何か珍らしい希代なものか、何か不思議な業をする肖像でも見るやうに、四方八方から見に來ました。

「父親はその娘をよく看守りましたし、またその娘も自分の身を守りました。若い娘を保護するには、自身本人の身だしなみに越した錠前も番兵も門もありませんからの。その父の身代やその娘の美貌やで、遠くの人も近所の人も大勢その娘を女房に貰はうとしました。しかしこんな値打ちのある寶を有つて居る人には如何にも尤もな次第やが、父親はこの無數の婿がねのうちの誰にわが娘を任せたらよいかと惑うて心を決め兼ねました。私もさういふ無理ならぬ願望を懷いて居つた大勢の中の一人でございました。そして私は同じ村でもあり、血統は正しいし、若い盛りではあり、財産も非常に裕でありましたので、なか／＼成功の望みがありました。いま一人私とは同じ村で同じやうな資格を備へた希望者がありました。それで父親は私ら二人のどちらにしても娘の爲めには幸ぢやと思つて、孰れにしようかと、とやかうその選擇に苦しみました。そこでその當惑から脱れよう爲めに、これをレアンドラ(といふのが、私を

こんなに不仕合せにした金持ちの娘の名前ですが、その娘の心に任せようと決心しました。つまり私らは二人とも對等ぢやで、その選擇は可愛い娘の心のまゝに委せようと思ひましたのぢや——これは自分の子供を世に一人立ちさせうと思ふ凡ての父親が學ぶに足る仕方です。何も私は、卑しい悪いものをもその氣まゝに選ばせねばならぬといふのではありません。たゞ善いものの子供らの前に並べて、その好きなやうに善い選擇をさせよと言ふのです。レアンドラが孰れを選んだか私には分りません。私の知つてをるのはたゞ、父親が娘の歳の行かないことを楯に、自分も責を負はず私らを斥けもせぬやうな曖昧な言葉で、私らを二人とも外したといふことだけです。私の競争者はアンセルモといひ私はユーゼニオーと申します——どうぞこの悲劇に出る人物の名前を覚えて居つて下さるやうに。その悲劇の大詰は、恐ろしいに違ひないと明かに豫想はされますが、まだあやふやの裡にあるのです。

「丁度その頃、私らの同じ町の貧乏な小作人の息子で、ギセンチ・デ・ラ・ロサといふ者がやつて來ました。そのギセンチはイタリーでは兵隊、外の處では潜水夫を勤めて居りましたが、そこから故郷へ歸つて來たのです。この男は十二

位の子供の頃、ふと私らの村の道をその仲間と一緒に通りがかつた或る隊長にさらはれて行きまして、十二年してから若者になつて、いろ／＼の色に彩どられた兵隊服を着て、硝子の飾り玉や鋼鐵の鎖などで身體一面を飾り立て、戻つて來ました。そして今日は一つの派手な着物で、明日はまた違つた着物で出歩きました。しかし皆、やにこい、びか／＼した物で、地の悪い安物ばかりでした。生れつき意地の悪い百姓どもは、仕事のない時は意地悪の固りですから、それを残らず見て取つて、その男の美しい服や寶玉類を一々注意して見て、つまりその男の持つてゐるのは色の違つた三枚のシャツと、それに對の甲掛けや長靴下だけぢやと看破りました。しかし彼はそれだけの物をいろ／＼に配合させ結合させましたから、もし百姓どもがそれを勘定せなんだなら、彼は十枚以上の着物と二十以上の羽飾りを見せびらかしたと誰しも請合ひましたらう。彼の着物のことをこんなにお話ししても、これは、この物語に大變關係がありますので、決して用のない無駄ごとぢやと思つては下さるな。彼はいつも村の廣市場の大きい白楊の下の腰掛に坐つて、自分のいろ／＼の手柄話をしては、聞く人々の口をあめぐり開けさせて足を止めさせました。この地球の

上には彼が見なんだ國は一つもなく、また彼が從軍せなんだ戦争は一つもありません。彼はモロッコやテュニスに居るよりもつと澤山のムーア人を殺し、またその話によれば、ガルシラソーとディエゴ・デ・パレデスと、その他彼が名前をあげた幾百の勇士等よりも數多く一騎打をして、しかも戦ふ毎に血一滴も失はずにいつも勝利を占めて來たのです。さうして彼はまた自分の幾つもの傷痕を見せました。それは何の痕だか見分けは付きませなんだが、彼はそれをいろ／＼の衝突や會戦の際に受けた鐵砲傷ぢやと申しました。最後に彼は途方もない横着な風で、自分の同輩にも自分の身元を知つてゐる人たちにさへも、「お前」と呼びかけて、そして「私のこの腕は私の先祖ぢや、そして私の手柄は私の子孫ぢや」とか、「私は兵隊ぢやで王様と同じぢや」とか威張り散らしました。かういふ法螺に、かて、加へて、彼は些とばかり音楽が出來ました。そして賑やかに六絃琴を弾きましたか、或る人は「あいつは六絃琴に物を言はせる」と言つた位です。いや、彼の藝はそれだけでは盡きません。彼はまた詩人めいたところがあつて、村に起るどんな詰らんことでも二三里の長さの唄に作りしました。『さても私が述べましたこの兵隊は、このギセンチ・デ・ラ・



ロサは、この悪黨、この色男、この音楽者、この詩人は、ちやうどその廣市場に面してゐた家の窓から、レアンドラにしばしば見かけられ注意されて居りました。彼の見かけの好い着物のびか／＼するのがレアンドラの氣に入り、彼の唄が彼女の魂を奪ひ（彼は、自作の唄はどれでも二十許り寫しを作つて人にやりましたから）、彼が自ら話したその功名話はレアンドラの耳に入りました。一口に言へば、疑ひもなく悪魔が手筈をした通り、男の方ではまだこの女と戀が出来るといふ己惚の影もさして居らんうちに、女の方から戀しました。一體戀ごとでは、婦人の意が味方になつて居る場合ほど容易く成り立つことはありませんので、レアンドラと半センチは、何の困難もなく互の思ひを通じました。そして數多い求婚者等の誰一人一向にまだそのたくらみを感じかぬうちに、レアンドラは既に事を運んで、自分の懐かしいといふ父親（母親はなかつたのです）の家を脱け出しました。そして例の兵隊と共に、村から姿を隠しました。その兵隊は自分が威張り散らしてゐた澤山の手柄よりも、今度こそ一番得意な手柄をしましたのさ。村中の人も、またこれを聞く残らずの人々も、事の意外に驚きました。私は仰天シアンセルモは茫然自失し、彼女の父親は

悲歎に暮れ、その親類どもは憤り、その筋の人らは騒ぎ出し、「神聖救済組合」の巡邏たちは武装しました。人々は道を探し、森の中も何處も捜しましたが、三日目になつて、とある山の洞穴の中で氣まぐれなレアンドラを見付け出した。あの娘は肌着一枚に剃ぎ取られて、家から持つて逃げた金も價高い寶玉も皆奪はれて居りました。一同してその不幸な父の許へ伴れ歸つて、身の災難のことを訊ねると、レアンドラは強ひられずに白状しましたが、つまり半センチ・デ・ラ・ロサは彼女を騙して結婚するといふ約束の下に世界中で一番富裕であり一番面白い市——ネーブルスへ伴れて行くからと言つて、父の家を遁げ出させたのです。無分別な誰からかレアンドラはそれを信じて、父の物を盗み、そして姿を隠した晩に悉くそれをあの男に渡しました。それから彼に伴れられて険しい山に行き、そして人々に見付けられた例の洞穴の中へ閉ぢ籠められたのです。尚、彼女の話によると、あの兵隊は持ち物は残らず奪ひ取つたが女の操は汚さずに、そのまゝその洞穴に打ちやつて行つて了つたのです。これはいよ／＼ますます人々を驚かせました。私たちに取つては、その若者の節慾を信ずることは容易であります。しかしレアンドラは一生

懸命にそれを辯護しましたので、落膽してゐる父親も、それをせめてもの慰めとしました。父親は、一度失はるれば未來永劫回復されない寶が、自分の娘に残されてある以上は、その外の盜まれた物は何とも思はなんだのです。レアンドラが姿を現はした同じ日に、父は私らの眼から彼女を移して、近くの町の尼寺へ伴れて行つて閉ぢ籠めました。それは時さへ経てば娘の身にふりかゝつた不名譽も幾らか消えようとの望みからです。レアンドラの歳が行かぬことは、その過失に對して一つの申し譯になりました。少くとも彼女が善からうが悪からうが關係のない人にはさうでした。しかし彼女の抜け目なさ、伶俐さを知つてをる人たちは、彼女の不行跡を世間知らずのせみにはしませなんだ。却つてその浮氣性や、またその大部分は氣まぐれな檢束のない女の持ち前の氣質のせみにしました。

『レアンドラが姿を隠しますと、アンセルモの眼は盲になりました。いや、兎に角何を見ても楽しくなくなつてしまひました。また私の眼とても、レアンドラが居らぬ間は眞暗の中に居つて、眼を喜ばせるものゝ方へ向ける一筋の光線もありませなんだ。私たちの氣鬱はだん／＼と烈しくなり私たちの辛抱はだん／＼減りました。私たちはあの兵

隊の美服を呪ひ、レアンドラの父の不注意を罵りました。遂にアンセルモと私とは村を見棄て、この谷へ來ようと相談しました。そしてアンセルモは自分の澤山の羊の群を、私は私の山羊の群をおの／＼養ひながら、この森の中に日を送つて、互に悲しみを吐き出しつゝ、共に美しいレアンドラを讚美する唄を歌ひつゝ、また彼女を罵りつゝ、或ひは獨りきりで溜息を吐いて、孤獨の中に自分等の悶々を天に懇へて居るのでございます。私たちの例に倣うて、澤山レアンドラの戀人等が、この荒れた山中へ参りまして、私たちのやうにして日を送つて居ります。その數の多いことと言つたら、誰でも此處があの牧歌に出るアルカディアになつたかと思ひませう、それほど此處は羊飼ひや羊の檻で一杯になつて居ります。またこゝでは、何處へ行つても美しいレアンドラの名前の聞かれぬ場所とはありません。此處では或る者があの女を呪うて氣まぐれな浮氣な不貞腐れよと呼べば、彼處では他の者があの女を脆くて輕薄ぢやと罵つて居ります。此方ではあの女を大目に見て恕せば、彼方ではあの女を嘲り罵つて居ります。或る者があの女の美しさを讚めれば、他の者はその人柄を攻撃して居ります。つまり皆があの女を罵り、皆があの女を歎美して居



ります。そしてその夢中になつた果てはかういふ始末です、即ちあの女と一言も口を利いたこともなくてあの女の無情をかこつ者があり、またあの女は誰に對しても嫉妬の種は蒔かなんだのに、嫉妬の焰に身を焦して歎き悲しむ者さへあるといふ次第です。と申しますのは、私が先程も申したやうに、あの女は情を通せぬうちにはその不行跡を世間に知られたのですからな。巖の隅も、小川の邊も、森の下蔭も、一ヶ所として、そよ吹く風に胸の悲しみを物語る羊飼ひのうろつき廻つてゐないところはありませぬ。山彦の響く所には必ずレアンドラの名が聞えて居ります。山山は「レアンドラ」「レアンドラ」で鳴り渡り、川々はそれをさゝやいてゐます。そしてレアンドラは私たち一同を惑はし迷はし、望みなきに望ませ、何を心配するとも分らずに心配させます。この馬鹿げた仲間のうちで唯一人ほんの少しばかり、そしてつまり一番餘計に正氣のあるらしいのは私の競争者のアンセルモです。この人は戀ふべきことがいろ／＼ありながら、たゞあの女と別れたことだけを懇へて、上手に弾くリーベック一種の胡弓に合せて、いかにも巧な歎きの唄を歌ひます。私はそれと違つたもつと容易い、そして私の考へでは、もつと賢いやり方を取ります。それは

つまり婦人の輕薄や、不貞や、表裏のある掛け引きや、破約、偽誓など、要するに婦人らがその愛情や、好き好みを決める時に現はす思慮の不足を罵りますのぢや。皆さん、これこそ唯今私がこゝへ参つた時に、この山羊に向つてああいふ言葉や素振を用ひた理由です。つまりこの山羊は私の檻で一番良いのですが、これが牝なので私は蔑んで居るのです。皆さんへお約束した私の物語はこれだけです。私の話しぶりは氣が利かずとも、皆さんをお歡待することに氣を利かませう。私の小屋はすぐ近くです。小屋には新しい牛乳もおいしい乾酪チーズもありますし、舌にも味よく眼にも美しい、うまい様々の果物もありますよ。』

第五十二章

ドン・キホーテと山羊飼ひとの喧嘩。附りドン・キホーテが汗を流して目出度き結末に到らしめたる行者等との稀有の冒險。

その山羊飼ひの物語は凡ての聞き手に大満足を與へた。取り分け役僧はそれを喜んだ。彼はその話しぶりに特別の注意を拂つて氣を附けた。それは田舎者の山羊飼ひの風と

は打つて變つて、垢ぬけのした都會の才子らしいところがあつた。それ故役僧は森が學者を育てると牧師補の言つたことは全く本當だと言つた。彼等は残らずユーゼニオーの爲めに力を藉さうと言つた。しかしその方にかけて最も勞を惜まぬ者はドン・キホーテであつた。彼は山羊飼ひに言つた、『山羊飼ひさん、もし拙者が冒險を企て、もよい境遇にさへ居りましたら、誓つて、今といふ今、お前さんの爲めに申かけて行つて、その尼寺からレアンドラを救うて上げるのぢや(必ずその婦人は、あそこに厭や／＼囚へられてをるのぢやから)、たとへ尼僧やその他の者が私を助けようとしても、そしてお前さんの意のまま好きのままになさるやうに、お前さんの手へ渡すのぢや。尤もそれは、凡そ處女には如何なる暴力も加ふべからずと記してある騎士道の掟に従うてのことぢや。それでこの悪性の魔法使ひの力がいつまでも拙者をかやうに囚へることなく、性質の善い別の魔術使ひの力がこれに打ち勝つやうに、主なる神様にお頼り申して居りますのぢや。その曉には拙者は屹度自分の職掌柄その責めを負うて居るので、お前さんに味方して助け上げてませう。拙者の職務は弱き者窮せる者を扶けることより外はないのぢやからの。』

山羊飼ひはドン・キホーテにじつと眼をつけて、その情けない容貌風采を見て不思議で堪らなかつた。そこでその傍に坐つてゐた理髮師にかう訊ねた、『貴方、あんな姿をしてあんな調子に物を言ふが、一體こりやどういふ人ですかな?』

『これこそ別人ではありません、』と理髮師は言つた、『即ち不義を破り不正を正し、處女を保護し巨人を恐れしめ戦に勝利を得る名高いラ・マンチャのドン・キホーテといふ人ですよ。』

『そりや何だか武者修行の書物の中で讀む名前に似て居るやうですな。あゝいふ連中は、この人が今してござるといふやうなことを残らずしましたよ。尤も、貴方が冗談言うて居られるか、さうでなきやこの紳士が頭の中に空き間をもつてをられるかぢやと私は思ひますがな。』と山羊飼ひは言つた。

『お前は大悪黨ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『お前こそ空つぽの阿呆ぢや。拙者はお前を生んだ淫亂者の阿魔つちよよりか餘つ程賢いのぢや。』そして言葉から行爲に移つて、彼は手近にあつた一塊のパンを掴み取つて山羊飼ひの顔へうんと投げ付けた、それがその鼻柱を低めるほどの勢



ひで。冗談を解しなかつた山羊飼ひは、自分がこんな真剣で辛い目に逢はされたので、毛氈にも卓布にも食事の中の人々にも構はずに、ドン・キホーテに跳びかゝつて喉頭を両手で掴み、あはや彼を締め殺さうとしたが、その刹那サンチョ・パンザが救ひに来て、山羊飼ひの両肩を掴みさま食卓の上へ投げ出したので、皿は割れコップは碎け、食卓の上にあつたものは残らずでんぐり返つて撒き散らされてしまつた。ドン・キホーテは身が自由になつたので、山羊飼ひの上に乗しかゝらうとしたが、顔を血だらけにして、うんとサンチョに蹴られたその山羊飼ひは、四ん這ひになりながら血腥い復讐をしようとして食事用の小刀を捜しまはつてゐた。しかし役僧や牧師補はそれをさせなかつた。けれど理髪師はドン・キホーテを山羊飼ひの下にするやうに工夫してやつた。そこで彼は鐵拳の俄か雨を降らしたので、彼の顔と同じくこの哀れな騎士の顔からも強かに血汐が流れ出た。役僧と牧師補は噴き出しさうになつてゐるし、巡邏どもは面白がつて跳ね廻つてゐた。そしてどちらの側からも、宛ら犬の噛み合ひの時にするやうに、雙方をけしかけた。サンチョは、役僧の下男の一に掴まれてゐてふり離すことが出来ぬので、主人の加勢に行けもせず、獨りで

やきもきしてゐたのである。撲り合つてゐる二人の拳闘者を除いて、他の人々は残らず大喜びで面白がつてゐる折柄、悲しげな調子に響く喇叭の音が聞えて來たので、皆その音の聞えて來たと思はれる方を眺めた。しかし、それを聞いて一番興奮した者はドン・キホーテであつた。彼はひどく無念ながらも山羊飼ひの下になつて、したゝかに毆られてゐたが、山羊飼ひにかう言つた、『おい悪魔さん(お前は拙者に勝つ位の力を有つてをるからにや悪魔に相違ないのぢや)、たつた一時間だけ休戦することに承知して貰ひたい。あの向うから聞えて來るあの嚴かな喇叭の響きは、何か新しい冒險に拙者を呼び立てて居ると見えるからの。』もはや毆つたり毆られたりに厭いてゐた山羊飼ひは直ぐさま彼を放した。そこでドン・キホーテは立上つて、例の音の聞えた方へ眼を向けた。すると突然、行者のやうに白衣を着た數人の男がとある丘の坂路を降りて來るのが見えた。

事の真相はかうであつた、その年は雲が大地から濕氣を取りあげてしまつたので、この地方の各村の人々は各々行列組や祈願組や苦行組を組織して、神がその慈悲の御手を開かれて雨を降らして下さるやうに祈り求めてゐたのであ

る。この目的で直ぐこの近くにある一村の人々が、この谷の一方の側にある神聖な行場へと行列をして行くところであつた。ドン・キホーテはこれ等の行者の異様な服装を見ると、以前にもしばしばそれを見たことのあるのは忘れて、これこそ一つの棒事であつて、しかもこれを處分するのは騎士たる自分の責である、思ひ込んだのであつた。それに彼等は黒い布で蔽うた一つの肖像を携へてゐるので、それこそこれらの悪黨ども無禮な泥棒どもが、身分の高い婦人を引つ攫つて行くところだと考へて、まずその觀念を確かめたのである。この考へが湧くや否や、折柄思ふままに草を食つてゐるロシナンテのところへ、ドン・キホーテは精一杯に走つて行つた。そして鞍の前輪から面靨や楯を外して、瞬く間に面靨を掛け、サンチョに剣を持って來いと呼びかけつゝロシナンテに打ち跨り、楯を片腕に緊と取つて、傍に立つ人々に大聲で呼びかけた、『さア身分あるかたぐ、世に武者修行の道に従ふ騎士の存在が如何に必要であるか分りませうぞ。さアあそこに生捕られて行かぬ、あの立派な婦人を救うて武者修行者が尊敬に價ひするか否かを見せて上げませう。』さう言ひつゝ彼はロシナンテに足を當てた——といふのは拍車がなかつたので——そし

て疾駆け歩で(この信憑すべき物語には、ロシナンテが見事に疾驅するとは一度も書いてないのだが)、例の行者たちに出會はうと駆け出した。尤も役僧や牧師補や理髪師はそれを遮り止めようと駆け寄つたが、それは彼等の手に合はなかつた。またサンチョが次のやうに叫んでも留まらなかつた、『ドン・キホーテの旦那様、何處へ行かつしやるぞい? 何ちふ魔にさゝられて貴方様は私らが天主教の信心に双向ひをなさるのぢや? やれ、情けない! 氣をつけなされ、そりや行者たちの行列でござりますぞい。その興の上にのせてその人等の運んで行くお姫様は、そりや清淨無垢な聖母様でござりますぞい。旦那様、することに氣をつけて下されよ。今度こそは、無我夢中で騒ぎ立てると言はれても仕様がありませんぞよ。』サンチョの骨折りに効がなつた。主人はその白衣の人々のところへ行つて、黒衣の婦人を救はうと一心になつてゐたので、一言も聞えなかつたからである。またよし聞えたとしても、それが王様の命令であつたにせよ、彼は取つて返しはしなかつたであらう。彼は行列のところへ着いたのでロシナンテを停めた。この馬はもう疾くから一と息休みたいと思つてゐたのである。彼は嘆れた興奮した聲で叫んだ、『面靨を隠し居るからには



恐らく良民ではあるまい、さア拙者の言ふ事をよう氣をつけて聞くがよい。』聖像を運んでゐた者等が先づ第一に止つた。祈禱を唱へてゐた四人の僧侶のうちの一人は、ドン・キホーテの異様な風體や瘦せこけたロシナンテや、その他様様の可笑な様子を見て吃驚しながら、彼に答へて言つた、『お前さん、私らのこの一行は皆一身を苦しめてをるので、何か言ひたいことがあるなら手早く願ひませう。二言で言へる位のことなら兎に角ぢやが、何か聞く爲めに止ることも出来ねば、またさうする譯もないのぢやからの。』

『拙者はそれを一言で言はうわい、』とドン・キホーテは答へた、『即ちかうぢや、即座に、今といふ今その美しい婦人を釋して上げい。そのお方の涙や悲しげな面持は明かにお前たちがその意に反して伴れて行くといふことや、この方に對して、何か非道な凌辱を加へたことを示してをるわい。拙者は、かやうな不義を悉く直す爲めにこの世に生れて来た者ゆゑ、お前たちが、このお方の求めて居られる正當の自由を返して上げぬうちは、此處を一步も進ませまいぞよ。』

かういふ言葉に依つて聞き手らは彼を狂人に違ひないと判断した。そして心から笑ひ出した。彼等の笑ひはドン・キ

ホーテの怒りに火薬のやうな働きをした。彼はもはや一言も言はずに劍を引き抜き、その臺を目掛けて突き進んだ。輿を昇いでゐた中の一人は、その荷を仲間の者に任せて置いて、休む時輿を支へる爲めに用ゐる又になつた棒を振り乍らドン・キホーテに向つて来た。そしてドン・キホーテの力強く打下した劍をその棒で受け止めると、棒は二つに切れだが、その残つてゐる部分で彼の右の肩をうんと殴つた。この百姓の打撃に對して楯は効をなさなかつたので、哀れなドン・キホーテは見るも氣の毒な風に地べたへのめつた。

サンチョ・パンザは主人のすぐ後からハッハと息も切れ切れに從いて来て居つたが、主人の倒れるのを見て、大聲を出しながら、その人は魔術にかけられた哀れな騎士で、生れてから誰にも害を加へたことのない人だから、もう打つな、とその相手に言つた。しかし百姓が控へたのは、サンチョのこの叫び聲の爲めではなく、ドン・キホーテが手も足もびくとも動かさないので見たからであつた。そこで百姓は彼を殺してしまつたと思ひ込んで、慌てゝ上着の裾を帯に挿み、鹿のやうに草原を越えて逃げ出した。

折柄ドン・キホーテの一行は、彼が倒れてゐたところへやつて来た。しかし行者等は彼等が走つて来るのを見て、そ

してその中には、弩を持つた「神聖救済組合」の巡邏の居るのを見たので、間違ひが起りはせぬかと氣遣つて、皆々聖像の周りに簇がりつゝ、頭巾を刎ねあげて杖を握つた。僧侶たちは各蠟燭を握つた。そして自ら身を護ると共に、もし出来るなら攻めかゝる者どもに眼にも見せてやらうと決心して敵の攻撃を待ち構へた。しかし幸運は、彼等が待ち設けたよりも良い方へ事件を向けた。といふのは、サンチョはたゞ自分の身體を主人の上に投げ掛けて、世にまたとない悲しげな可笑しげな泣き聲を揚げる外はなかつたからである。それは彼が主人を死んだと思つたからである。牧師補はその行列について歩いてゐた牧師補と知り合ひであつた。それで互にそれと見て雙方の懸念は無くなつた。こちらの牧師補は向うの牧師補にドン・キホーテの人物を手短に物語つた。そこでその牧師補とその行者の一行は、この哀れな紳士が死んでしまふたかどうかと見に来た。するとサンチョ・パンザが眼に涙を浮べてかう言つてゐるのを聞いた、『あゝ、騎士道の花形よ、たゞ杖の一と撃ちで結構な！貴方様の御生涯をおしまひなされるとは情ないことぢや、あゝ、御一家の誇り、ラ・マンチャぢうの、いや／＼全世界の譽れ榮えぢや。貴方様がなけりや、もう悪いこととしても

咎める人がないから、この世はわるもので一杯になりませう！ あゝどんなアレキサンダーよりも鷹揚でおいでなされた旦那様！ 私のたつた八月の御奉公に貴方様は海が取り巻いたり圍んだりしとる上等の島を下されましたもの。高ぶる者にはへり下り、へり下る者には高ぶり、危いことには突き當り、亂暴されても忍び、譯もないのに惚れ込み、善を習ひ、惡を懲らし、卑劣を憎み、一と口に言へばたゞ武者修行様ぢやと言ふより外にはないわい！』

サンチョの泣き悲む聲でドン・キホーテは正氣づいた。そしてその最初の言葉はかうであつた、『芳はしきドルシネアよ、おん身と別れて暮してをる者は、この上にも更に大いなる不幸を忍ばねばならんぢや。こらサンチョよ、拙者を助けて、あの魔術の車に乗せて呉れい。この肩ぶしが粉々に打ち挫かれて、拙者はロシナンテの上に乗れさうもないわい。』

『喜んでさう致しますよ、旦那様、』とサンチョは言つた、『そして貴方様のお爲めを思うてござるこの旦那がたと一緒私らの村へ歸りましょ。そして、も一度新規に出て来る用意を致しましょ。さうすりや今度はもつと儲けもあり名前も揚りましょ。』



『その通りぢや、サンチョー』とドン・キホーテは答へた、『今勢を得て居るこの悪い星廻りを、通り越させる方が賢いからう。』

役僧も牧師補も理髪師も、貴方の言葉通りにする方が非常に賢いやり方であらうと、ドン・キホーテに言つた。そして彼等はサンチョーの愚直を頗る興がりつゝ、前の通り、ドン・キホーテを荷車に乗せた。行列は再び列を整へてその路を進行した。山羊飼ひはこの一團に別れを告げた。「神聖救濟組合」の巡邏たちは、もうこの上従って行くことを辭したので、牧師補は相當の日當を拂つた。役僧は、この後のドン・キホーテの様子を、彼の狂氣が癒えたかやはり惱んで居るかを知らせて呉れるやうにと牧師補に頼んで、さて別れを告げて自分の旅程をつづけた。要するに皆々思ひ／＼に別れて行つて、後には牧師補と理髪師とドン・キホーテとサンチョー・パンザと、それからその主人の如く非常に素直に忍んで萬事を觀てゐたロシナンテだけが残つた。牛牽きは牡牛に鞭を掛け、ドン・キホーテを枯草の束の上に心地よく置いて牧師補の差圖した道を、例の念入りの歩調で進んだ。そして、六日目にドン・キホーテの村へ着いて、眞晝頃に村へ入つた。偶々それは日曜日であつたので、廣市場には人

が一杯ゐた、その中をドン・キホーテの荷車は通つた。人々はこの荷車の中には何かあるのかと寄つてたかつて見に来た。すると、それが自分の村の人なので吃驚してしまつた。一人の男の子はドン・キホーテの留守宅へ走つて行つて、その家婢や姪に、今こゝの御主人なり叔父さんなりが、すつかり搜せて黄色になつて牛車の枯れ草の束の上にへたばつて歸つて來るところだと知らせた。この二人の善良な婦人たちが、泣き聲を立て胸を打つて、あの忌はしい騎士道の書物に更に呪ひを注ぎかけた、その聲は聞くも氣の毒であつた。その騒ぎは、ドン・キホーテが門に着くのをみると又更に初まつた。

ドン・キホーテの歸りを聞いてサンチョー・パンザの女房は走つて來た。この女房は今既に良人がこの人の家來になつて出奔したのだと知つてゐたからである。そしてサンチョーを見ると、第一に女房が訊ねたのは、驢馬は丈夫であるかといふことであつた。サンチョーは、うん、且那樣よりも丈夫だよと答へた。

『まあ有難いこつちや、』と女房は答へた、『お蔭さまで助かります。けれどなアお前さん、御家來になつて行つてどんな儲けがありましたぞいな？ 私にやどんな着物を買

うて來て呉れたぞえ？ 子供にやどんな靴を？』

『お前、私はそんな物は何も持つて來んぞよ、』とサンチョーは答へた、『別の物でもつと大事な値打ちのあるものは持つて來たがな。』

『そりやまあ嬉しいことぢや、』と女房は答へた、『もつと大事な値打ちのある物ちふのを見せなされよ。なア、それでも見て、お前さんの不在の長い月日の間、悲しうて鬱いで居つたこの胸を晴らしましよわい。』

『家へ行つてから見せうわいのう、』とサンチョーは言つた、『今はまあ我慢せよ。それはなア若し運好う、も一度この武者修行の旅に出かけられるやうな具合になりさへすりや、今に私は伯爵様か島の總督様になつて來るのぢや。それもありふれた並のぢやないぞ、最極上のぢやぞ。』

『まあお前さん、さうなりたいたいのぢやの、』と女房は言つた、『ほんとにさうならにやならんもの。けれどなアお前さん、その島ちふのは何のこつちやな。私にや分りませんぞえ。』

『蜜は驢馬の口にや合はんよ、』とサンチョーは答へた、『まあその時が來りや残らず分らうわい、なアお前——いや、お前は皆の家來どもに令夫人様と言はれて魂消うぞよ。』

『何を言ふのぢやえ、サンチョーさん、令夫人様ぢやの、島ぢやの、家來ぢやのと？』とテレサ・パンザは答へた——これがサンチョーの女房の名であつた——尤も二人は血續きではなかつたが、ラ・マンチャでは妻は夫の苗字を取るのが習慣であつたからである。

『テレサや、さう慌てゝ聞かなくてもえゝわい、』とサンチョーは言つた、『私は本當のことを言うとのぢやから、それでえゝぢやないか、まあ黙つとれよ。ぢやが序にこれだけは言うてもえゝがな——世の中にや、えらい人になつて、武者修行の家來になつて、そして冒険を搜しに行くより面白いことはないぞよ。尤も出くはす事は大抵此方の望み通りに面白うは行かんがの。百のうち九十九は意地悪う逆さになるからの。時によると毛布上げにされたり、また時によるとぶん殴られたりして來たので、身に覺えがあるのぢや。そんなことはあつても、やつぱり山を越えたり、森の中を辿つたり、岩に登つたり、お城を訪ねたり、宿屋に泊つたり、何處も彼處も自由自在にひた一文も拂はずに、何が降つて湧いて來るかと思しみにして歩くのは面白いぞよ。』

サンチョー・パンザと彼の女房との間にこの會話の交され



てゐる一方では、家婢と姪とはドン・キホーテを家へ入れて着物を脱がせて彼の馴染の寢臺に寝させた。彼はこの女たちを横目に見た。そして自分が何處に居るかを判じることが出来なかつた。牧師補は自分等が彼を家へ伴れ歸る爲めに已むを得ずしたことも姪に話して、叔父さんを居心地好くして上げるやうに、そしてまた遁げ出すかも知れないからよく見張りをするやうに十分に氣をつけなさいと頼んだ。これを聞いて二人の女たちはまたもやその聲を張り上げて、騎士道の書物を新たに呪ひ、さういふ嘘や痴げごとの作者どもを無間地獄の眞中へ投げ込んで下されいと神に祈つた。要するに、女たちはその叔父であり主人である人が、少し身體が良くなるとまた脱け出しはせぬかと、氣遣ひ恐れてばかりゐたのである。またそれは、彼等が氣遣つてゐた通りになつてしまつたのである。

しかしこの物語の作者は、ドン・キホーテによつてその第三次の出遊中に成し遂げられた事蹟を發見せうと、精査勤勉頗る努むるところがあつたけれども、何等それに關する消息を、少くとも信憑すべき記録から出た消息を、手に入ることは出来なかつた。たゞドン・キホーテが三度自分の家を飛び出してサラゴッサへ行き、その市で擧行された有名

な馬上試合に臨んだことや、またそこで彼の勇氣と優れた智謀にふさはしい種々の冒險を試みたといふことだけが、言ひ傳へとしてラ・マンチャの記録に遺されて居るばかりである。もし好運が一人の老醫師を作者に引き合さなかつたら、作者はドン・キホーテの最後や臨終に就いて何等詳細なことを知ることが出来なかつたであらうし、またその死を確かめることも聞き知ること出来なかつたであらう。その老醫師は一つの鉛の箱を所有してゐた。それは、彼自らの話によると、或る古い隱者の庵の建て直される時、その崩れた土臺の中から發見されたのであつた。その相の中にはゴシック文字でカステリア語の詩句を書いた若干の羊皮紙の書き物が見出された。それにはドン・キホーテの様々な事蹟を述べ、ドゥルシネアの美しさ、ロシナンテの風手、サンチョ・パンザの忠節、及びドン・キホーテその人の埋葬式などを記し、尙また彼の生涯や性格に對する種々様々の碑銘や頌徳詩もあつた。しかしその中で讀んで判ずることの出来たものは、この斬新無比なる物語の信憑すべき作者が此處に掲げるだけのものに過ぎない。而して件の作者はその功績を世に知らしめん爲めに、マンチャの古文書を精査探究するに當つて自ら捧げた莫大の勞力に對しては、こ

れを讀む人々に何等の報酬をも要求しない。たゞ今の世に普及して非常な人氣を博してをる騎士道の書物に向つて常識ある人々が拂うて居るのと同様の信用を彼に與へてくれればそれで宜い。蓋し作者はそれを以て自らゆたかに報いられ十分に満足したりとなすであらう。さすればまたそれに勵まされて、この物語ほどに信は置けずとも、せめてその創意に於ては等しく、面白さに於ても劣らぬやうな、外の物語を見付けて書くやうな氣になるであらう。鉛の箱の中にあつた羊皮紙に書かれてある最初の言葉はかうであつた――

ラ・マンチャの一村、  
アルガマシラの學士等

ラ・マンチャのドン・キホーテの生涯及び臨終に就いて之を録す。

ドン・キホーテの墓石の上に  
アルガマシラの學士、モニコンゴ  
碑 銘

ジーソンギリシヤ傳説中の遠征の勇將の戦利品に優るものを  
ラ・マンチャに與へし氣まぐれ者。

その機智の尖端の鋭さよ、  
もしその機智の風見機の尖端鈍かりせば、更に幸多かりけん。

武名はガエータイ南部の港の岸邊よりカセーまでの

あらゆる國々に遠く轟けり。

思慮は細やかに容貌はたけなくしく

さながら往昔の金板に鐫られしものゝ如し。

その戀と武俠とに扶けられて、

あらゆるアマデイスの族を壓倒し

ガラオルの族を物の數ともせず、

ロシナンテに跨りつゝ譽を索めて

ペリアニスの族を屏息せしめし

彼こそ、此處に、この冷たき石碑の下に眠るなれ。

ドゥルシネア・デル・トボソの讚美の爲めに

アルガマシラの學士、パニャグッド

ソネット



ラ・マンチャの勇士ドン・キホーテが  
むなしく胸を焦せしドルシネアの  
全き姿を茲に記さん、  
そは胸高く傲然たる風情。

トボソの女王なる處女のために、  
彼は物凄き連山の彼方此方、さては名にし負ふ  
モンテエルの野原もアランジュエズの曠野も  
疲れしロシナンテに跨りて往來しぬ。  
意地悪き星、残忍の宿命は、  
無敵なる騎士道の明星にも  
美しきマンチャの處女にも追ひ迫りぬ。  
若さも美しさも、死の招きより彼女を許さず。  
勇士は苦き戀の苦行を勤め  
かくて名を大理石にとどめぬ。

ラ・マンチャのドン・キホーテの駿馬、ロシナンテの讚美  
の爲めに

最も聰明なるアルガマシラの學士、カブリチョソ  
ソネット

血汐流るゝマーズの足の踏みしてふ  
金剛光の誇らしき玉座には  
今こそいとも勇ましく掲げられたり  
狂へるマンチャの騎士の旗じるし。  
そこに懸けたる甲冑と鋭き打ち物は  
これぞ斬りつ刻みつ突き刺し倒しつ  
未曾有の高名を遂げしもの。

わが新しき騎士の爲めには藝術の一新體生れぬ。  
もしゴールの誇る矜持がアマデイスならば、  
またその子孫がギリシャの名譽を

治く世界に擴ぐるならば、  
物凄きベロナ怒りの制敵者  
戦陣の女神の宮に王たりし大キホー  
テこそ

今ぞラ・マンチャの位を高めて  
ギリシャ、ゴールを平伏せしむれ。  
彼の榮譽はこれに盡きず。彼の良き駿馬こそ  
ブリラドル勇士オルラン  
ドーの乗馬にもバヤード勇士リナル  
ドーの乗馬にも  
遙かまさるを。  
精悍なる駿馬もロシナンテに比ぶれば  
その得たる譽は乏し。

サンチョ・パンザの爲めに

アルガマシラの學士、ブルラドール  
ソネット

見よこゝに忠臣サンチョ・パンザあり。  
嘗てその大靈はその小軀に宿りき、  
渾圓地上未だかくも率直に質實に、  
かくも偽りなき従士はあらざりき。  
間一髪にして伯爵たるべかりしを、  
馬鹿者たることをすら許さざる  
この鄙吝なる悪時代の  
怨恨悪意だになかりせば。  
驢馬驢馬は愚者に打ち跨り  
の意に許す(この言葉を許せかし)  
この柔和の従士はロシナンテに引き添ひて  
主君にかしづき遍歴するを常としき。  
たやすくかなはせんと、衆生をまどはす  
伴りの希望は、心の願ひは  
影となり夢となり烟となりて常に終る。

ドン・キホーテの墓石に

アルガマシラの學士、カチデアプロ  
碑 銘

騎士はこの下に眠る、  
ロシナンテに運ばれて  
彼方此方と廻りつゝ  
道には迷ひ重傷は負ひつ。  
この騎士の傍には  
律義者なるサンチョも眠る、  
これに優る忠臣は  
従士職中にかつてなかりき。

ドルシネア・デル・トボソの墓石に  
アルガマシラの學士、ティキトック  
碑 銘

こゝにドルシネアは眠る。  
彼女は肥え太りて逞ましかりき、  
今や彼女は灰となり塵となりぬ、



そは死すべき一切の肉身の終りなり。  
 彼の女は上臈じやうらふの風情ある  
 位高き婦人にして、  
 勇士ドン・キホーテの愛人たり  
 また生れし村の誇りなりき。

以上が判讀の出來た詩の凡てであつた。その餘は蟲に喰はれてゐたので、その意味を推測して讀んで貰ふ爲めに學士の一人に渡された。我等の聞くところによれば、その學士は、幾晩も徹夜し、非常に骨折をして遂に成功したさうで、尙ドン・キホーテの第三回の出遊を傳へる爲めにそれを出版するつもりなさうである。

*Forse altro cantera con miglior plettro.*

(恐らくは別人が至上の琴もて歌ふならん)

テ・ホ・キ・ン・ド

—了—



非賣品

世界文學全集(4)  
 第三回配本

テ・ホ・キ・ン・ド

昭和二年五月一日印刷  
 昭和二年五月十五日發行

植木製本所(廣橋納)

翻譯者 片上 伸  
 發行者 佐藤 義亮

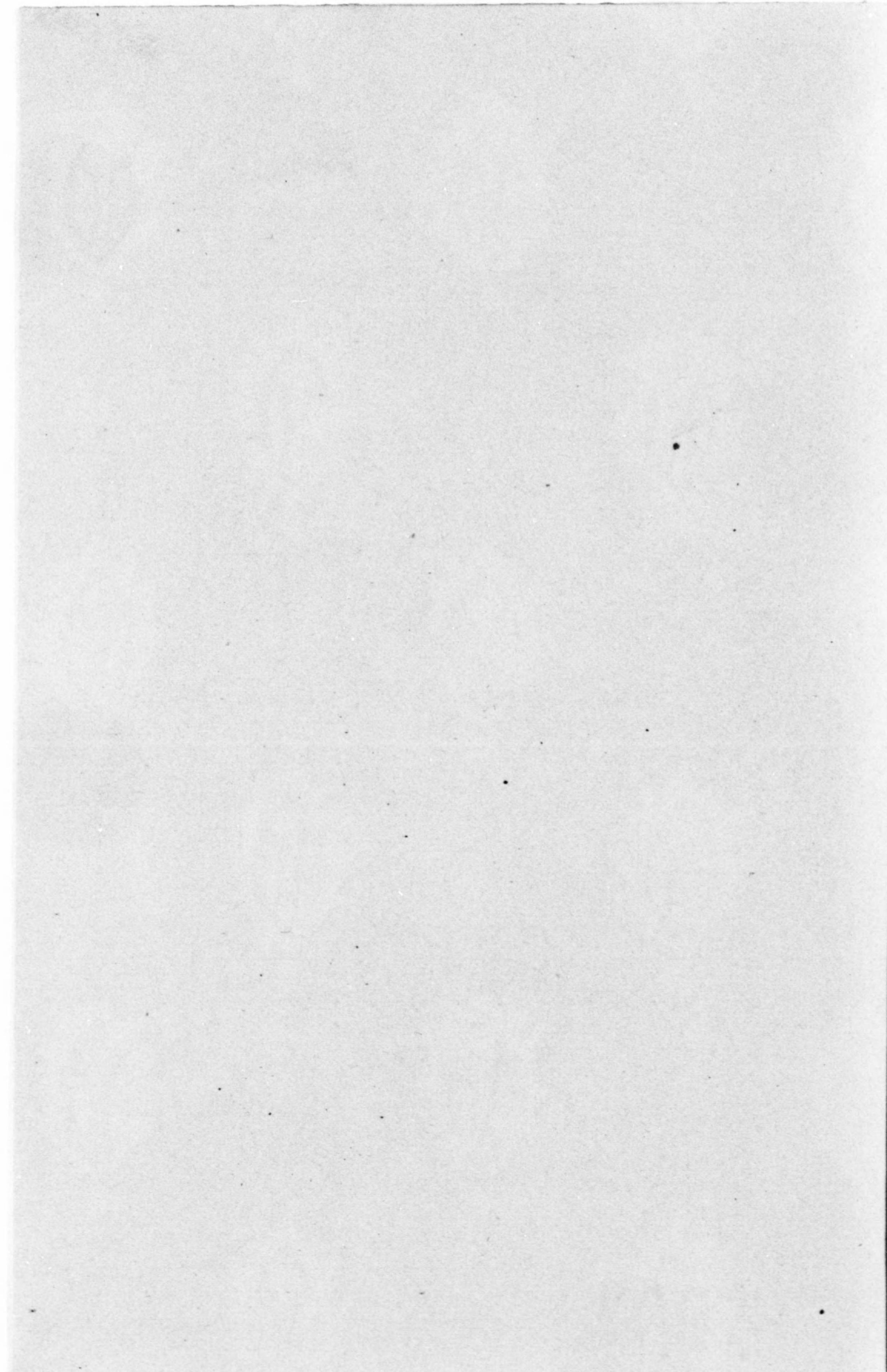
東京市牛込區矢來町三番地

發行所 新潮社

電話牛込 長  
 八八八八  
 〇〇〇〇  
 九八七六  
 番番番番  
 振替東京 二三四五〇番

東京小石川區西戸川町 富士印刷株式會社印刷

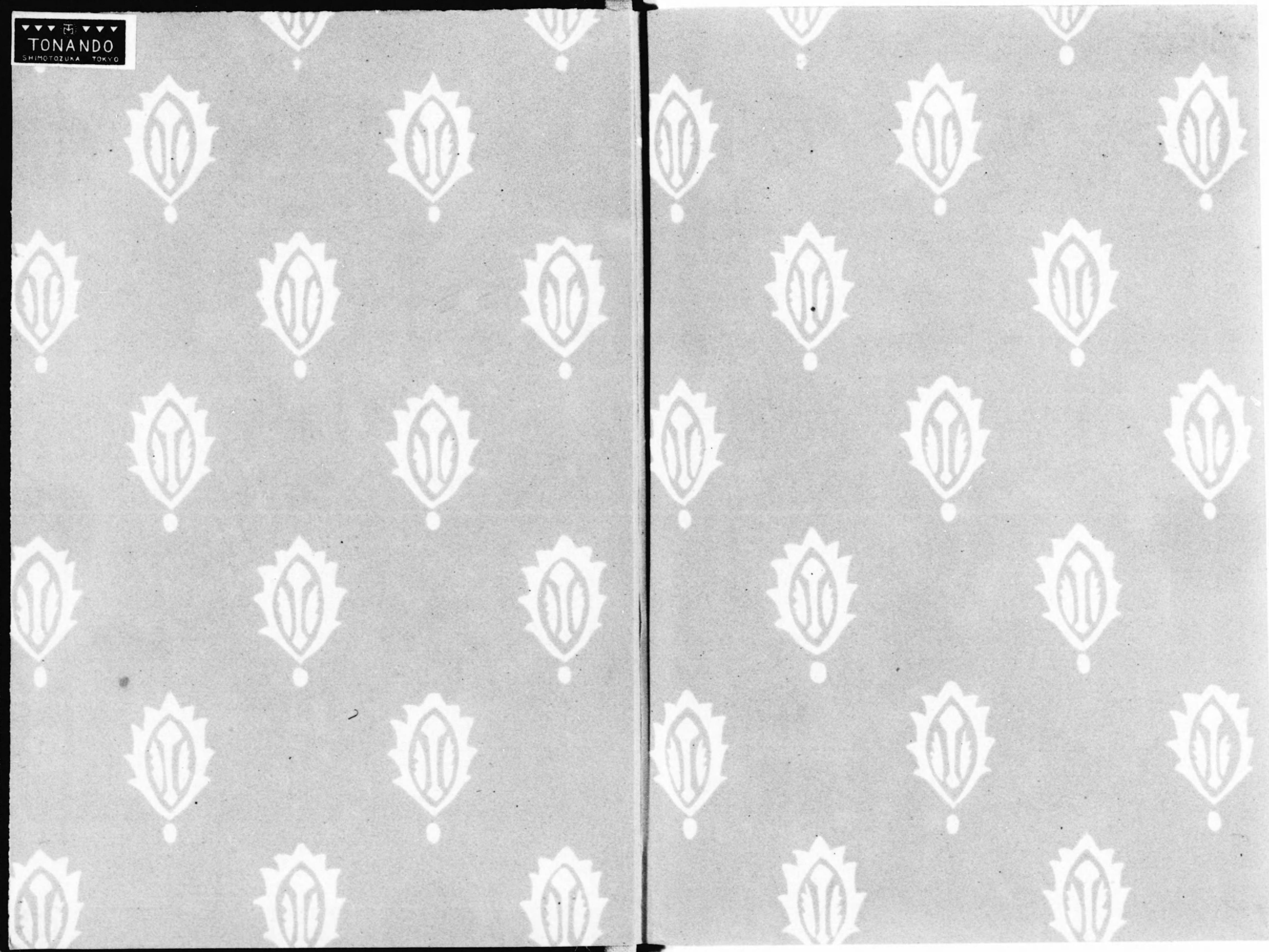




Blank page with faint horizontal lines and ghosting of text from the reverse side.



西  
TONANDO  
SHIMOTOZUNA TOKYO





終

